



361  
693



始





特 230  
776



佛文館藏  
佛文新選

文學士 穎原退藏 校註  
東京 大倉廣文堂 發行





俳文俳論新選 目次

前篇俳文集

柴門 <small>ノ</small> 辭	一
瓢 <small>ノ</small> 辭	二
鉢叩 <small>ノ</small> 辭	三
燒蚊辭	五
鼠 <small>ノ</small> 賦	六
四梅廬 <small>ノ</small> 賦	八
百花 <small>ノ</small> 譜	一〇
蓑蟲 <small>ノ</small> 說	一一
嘲宵惑 <small>ノ</small> 說	一九
落柿舍 <small>ノ</small> 記	二三
幻住菴 <small>ノ</small> 說	三四

目次

一



鹿島紀行	二七
南行紀	二九
宴 <sup>ニ</sup> 柳後園 <sup>ニ</sup> 序	三三
銀河序	三四
嵐蘭誅	三五
俳諧發願文	三六
詩歌俳諧辯	三七
手足辯	四〇
仁不仁論	四一
奥の細道	四二
奈良團贊	七一
長短解	七二
木履說	七三
鬼傳	七四

鍋蓋額贊	七六
鼻箴	七七
物忘翁傳	七八
妖物論	八〇
百魚譜	八一
百蟲譜	八六
去來抄敘	九一
洛東芭蕉菴再興記	九二
字治行	九五
春風馬堤曲	九六
葛の翁圖贊	九八
おらが春	九九
三猿箴	一〇三
はたけぜり跋	一〇五



後篇俳論集

目次

四

獨吟千句跋……………一〇八

御傘序……………一〇九

誹諧初學抄……………一一二

寓言……………一二四

獨言……………一二六

祖翁口訣……………一三三

黒さうし……………一三四

移・響・句・位……………一三五

寂・柔・細み……………一三九

不易流行……………一三〇

發句調鍊の辨……………一三七

滑稽論……………一四一

新古論……………一四四

虛實の論……………一四八

芭蕉論……………一五三

片歌論……………一五六

夜半茗話……………一五九

正風論……………一六一

姿情の事……………一六五

三の情の事……………一六六

俳諧小言……………一六七

空想と寫實……………一七〇

寫生……………一七三

新俳句と月並句……………一七四

芭蕉と燕村……………一七六

—目次終—

目次

五



前  
篇  
俳  
文  
集







※許由はかしがま  
しと云々逸士傳  
草の唐に許由と  
いへる人は更  
に隨へたる著  
なくとも水も  
してさく水を  
瓢をいふもの  
の得さたりけ  
ば、或時木の  
かたりければ  
風を吹かれて  
しと捨てつ  
※楊墨が志に云々  
遠路を哭し之  
其可以南一可  
北の墨子見練  
而泣之爲其可  
以黃之可中黑  
※五條あたり云々  
源氏物語夕貞  
※宇拾の物語一  
治拾遺物語卷三  
※鉢叩き一和漢  
才圖會一鉢叩  
與尋常俗無別  
著編綴洛内外  
來敲瓢箪唱名  
佛、又販茶釜爲

瓢のたのしびは賢人の上、里の子はしるまじ。草苺の中より、其の賢人くらべなら  
ば、許由はかしがましと捨てたりとのしる。あるじいよく勝に乗つて、かゝ  
る名物もしらず、汝等は田植の煎茶せんぢやを入れ、種物の納所なまごころとおぼえたるこそ口をしけ  
れ。花はむつかしき色もなく、楊墨が志に叶ひ、源氏の巻の名となり、歌人の腸  
にまとひたる夕顔ぞかし。

抑々夕顔の玉樓金殿にさがりたる由緒をしらず、たゞ喰物とほしき五條あたりに  
徘徊して、貧乏神の神木はこれなるべし。隠士が曰く、汝宇治の物語をしらずや。  
答へて曰く、其の拾遺の瓢も、各なき隣人が一命を絶てり。これ全く瓢の罪といは  
む。かゝる目出たきひさごに何の罪かあらむ。かれ佛縁深きゆゑ空也上人には携へ  
られ、鉢叩きの祖師とはなりける。かのさゞ波や、堅田の海士が海老すくひも佛縁  
の内かとぞいひける。隠士大きにうち腹立ちて、汝がいひ分皆々理窟の論なり、曾  
て風雅を知らず。古人生前一瓢の樂は身の後の金よりは勝したりといへり。草刈が  
曰く、其の樂といつば上戸の情なり。瓢のかたちをいひむ。腹便々と肥えふとりて  
口のせまきは何ぞや。狭くて餅の入らざるは下戸のなげきなりと大笑して、歌つて

曰く、滄浪の水すめらばつけて泳ぐべし、濁らば鯰を押ふべしといひて、去つて共  
に物いはず。  
(風俗文選)

鉢叩、辭

去來

師走も二十四日、冬も限りなれば、鉢叩聞かむと例の翁のわたりましける。こよ  
ひは風はげしく雨をぼふりて、頼にも來らねば、いかに待ちわび給ひなむといふか  
り思ひて、  
箒こせ真似ても見せむ鉢叩と、灰吹の竹うち鳴らしける、其の聲妙也。火宅を出  
でよとほのめかしぬれど、猶あはれなるふしぐの似るべくもあらず。彼が修行は、  
瓢箪を鳴らし鉦うち叩き、二人三人つれてもうたひ、掛け合ひても諷ふ。其の唱歌  
は空也の作也。かくて寒の中と春秋の彼岸は、晝夜をわかず、都のそと七所の三昧

業、……空也上人  
法流……古者敲  
鉢今代瓢箪一  
海老すくひ一瓢  
をたてに切り割り  
たるものにて海老  
を掬ひとるなり  
※古人生前云々  
白氏文集身後堆  
金柱北斗不レ如  
生前一樽酒  
滄浪の水一漁父  
辭滄浪之水清兮  
可以濯我纓滄  
浪之水濁兮可以  
濯我足  
※鯰を押ふ一諺  
一瓢箪で鯰を押へ  
る  
※去つて共に物い  
はず一漁父辭一遂  
去不復與言一  
※去來一寶永元年  
前長崎の人、向井  
義長、通稱平次郎、  
義堂、通稱平次郎、  
舎の別號あり、落柿  
く父に伴はれて上  
洛し、又芭蕉性俳  
を學び、師に奉ず  
厚く、師に奉ず  
ること厚く、西三  
十三ヶ國の俳諧奉

行と稱せらる。著  
湖東問答、伊勢紀  
行等。芭蕉落柿舎を  
訪れしなり。  
※鉢叩一瓢箪の條  
に出づ。  
※火宅を出てよ一  
鉢叩の歌詞「無常  
眼の前に來て、火  
宅を出てよと勤む  
れど、名利の心強  
ければ、聞いてお  
どろく人もなし。」  
この歌は空也上人  
の作と傳ふ。  
※七所の三昧一鳥  
部野、阿彌陀峰、新  
黒谷、舟岡、西院、  
狐塚、金光寺。



※我が家はづかし  
 湖春は北村季吟の  
 長子。叩かぬ時も  
 一面白や叩かぬ時  
 江勝所本多家の臣  
 菅沼外記。四方に  
 ※四方にからげ一  
 の髪結び方。種  
 ※月雪に一月雪  
 や鉢叩名は甚之  
 人、越人は北越の  
 越智十藏、別號を  
 負山子といふ。  
 ※ことごとく  
 じ悉く寢覺はやら  
 ※かへり聞かむも  
 後にその事が人の  
 耳に入る。八坂  
 ※長嘯の墓あり  
 高臺寺にあり。長  
 嘯は木下若安三勝  
 俊の號。慶安三年  
 三月歿。句は長嘯  
 の「舉白集」に鉢  
 の文あるに由る。叩  
 ※嵐蘭元祿六年  
 前島原の城主松倉

をめぐりぬ。無縁の手向のたふとければ、かの湖春も我が家はづかしとはいへり。  
 常は杖のさきに茶筌をさし、大路小路に出でて商ふ。業かはりぬれど様同じければ、  
 叩かぬ時も鉢叩とぞ曲翠は申されける。或は月代さかきをすり、或は四方にからげ、法師  
 ならぬ姿の衣引きかけたれど、それも墨染にはあらず、多くは萌黄に鷹の羽うち違  
 へたる紋をつけて着たれば、月雪に名は甚之丞と越人も興じ侍る。されば其角法師  
 が去年の冬、ことごとく寢覺はやらじと吟じけるも、ひとり聞くにやたへざりけむ。  
 打ちとけて寝たらむは、かへり聞かむも口惜しかるべし、明かしてこそとの給ひけ  
 る。横雲の影よりからびたる聲して出で來れり。げに老いばれ足弱きものは、友ど  
 ちにも歩みおくれ、ひとり今にやなりぬらむと、翁の長嘯の墓もめぐるか鉢叩と、  
 聞え給ひけるは、此の曉の事にてぞ侍りける。  
 (風俗文選)

焼蚊辭

嵐蘭

蚊、蚊、帳中の蚊、汝を焼くに辭をもてす。汝此の辭を聞く時は、わが手に死す

侯の臣。松倉氏、  
 名は盛敬、通稱文  
 右衛門法名團室  
 宗鐵居士。主家致  
 落後江戶に來り住  
 す。著書「器栗合  
 ※澤雄云々」  
 子、養主篇、百  
 雄十歩一啄、百少  
 一飲、不、不、不、  
 焚中。

※いく偽の夜い  
 ※く偽の偽の夜い  
 ※義經逆落し平  
 家物語卷九、源平  
 盛衰記卷廿七。平  
 ※須山小宮山、太  
 平記卷三、陶山小  
 見山夜討の事の  
 條。  
 ※虞舜は舜の父  
 舜、舜を殺さむ  
 として、舜を塗ら  
 め、下より火を放  
 ちて、舜を焼く。又  
 井を凌へしめて、  
 より土を投じて、  
 を蓋ひしに、舜之  
 を避けて逃れしを  
 云ふ。(孟子)  
 ※跖、共盜跖  
 楚也。莊、共盜跖

とも自ら足れりとせよ。それ澤雄は焚中にやしなはれむ事をねがはずと、彼は心を  
 とる、これは食をもとめて人の肌迫る。かれを愛せむや、これを憎まむや。  
 ききすは草にかくれて草の爲に焼かる。汝は帳に入つて帳の爲に焼かる。あはれ  
 なる方いづれとかせむや。  
 蟬・促織こころぎの火に入るは、戀ゆゑと聞けばわりなしや。雨に濡れ露にそぼちて、さ  
 そはれし風だにもつらし。げに玉の緒の絶えなむ事もしらず、いく偽の夜や頼み來  
 し。汝が焼かる、事何を情とせむ。義經の逆落しは暫時しばらくさしおく。須山小宮山が夜  
 討は、隠れて謀をなすといへども、天下の爲にして名おのづから従ふ。又汝といは  
 むや。  
 ※虞舜は頑父をさけ、日本武尊は夷賊をのがれ給ふ。共に天にして、汝といふべき  
 にあらず。大盜あに樞戸を穿たむや。汝がふるまふを見るに、帳を垂る、時は其の  
 翻々の間をうかひ、垂れ終つて縦横の透間をたづね、すべて小破の所を求め、人  
 のしりへにつきて入らむと謀る。嗚呼跖躒が徒にはあらず。  
 すべて汝が行ふ處、猛き事もなく樂しむ事もなし。あはれなる方にもやさしき方



※子やなかむ一萬葉集、山上憶良、憶良らは今はまからむ子なくらむ其子の母も吾を待つらむぞ

※圖はづれ一並外

※大棗をかむ牙云々一其の齒牙に毒ありと也

※男女の中一古今集序一男女の中を和らげの選用

※あやしき集を作馬の尾に鼠一夜の愛中を産みしが、是平家滅亡の瑞相なりといへる

※物語、盛衰記等に見ゆ

※倭人のためし一城狐社鼠などいふ

※書を焚く代の宰相一李斯廁中の鼠と倉中の鼠とを見

荀卿に學んで終に

秦始皇帝の丞相となる。(史記李斯傳)

※草の根をはむ云々一夫木抄、俊頼一わがたのむ草の根をはむ鼠ぞと思へば月のうらめしきかな一この歌詞林拾葉集には俊成の作とせり

※東坡が袋を逃げ云々一東坡、黠鼠賦に一聲在囊中、視之無有、舉燭而索、中有死鼠、覆而出之、墮地而走

※張湯が文一漢書張湯傳に、張湯杜陵人也、父爲長安丞、出湯爲兒守舍、還湯盜肉、父怒、答湯、湯掘熏鼠、掠治、傳爰、劫

下肉一鼠與鞠論報、并取鼠與

辭一如老獄吏

※吹鼠一鼠の皮肉の間を吹込めば膨らんで鼠苦しむ。兒

童の惡戯とす。

にもあらず、たゞ憎むべきものの甚だしき也。

蚊、蚊、帳中の蚊、汝を焼くに辭をもてす。汝此の言葉を聞く時は、我が手に死すともみづから足れりとせよ。

子やなかむその子の母も蚊の喰はむ

(風俗文選)

鼠 賦

去 來

鼠。一つの名はよめが君、又よめともよめり。其のたね品あり。四尺の鼠は圖はづれにして、大なるは五六寸、小さきは寸にみたず。山椒の眼、小豆の鼻、齒は絲をつけて小袖も縫ふべく、耳は木の芽のめだつに似たり。尾を切つて錐のさやとなさばなしてむ。背腹の色にめでて、うすくも濃くも染出だせり。其の行くや、夜出でて晝隠る。常にぬすみをもて身を養ふ。まことに憎むべきもの、一つなり。乃賦を作りて曰く。

二月鼠の穴を塞ぐ。つくつく汝がいたづらを思へ。家にゐて人を恐るゝは足のう

らに疵持ちけらし。油を飲むこと世の酒にひとしけれど、いつしか沈酔を見ず。粟を盡し、器をそこなふは殊更にいはじ、大棗をかむ牙にふるれば病を生ず。恥づかしき文をちらして男女の中をもさまたげ、あやしき巢を作りて源平の亂をさく。何をへつらひて倭人のためしに引出でられ、いかにすゝめてか書を焚く代の宰相となしぬる。神佛のたふときも尿糞に汚したてまつる。草の根をはむ月の鼠は俊成卿のうらみなりけり。つくつく汝が危きを思へ。それ人の賢しきや、萬木鼈をまき、吹矢をまうけ、綱をぬりて、往來もたやすからず。けはしき城をたのむとも鼬を防ぐ手段はあらず。杓なる空をながめては鳶のつがまむ愁忘るべからず。桁走り、障子のぼり、早業得たりがほなるも、思はず升にかゝりていかばかりの思ひをすらむ。虚死して仕合せに東坡が袋を逃げたりとも、生捕られてなまなか張湯が文を受けなむ。或は鈴を頸にさげて兒童の戯れとなり、或は筆の用に髭をぬかれて老の悔を残せり。あやまりて晝鼠とあなづられ、濡鼠と笑はれ、更に吹鼠とくるしみて人の爲にぞ悦ばれぬる。我さへかなしきを、焼鼠となりて狐狸の命とらむこそ、あさましく罪ふかけれ。つくつく汝が尊きを思へ。日よみの初に呼ばれて、位司いやしか







百花譜

※水陸草木一周茂  
叔の愛蓮説に「水  
陸草木五花」可<sub>レ</sub>愛  
者甚蕃<sub>レ</sub>」  
※十月一陽一易に  
一陽始めて生ずと  
云ふ。  
※吉野一鳥原の太  
夫。後灰一犀紹益の  
妻となり、寛永八  
年年卅一歳にして  
歿す。  
※高尾一二代目高  
尾。吉原の名妓、  
伊達綱宗の寵を受  
く。  
※相火一肝氣。  
※はずんだる男一  
いきごみ強き男。

當世の人の花過ぎ、古人の實すぎたる、何れの時か花實兼備の世あらむ。梅の風骨たる事、水陸草木の中に似たる物はあらず。十月一陽の氣に、燦々たる江南の玉妃まづ笑めるより、生涯を物ずきにくるしみ、風流のほそみに終る。是を色にたとへて言はゞ、吉野・高尾などいふべき遊君の、心おとなしく名を恥ぢ、いき過ぎたる心より、相火の高ぶり、かたち瘦せぎすに、涙もろく、きのふの我に飽きける心より、一度着たる衣類調度など再び目にもかけず人にうちくれ、金くれる男なれども愚癡なるにはすりぬけ、請出さるゝ場所をばづして、はずんだる男の一言に百年の富貴をかへたり。借錢の利に利をかさね、やう／＼盛りも過ぎたる比、生前の本望を遂げて、幽なる住居に朝夕の烟をたてても、猶物ずき風流のほそみに富めり。子さへなくて夏冬の寢覺めもやすし。待つ事もなくて世を靜にいとなみ、同穴のかたらひをなせる人に似たり。

紅梅といふ花は、一度彼岸参りの心を動かし、未開紅の光を放ちぬれども、やが

※大躍一狂言の切  
に江戸は長唄出ば  
やし、京阪は地唄  
にて風流大躍と名  
付け、毎秋之を演  
じたり。  
※當風一當世風。

※太夫一女形の立  
役。

※たいあり一普通  
尋常などの意。  
※ありがゝり一あ  
るべき通りに。

て蒼くだけ花ひらけてより、日々に衰へ、雨風を帯び、夕日にしらけてつぼめる色を失ふ。例へば三十過ぎたる野郎の大躍につらなり、心ならず風流をつくりたる心地ぞする。

櫻は、全盛の傾城なり。天晴當風に打ちこみたる風俗、行末明日のたくはへの一點もなき花なり。

海棠は、同じく時を得たる野郎の、太夫と仰がれ、勢もさかんに、世の中猛とののしれども、質素にしてうるほひ少し。誠に香のなき一色の缺けたる心地こそ本意なけれ。

梨花は、本妻の傍に侍る妾のごとし。よろづ物思ひにうちしづみ、常に人の下にたてるが如し。

椿は、たいありの人の本妻とむかへたるが、はでなる風俗をも似せず、ありがゝりに家を治め、身を修めるをもととし侍れども、さすがに女色なれば、うす化粧に紅粉をたえさぬ身持のよき花なり。

桃は、元來いやしき木ぶりにて、梅櫻の物ずき風流なる氣色も見えず、たとへば



※一戚一跡。持物すつかりの意。

※山吹の清げなる  
|徒然草一山吹の  
清げに藤のおぼつ  
かなき様したる。

※長春一庚申薔  
花。四季咲きの花  
なり。

※ねよげに見ゆる  
|伊勢物語に「う  
らわかみねよげに  
見ゆる若草を人の  
結ばむことをしぞ  
思ふ」

下司の子の俄かに化粧し、<sup>※じっせき</sup>一戚を着飾りて出でたるが如し。爛熳と咲きみだれたる中にも、首筋小耳のあたりに産毛の深きところありて卑し。

藤は、執心のふかき花なり。いかなるうらみをか下に持ちけむ、いとおぼつかなし。

※山吹のきよげなる。眉目容<sup>かたち</sup>すぐれ、鼻筋おし通り、襟まはり奇麗に生れつき、たゞ透きとほるなんと言へるばかりにて、さして命をかけてと思はざるたぐひこそ女の本意とはいふまじけれ。

※長春、薔薇<sup>しょうひ</sup>のたぐひは、紅白美しく粧ひたるには似たれど、元来いやしき花の、殊に盛り久しきこそうたてけれ。たとへば惣嫁といへる辻君の、日の暮るゝを待ちかね、世上に徘徊し、物心覺えてよりその流をたてて、五十に近き比まで振袖を着し、はじめもなく終もなきこそうるさけれ。

牡丹は、寵愛時を得たる<sup>てかけ</sup>妾の、天下に憚れる心なげにうち誇り、常は嫉妬我執のいかり深くして、青天に向つて吐息をつきたる風情に似たり。

芍薬といふ花は、未だ嫁せざる娘の齡も二八にあまりたるが、<sup>※</sup>ねよげに見ゆる心

地ぞする。

罌粟は、眉目容勝れ髪長く、常は西施が鏡を愛して粧臺に眠り、後世なんどの事は露ばかり心にかけてぬ身の、一念のうらみによりて<sup>※</sup>こそ剃りこぼして、尼になりたるこそ肝つぶるゝわざなれ。

杜若は、<sup>※</sup>のぶとき花なり。美しき女の盗みして、恥を知らぬに似たり。

あやめは、小造りなる女の、目を病める心地ぞする。

百合花は、數品多し。笹ゆり・博多ゆり・鬼ゆり、色は異なれども元來一種にして、生得いやしき花なり。たとへば輿車に乗れる位なければ、<sup>※</sup>かゝへ帯つよくからげあげ、<sup>※かみ</sup>上づりに脛高く歩み出でたる女に似たり。姫百合は、十二三ばかりなる娘の、うしろに帯美しく結びたるが如し。

合歡の花のねぶげなるは、深閨の中に縫物をかゝへ、晝眠る女に似たり。過ぎにし夜半のいかなる事かありて、かくは眠りけむ、いと覺束なし。

其の下に晝顔の目をさましたるは、<sup>※</sup>廿に近き比まで男心を知らぬ女の、はじめて宮づかへに出でたる比の、よろづつきなき有様ならむか。

※かゝへ帯しご  
き。

※上づりし衣服の  
高くつり上りたる  
さま。

※こそと剃りこぼ  
して云々一罌粟の  
花散りて後、坊主  
頭となるを喻へし  
なり。

※のぶとき一づら  
くしき。



※白いもー白き痘痕。

紫陽花の花は、色白に肥えふとりたるが、近くよりて見れば、※しろいも白病瘡のあとの隙間もなく、興さめてやみぬ。

蓮は、美しき所少し。たとへば上手の繪にかける天人の顔にひとし。どこやら佛めきて、心こそおかるれ。

卯の花は、第一名目よし。ほととぎすの來べき比は、必ず咲くとおぼえたるこそをかしけれ。うつ木の花といふ人は無下のことなり。卯の花月夜の夕涼みに、しろめなる衣裳に黒き帯しなしたる女のふとうちつれたるが、行きちがふ程もなくたち別れて、顔のほどもおぼつかなく見返せば、はや尻影ばかりを見送りたる心地ぞする。何方へか通ふらむと、いとなつかし。

朝顔の盛り少きは、よき女の常は病勝ちにうちなやみ、※土用・八專のかはるく、隙なきにうち臥し、一月の日數も廿日はかしらからげ引込みたるが、たま／＼空晴れきり、朝日さし出でたるに、心地よげにうち粧ひ、衣裳など改めてほのめき出でたるには似たり。

鶏頭は、※和のなき花なり。よからぬ女の、一すぢに貞女をたてるが如し。

※土用十八日を一期として一年に四度あり。  
※八專一壬子の日より癸亥に至る十六日間にて一年に六度あり。

※和ーやはらかみ

※らにの花は云々  
一野ざらし紀行  
一蘭の香や蝶の翅  
にたきものす  
※我落ちにき云々  
古今集、僧正遍  
照一名にめで、折  
れるばかりぞ女郎  
花われおちにきと  
人に語るな  
※よろめきたる  
一芭蕉一ひよろひ  
よろと猶露けしや  
女郎花一  
※比丘尼一人倫訓  
蒙圖彙一歌比丘尼  
はもと清降の立  
派にて、熊野の信  
じて諸方に勸進し  
けるが、いつしか  
衣を略して、齒を  
磨き頭を仔細に包  
みて、小歌を便に  
色を賣る也。  
※大象をつなぐ  
徒然草一女のかみ  
すぢをよれる綱に  
は、大象もよくつな  
がれ、  
※かたづまり窮  
屈。  
※蒸せる粟の如し  
一本朝文粹、源順  
呼爲女郎云々

らにの花は、蝶の羽に薰物すと、先師の腸より搜し出し侍るこそ、其の佳人の面影もなつかしければ、是に先をこされて口を閉ぢて言はず。

鳳仙花といふ花は、是もけばくしく、紅粉鐵醬を粧ひ、人の目を驚すやうなれども、手に携へて見るべきものにもあらず。木ぶり葉つきのいやしき事は、かの出女の李喰ふ口もとには似たり。

女郎花は、いにしへより女にたとへ、※我落ちにきと法師の破戒によめるは、女郎の二字になづめるならむか。初秋の風によるめき立てるも、菊にさきをかけられたらむは、手柄や少からむと思へる物好きこそやさしけれ。この女郎花といへるもの、花にしてはちと請取りがたし。たとへば聲の美しきを選びて、小歌を習はせ、髪をおろして、是を比丘尼とは言ふなり。※おほね大率は女色にして、飾りなければ、※大象をつなぐべき執心のきづなもなし。さればとて、男色のかたづまりたる類にもあらで、男女の中に立てる風俗なり。此の花百花に類する姿なし。古人蒸せる粟の如しといへるは、草實のたぐひに比すべきか。莖も花もひとしく黄にして、下葉すくなによろめきたるは、かの比丘尼のたぐひとや見む。



桔梗は、其の色に目をとられり。野草の中に思ひかけず咲き出でたるは、田家の草の戸に、よき娘見たる心地ぞする。

萩はやさしき花なり。さして手にとりて愛すべき姿はすくなけれど、萩といへる名目にて、人の心を動かし侍る。たとへば地下の女の、よく歌よむと聞き傳へたるなつかしさには似たり。

菊の隠逸なるは、和漢共に名にたちたる花なれば、改めては言ひがたし。風流物好き、目立ちたる事を嫌へるは、よき女の夫などにおくれて、閑なる片はづれにたちしのび、よはひも未だ三十になるやならずの盛りなれば、さすがに髪などおろすべくもあらず。たゞ一人あるをさなきものにひかれて、心ならず世の中に住み侘びたるを、恥しと思へる人には似たり。

寒菊の霜をいたゞき、雪をかづける中に、忽然と精骨を盡したるは、天地造化の行はれざる所はなしと感ぜり。たとへば越路の果の果にも、三國・金澤・富山・高岡などいへる所々に、思ひかけず風流のある心地ぞする。

冬牡丹のしやれすぎたる、たとへば大津・伏見など、分内狭き所の遊女町、工商

※菊の隠逸なるは周茂叔の愛蓮説に菊者花之隱逸者也。  
※精骨―精力氣骨。  
※三國、金澤―越前。  
※富山、高岡―越中。  
※分内―境域。  
※傾國―遊女。  
※養父入―敷入、正月十六日と七月十六日。  
※生身玉―七月八日より十三日まで祝ふ儀。  
※蒚子の顔云々―蔓蒚枝を吹出物のある顔に見立て、堅氣の人の髭尤め

の家居軒を並べ、うち交りたれば、白地の娘ども傾國の風俗を見習ひ、養父入、生身玉の里がへりにしやれを盡し、一向遊女の立振舞に似たれば、兩親いかばかり悲しと制しつらむ。時と所を知らざるは、大きなるいき過ぎならむ。

當世の人の花過ぎ、古人の實過ぎたる。嗚呼、いづれの時か花實兼備の世あらむ。或問うて曰く、當時人情の花にうつり、鳥に心を驚かしやすきは、盡くこの文章に盡きて、はじめて人の耳目を動かし侍る。今先生が歎く所の俳諧の實は、いかなるを言ふにかあらむ、覺束なし。早く是をあかし俳諧大道に悟入させよ。答へて曰く、

夫れ實の形をいはむ。蒚子の顔のぶつ／＼としたる、實性の人の髭尤めより苦しく、若し暑き題の歌よまむと思はむ、早く此のもとに立寄るべし。姫瓜の丸顔はさんちや風の俤あり。瓢の青ざめたる、熟柿のあから顔、下戸上戸は古くして、今様は是をとらず。日やけの梨のじやくれたる、座頭のあたまこそ俳諧の實には究り侍る。

(風俗文選)

蓑蟲説

素堂

(髭剃りたるあと)の發疹をいふ。よき暑苦しと也。遊女。江戸吉原の女。江の洞房語。園遊。寛文五年。未だはりし遊女は。客はふるなどいふ。事氣張りもさくば。意氣張りもさくば。散茶女郎といひて。下戸上戸は古くして。青瓢赤柿を。下戸上戸に喩ふる。は古めかしと也。素堂。享保元年。破。七十五。甲斐。國北。巨摩郡の人。山。巨摩郡。通。稱。兵衛。名。信。右。衛門。今日。其。日。菴。の。別。號。あり。廿。三。歳。頃。江。戸。に。出。て。林。春。齋。に。學。び。後。京。連。歌。に。上。り。芭。蕉。と。俳。諧。を。學。ぶ。及。び。開。發。の。爲。に。葛。飾。の。風。所。祖。と。せ。ら。る。



※枕草子よ／＼云々  
 ※あはれなり、鬼  
 の生みければ、親  
 に似てこれらも恐  
 き心地ぞあらんと  
 ひき親のあしき衣  
 風の吹か折に、今  
 こんずる、まてよ  
 と言ひて逃げてい  
 の音きしらず、風  
 月ばかりになれば  
 ちよ／＼と、はか  
 ばなげに鳴く、い  
 じくあはれなり。  
 ※からうじて云々  
 辛うじて賤の手  
 に養はれて後死  
 ※少しき—小さき  
 ※是を解きて云々  
 葉唐舞—籃裏無  
 門外撃—酒錢—酒家  
 欲把三袋衣—當上又  
 恐明朝是雨天。  
 ※太公すら云々—  
 太公望渭水に釣し  
 て文王に見出され  
 是が師となる。(史  
 記齊世家)

蓑蟲々々、聲のおぼつかなきをあはれぶ。ちよ／＼となくは、孝に専らなるも  
 のか。いかに傳へて鬼の子なるらむ、清女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも、瞽  
 叟を父として舜あり、汝は蟲の舜ならむか。  
 蓑蟲々々、聲のおぼつかなくて且つ無能なるをあはれぶ。松蟲は聲の美なるが爲  
 に籠中に花野をなき、桑子は絲を吐くによりからうじて賤の手に死す。  
 蓑蟲々々、無能にして靜なるをあはれぶ。胡蝶は花にいそがしく、蜂は蜜をいと  
 なむにより往來おだやかならず、誰が爲にこれをあまくするや。  
 蓑蟲々々、形の少しきなるを憐ぶ。わづかに一滴を得れば其の身をうるほし、一  
 葉を得ればこれがすみかとなれり。龍蛇の勢あるも、多くは人の爲に身をそこなふ。  
 若かじ、汝が少しきなるには。  
 蓑蟲々々、漁父が一糸をたづさへたるに同じ。漁父は魚を忘れず、風波にたへず、  
 幾度か是を解きて酒にあてむとする。太公すら文王を釣るの誇あり。子陵も漢王に  
 一味の閑をさまたげらる。  
 蓑蟲々々、玉蟲ゆゑに袖ぬらしけむ、田蓑の鳥の名にかくれずや。生けるもの誰

※子陵も云々—會  
 稽餘姚の天子陵、  
 少時光武帝の學友  
 たり。帝位に即  
 くに及び、澤中に  
 釣して見出さる。  
 (後漢書逸民傳)  
 ※玉蟲ゆゑに—玉  
 蟲草紙に、もろも  
 ろの蟲玉蟲を戀ひ  
 て懸想文を送れる  
 事あり。その中に  
 見ゆ。  
 ※田蓑の鳥—古今  
 集、貫之一雨によ  
 り田蓑の鳥をけふ  
 ゆけば名にはかく  
 れぬ物にぞありけ  
 る。  
 ※鳥は見て云々—  
 莊子、齊物論、毛嬙  
 麗姬、人之所美  
 也、魚見之深入、  
 鳥見之高飛。の  
 轉用。  
 ※通照が云々—通  
 照初瀬寺にて妻の  
 詣でるを、見なが  
 ら、名乗らずして  
 一夜を泣き明かし  
 着たる蓑の血涙に  
 染まりし話、大和  
 物語にあり。

かこのまどひなからむ。鳥は見て高くあがり、魚は見て深く入る。通照が蓑をしぼ  
 りしも、ふるづまを猶忘れざるなり。  
 蓑蟲々々、春は柳につきそめしより、櫻が塵にすがりて定家の心を起し、秋は萩  
 ふく風に音をそへて寂蓮に感をすゝむ。木枯の後は空蟬に身をならふや、骸も躬も  
 共にすつるや。

又以三男文字二述二古風一

蓑蟲々々 落入二牕中一 一絲欲絶 寸心共空  
 似二寄居状一 無二蜘蛛工一 白露甘口 青苔粧二躬一  
 從容侵雨 飄然乘風 栖鴉莫啄 家童禁二叢一  
 天許作隱 我憐稱翁 脱二蓑衣一去 誰識二其終一

(風俗文選)

※春は柳に—和泉  
 式部集—雨降らば  
 梅の花笠あるもの  
 を柳につける蓑蟲  
 やなぞ—拾遺  
 ※櫻が塵に—拾遺  
 愚草—春雨のふり  
 にし里を來て見れ  
 ば櫻の塵にすがる  
 けむ萩の心もしら  
 ずして秋風たのむ  
 みの蟲の聲—



嘲宵惑説

毛 紬

※毛紬一、疫年未詳。彦根藩士、喜多山氏、通稱十藏、初め芭蕉の門に入り、後許六に從ふ。畫を善くす。  
※宵惑一、宵の中よりつら／＼と現し、心もなきをいふ。  
※入麵一、素麵を煮たるもの。  
※かの人一、宵惑ひをする人。  
※生得一、生まれつき。  
※大國を領じ云々一、所在なきに種々妄想を廻らす也。  
※斗藪一、乞食行脚をいふ。  
※頭陀一、梵語の音譯。斗藪と同意。  
※繪にかける色一、古今集序一繪にかける女を見て徒らに心を動かすが如し。  
※庚申の夜一、當夜眠れば、三尸蟲の禍ありて早死をすといふ迷信行はる。  
※懸金一、額の關節。

秋の暮のあはれを知らぬ人は入麵を好み、長雪隠をする人は唐様の書を好く。風雅のうつる、うつらざるの違ひなり。かの人生得灯を見ず、眠室にかき籠り、寝る事を樂しみの最上とする。寢酒さめ夢盡きてひたものねがへれども、夜の明くる氣色もなく、屋普請の胸算用もしあき、大國を領じ、治めむと思へば言下に治り、又は金持の浪人となりては嵯峨の奥に引込み、斗藪頭陀に心を變じては松島象潟に身をよす。されど繪にかける色に心を動かし、献立紙に坐りたる心地せられてやがて興盡きぬ。たま／＼庚申の夜ありて宵寝せぬものとおどされ、大欠に懸金を外し、田樂の焼くるを待ちかね、病人の夜伽に當つては藥風爐に額を焦す。かゝる人たのしむといふ事を知らず、琴碁書畫は屏風の模様と覺え、花鳥風月は手本に書くとはかりしる。昔幸予が晝寢も夜ふかすあてに寝つらむかし。古人の燭をとると言へる誠にゆるゑあり。人生七十、今時は生きず。たとひ五十で死にたりとも、百年の算用にはたつべし。晝ありく鶴鴻は鷹につかまるれど、夜出る惰鳥は網にかゝりても、

やがていなさるゝをたふとしと覺えたり。

(風俗文選)

落柿舎記

去 來

※藥風爐一、藥を煎じる爐。  
※幸予が晝寢一、論語、公治長篇「幸予晝寢、子曰朽木不可雕也、糞土不可埴也」云々。  
※古人燭をとる一、李白、春夜宴三桃李園序「秉燭而夜遊」。  
※惰鳥一、夜鷹、辻君をいふ。  
※王祥が志云々一、晉書王祥傳に「有母、守之、結實、母命守之、每風雨、祥輒抱樹而泣、其篤孝純至如此」。  
※むかふ髪、前髪。

嵯峨に一つの古家侍る。そのほとりに柿の木四十本あり。五とせ六とせ經ぬれど、木の實も持ち來らず、代かふるわざも聞かねば、若し風雨に落されなば王祥が志にも恥ぢよ、若し鶯鳥にとられなば天の帝の恵みにも漏れなむと、屋敷もる人を常はいどみのしりけり。ことし八月の末かしてこに至りぬ。折ふし都より商人の來り、立木に買ひ求めむと、一貫文さし出し悦び歸りぬ。予は猶そこに留りけるに、ころ／＼と屋根はしる音、ひし／＼と庭につぶるゝ聲、よすがら落ちも止まず。明くれば商人の見舞ひ來り、梢つくづくと打詠め、我むかふ髪頃より白髪生ふるまで此の事を業とし侍れど、かくばかり落ちぬる柿を見ず。きのふの價返しくれたびてむやとわぶ。いと便なければ許しやりぬ。此の者のかへりに、友どちの許へ消息送るとて、みづから落柿舎の去來と書き始めけり。

柿ぬしやこずゑはちかきあらし山

(風俗文選)



幻住菴記

芭蕉

※翠微山の中腹。爾雅「山未レ及レ上、曰三翠微。」  
 ※唯一神道のこと。兩部神道に對す。  
 ※菅沼氏曲翠通稱外記、馬指堂と號す。江州膳所藩士。幻住菴主は同藩士菅沼修理定知、探山居士と號す。  
 ※象湯一羽後國由利郡。  
 ※高すなご一砂の高く盛り上りたるをいふ。  
 ※今歲一元祿三年四十七歲。  
 ※やがて出てじと山家集「吉野山やがて出てじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらむ」  
 ※宿かし鳥一西行「山をわけ花をたづねて日はくれぬ宿かし鳥の聲もかすみて」かの法師の鳥譜に「かの法師の宿かし鳥とよみ

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山と云ふ。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事、三曲二百歩にして、八幡宮たせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなることを、兩部光を和げ利益の塵を同じうし給ふも、またたふとし。日比は人の詣でざりければ、いと神さび物しづかなる傍に、住み捨てし草の戸あり。蓬根笹軒をかこみ、屋根もり壁落ちて狐狸ふしどを得たり。幻住菴と云ふ。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏曲翠子の伯父になむ侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ残せり。予又市中を去ること十年ばかりにして、五十年や、近き身は、簞蟲の簞を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象湯の暑き日に面をこがし、高すなご歩みぐるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歲湖水の波に漂ひ、鳩の浮巢の流れとまらるべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端葺きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月のはじめいと假初に入りし山の、やがて出てじとさへ思ひそみぬ。さすが春の名残も遠からず、躑

ついでぬるよりとあるは燕をいふ。  
 ※魂吳楚東南に走り云々杜市、登岳陽樓昔開洞庭水、今上岳陽樓、吳楚東南、乾坤日夜浮。黃山谷、題鄭防畫夾二惠崇烟雨歸雁、坐我蕭湘洞庭欲喚扁舟歸去、故人道是丹青。  
 ※南燕一夏の風をいふ。  
 ※田上山一猿丸太夫の故跡あり。  
 ※網代守るにぞいふ。歌萬葉に見えず、近江輿地志略に古歌として引ける。田上や黒津の庄の瘦男あじろ守るとて色の黒さよ一を誤れるか。  
 ※海業に集をいとよひ云々。徐老海業の詩に「徐老海業集上、王翁主薄峰菴」註云、「徐徐樂道、隱於藥肆中、家有海業數株、結集其上、時與客飲、其間、王道人

躑咲き残り山藤松にかゝつて、時鳥しばく過ぐるほど、宿かし鳥の便さへあるを、木つゝきのつゝくとも厭はじなどそゝろに興じて、魂吳楚東南にはしり、身は湘瀟洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よき程に隔り、南薫峰よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣たる、舟あり。笠どりにかよふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水鶏のたゝく音、美景物として足らずといふ事なし。中にも三上山は士峯の傍にかよひて、武藏野の古きすみかも思ひいでられ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽、千丈が峯、袴腰といふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて、網代守るにぞとよみけむ萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからむと、後の峯に這ひのぼり、松の棚つくり、藁の圓座を敷きて猿の腰掛と名づけ、彼の海業に集をいとよび、主薄峯に庵を結べる王翁、徐怪が徒にはあらず。唯睡辟山民となりて、扉顔に足をなげ出し、空山に虱を捫つて坐す。たま／＼心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら

參禪四方、歸結屋於主薄峰上。昔有毛人一至其間。

問道。「扉顔一山のそば。前判味定佳客、簞外扉顔皆好山。」  
 空山に虱を云々。石林詩話「青山捫虱坐、黃鳥挾書眠。」



※とく／＼の雪をわびて、一爐の備へいとかるし、はた昔住みけむ人の、殊に  
 「とく／＼と」と落つる岩間の苔清水く  
 る岩間の苔清水く  
 みほす程もなき住  
 ひかなとこの歌西  
 行の作と傳ふ。高  
 ※高良山の僧正は、加茂の甲斐何が  
 加茂の祠官藤木甲  
 斐守教直の子一書  
 僧正一家をなし、道  
 にて流又は芭蕉の書  
 加茂流又は芭蕉の書  
 道の師北雲竹とい  
 ふ。その門人なりとい

※農談云々古文  
 前集、朱晦翁野人  
 載酒來、農談日己  
 ※問兩に云々一莊  
 子、齊物論「罔兩  
 問、曩曰、曩子行今  
 子止、曩子坐今子  
 起、何其無特操一  
 矣。」  
 ※佛籙祖室一惠能  
 禪師錄「吾三十  
 而窺佛籙祖室。」  
 ※樂天は云々一白  
 樂天、思舊詩役二  
 五臟神。」  
 ※老杜は云々一李  
 白、贈三杜甫「爲問  
 緣、何太瘦生、只  
 爲從前作詩苦。」

炊ぐ、とく／＼の雪をわびて、一爐の備へいとかるし、はた昔住みけむ人の、殊に  
 心高く住みなし侍りて、たくみ置ける物ずきもなし。持佛一間を隔て、夜の物を  
 さむべき處などいさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何が  
 しが嚴子にて、此の度洛にのぼりいまそかりけるを、或人をして額を乞ふ。いとや  
 す／＼と筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。頓て草庵の記念となしぬ。すべて山  
 居といひ旅寝といひ、さる器貯ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の  
 上の柱に懸けたり。晝はまれ／＼とぶらふ人々に心を動かし、あるは宮守の翁、里  
 のをのこ共入り來りて、ゐのし／＼の稻くひあらし、兎の豆畑に通ふなど、我が聞き  
 知らぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜座靜に月を待ちては影を伴ひ、燈を取り  
 ては罔兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隠  
 さむとにはあらず。や、病身人に倦んで、世をいとひし人に似たり。つらく／＼年月  
 の移りこし拙き身の科を思ふに、ある時は仕官縣命の地をうらやみ、一度は佛籙祖  
 室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞じて、しばらく  
 生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして此の一筋につながる。樂天は五臟

の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖な  
 らずやと思ひ捨ててふしぬ。  
 先づたのむ椎の木もあり夏木立  
 (風俗文選)

鹿島紀行

芭蕉

※此の秋一貞享四  
 年八月。浪客の士一門人  
 ※河合曾良。水雲の僧一本所  
 原庭の定林寺住職  
 ※三衣一三種の袈  
 裟即ち、大衣、中  
 衣、中著衣の總稱。  
 三衣の袋とは頭陀  
 袋をいふ。無門の關一宋僧  
 ※慧開の著、無門關  
 の頌に「大道無レ  
 門、千差有路、透レ  
 得此關一獨ニ步乾  
 坤。」  
 ※今ひとり一芭蕉  
 自らのこと。鳥なき鳥云々一  
 ※鳥なき鳥云々一  
 鳥なき鳥には、蝸  
 が王するといふ。藤  
 あり。和泉式部家  
 集一人もなく鳥も  
 なからむ鳥にては  
 このかはほりも君

洛の貞室須磨の浦の月見に行きて、「松かげや月は三五夜中納言」と言ひけむ狂夫  
 の昔もなつかしきまゝに、此の秋鹿島の月見むと思ひ立つ事あり。伴ふ人二人、ひ  
 とりは浪客の士ひとり水雲の僧、僧は鳥の如くなる墨の衣に、三衣の袋を襟に打掛  
 け、出山の尊像を厨子にあがめ入れて背中になせおふ。柱杖曳きならして、無門の關も  
 さはるものなく、天地に獨歩して出でぬ。今ひとり、僧にもあらず俗にもあらず、  
 鳥鼠の間に名をかうぶりの、鳥なき鳥にも渡りぬべくて、門より船に乗りて行徳と  
 いふ所に至る。船をあがれば、馬にも乗らず、細脛の力をためさむと歩行よりぞ行

を尋ねむ「又」うら  
 さびて鳥だに見え  
 ぬ鳥なればこのか  
 はほりぞ嬉しかり  
 ける。行徳一下總東葛  
 ※馬にも乗らず、  
 歩行よりぞゆく一  
 拾遺集「山科の木  
 幡の里に馬はあれ  
 ど歩行よりぞくる  
 君を思へば」



※かまがいの原  
 ※同郡釜が谷  
 ※秦旬の千里  
 ※和漢朗詠集「秦旬  
 之千里餘里、際々  
 水舖」  
 ※双劍の峯—廬山  
 紀—山南山北瀑布  
 無慮十餘處、香爐  
 峯與二雙劍峯—在  
 瀑布之旁  
 ※日本武尊の言葉  
 |記・紀に見ゆ  
 尊—にひばり筑波  
 を過ぎて幾夜かね  
 つる—火燒の翁か  
 いなべて夜には九  
 夜日には十日を—  
 ※爲仲が長櫃に云  
 々—この話、長明  
 無名抄に見ゆ  
 ※布佐—東葛飾郡  
 ※夜の宿屋し—白  
 氏文集—朝浪飢渴  
 費—杯盤、夜宿腥臊  
 汚—牀席—  
 ※さきの和尚—佛  
 頂禪師  
 ※深省を發せしむ

く。甲斐國より或人の得させたる檜木もて造れる笠を、おの／＼戴きよそひて、八  
 幡ぼたといふ里を過ぐれば、かまがいの原といふ廣き野あり、秦旬の千里とかや、目  
 もはるかに見渡さる。筑波山向ふに高く、二峯ならび立てり。かの唐土の双劍の  
 峯ありと聞えしは、廬山の一隅なり。「雪は申さずまづ紫の筑波哉」とは、我が門人  
 嵐雪が句なり。すべて此の山は、日本武尊やまとみことのの言葉を傳へて、連歌する人の始めにも  
 名づけたり。和歌なくはあるべからず、句なくは過ぐべからず。誠に愛すべき山の  
 姿なりけらし。萩は錦を地に敷けらむやうにて、爲仲が長櫃に折り入れて都の土産  
 に持たせたるも、風流にくからず。桔梗きぢが、女郎花、刈萱、尾花みだれ合ひて、小男  
 鹿のつま戀ふ聲いとあはれなり。野の駒所得顔にむれありく、又あはれ也。日すで  
 に暮れかゝる程に、利根川のほとり布佐といふ所につく。此の川にて鮭の網代とい  
 ふものをたくみて、武江の市に鬻ぐ者あり。宵の程その漁家に入りてやすらふ。夜  
 の宿屋し。月くまなく晴れけるまゝに、夜船さしくだして鹿島に至る。晝より雨し  
 きりに降りて見らるべくもあらず。麓に根本寺ねもとでらのさきの和尚、今は世をのがれて此  
 所におはしけるといふを聞きて、尋ね入りて臥しぬ。頗る人をして深省しんしやうを發せしむ

「杜甫、遊龍門奉  
 先寺詩「欲覺聞  
 晨鐘、令人發深  
 省。」

※何がしの女—清  
 少納言が賀茂へ時  
 鳥を聞きに行き、  
 歌をえよよまで歸り  
 しこと枕草子に見  
 ゆ。

※錢を入れたるは  
 費用をかけたるは

※名吉—鱈たなに同じ。  
 ※前途路遠し—和  
 漢朗詠集—前途程  
 遠、馳ち思於雁山之  
 夕雲、後會期遙、  
 霑ぬ總於鴻臚之曉  
 涙—  
 ※布引山—伊勢國  
 安濃郡。

と吟じけむ、暫く清淨の心を得るに似たり。曉の空いさゝか晴れぬるを、和尚驚か  
 し給ふれば、人々おどろき出でぬ。月の光雨の音、唯あはれなるけしきのみ胸に満  
 ちて、いふべき言の葉もなし。はる／＼と月見に來たるかひなきこそ本意なきわざ  
 なれど、かの何がしの女すら時鳥の歌えよまで歸りわづらひしも、我がためにはよ  
 き荷擔かたんの人ならむかし。

月はやし梢は雨を持ちながら  
 雨に寝て竹おきかへる月見哉

曾良 (風俗文選)

南行紀

李由 許六

鳥は黒く生れながら鷺の白からむ願ひもなし。笠はあるにまかせ、雨をしのぐ物  
 に菅蓑はあれど今様は合羽で仕舞ふ。錢を入れたるは草鞋一足にて、天晴旅人の出  
 立ちは出來たり。二月晦日といふ日に蝸牛の家を離れ、名吉なよしの國廻りに浮れ出て、田  
 づらの柳、木瓜ぼけ、菫、遠音の雉子のうす曇り、旅の心にはなりきりたり。前途路遠  
 しと杖の頭をからめかし、首にかけたる頭陀袋、身は雲水の果てしなき布引山の山



※聖一李由。  
 ※男一許六。  
 ※角文字やいせの野飼  
 「角文字やいせの野飼の花すゝき」  
 ※土山一近江國甲賀郡。  
 ※手古き云々一湯に入る時、互に前後をゆづりあふ古風な禮儀。  
 ※行くべき所一便所。許六は長雪隠の癖あり。  
 ※桃尻一腰すわりの悪しきをいふ。  
 ※鈴鹿山一伊勢國鈴鹿郡。

※坂泊一坂下泊り  
 の事。坂下宿は鈴鹿坂の下にて、土山より二里半。  
 ※竹屋一坂下の驛に、大竹屋小竹屋といへる旅舎ありき。  
 ※關の地藏一坂下の驛より關まで一里半。關驛中程に地藏あり。

※雲津一志郡。

※日野椀一和漢三才圖會(盤(わん)の條一江州日野、紀州根來、同黒江、奥州會津、攝州大坂、同堺、京師皆作之。  
 ※温庭筠が早行一温庭筠、商山早行の詩一晨起動三征鐸、客行悲、故鄉、鷄聲茅店月、人跡板橋霜、柳葉落三山路、枳花明、驛牆、云々。  
 ※松坂の矢川一遊女のゐたる地。  
 ※筑摩、朝妻、江口、神崎一何れも遊女にて名高き地。  
 ※昨日の淵は云々一古今集一世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵は今日の淵となる。  
 ※明野一アケノ。宮川の西にある明野ヶ原をいふ。

俳文集

中に、道連れせばやと見れば見知れる聖なりけり。男是より、角文字やいせの野飼の跡や先やと打ちつれ、やがて土山の泊につく。手古き水風呂の時宜に時をうつし、聖長袖の役に其の夜はあら湯を請取る。明日よりは湯番の前後を定め、猶日々の事を筆に記さむ、是も湯番につけて廻すべしとて、書記も湯番も男に渡しぬ。

明くれば彌生朔日、湯番の男ぬからじと起きて、行くべき所へ走る。例の一藝長々と勤めければ、聖桃尻にて待ち兼ねたり。天氣良き夜明の雲あひしらみかへり、並木の木陰まだほのくらく、遠近人の笠の内そろく見えたり。鈴鹿山越えむとて、聖駕籠、男馬、

天井に首はつかへて山ざくら

聖

伊勢はてる馬士の鈴鹿や花曇り

男

下り坂、山あひくらく、朝霞の中に坂泊の咄も程なく近寄りたり。

鶯も竹屋どまりや朝あらし

聖

晝気色は關の地藏にて見るなり。茶店をすこしうち叩きて、暫く腰をかけたなり。

田樂やあふのく口になく雲雀

男

たそがれ過ぐる比雲津に着けば、宿の案内もおぼつかなし。

二日、聖夜深く起きて非番の男を起す。煤けたる行燈のかけに、會津盆のうちひらめたるに日野椀の壺皿、いと淋しげにつきすゑたり。見る目いぶせく胸ふさがり、やがてもかゝらず、杉箸しらせ直し、腹の気色つれなければ其の日の役をはらふ。はき物は寐所よりしめつけ、笠は上壇より着ながら此の宿を出でたり。前後の家並はしづまりかへり、左右の鶏の聲亂れたる中を出ぬけて、火繩の火影ちら／＼と見えがくれなり。紀行毎に温庭筠が早行も聞きあきぬれば、此の度は法度にして、雲津川の假橋を渡る。かくは言へど景氣胸の内にかめたり。松坂の矢川といふは人の面白がる所なり。其の所さき肩にとへば、今は絶えてたゞの所になりたりといふ。筑摩、朝妻、江口、神崎は昔語りとも覺えぬるに、昨日の淵は今日の矢河となりて、人變り家變りぬれば、搗米の船には空しく蠅のむらがり、草履草鞋の銚は徒らに風に動く。今は其の土に色香もなし。

松坂や越後屋とへば江戸ざくら

男

出女の雪むら消えて明野かな

聖



※宮川一名度會  
※代垢離―神宮參詣者に頼まれて、その代りに宮川の水にて垢離をする者。  
※一錢剃―髮結ひ床屋。  
※かたじけなさの筋に―西行―何ごとのおはしますとは知らねどもかたじけなさに涙こぼる。

※天岩戸―神宮内陣をいふ。

※いま―し―齋みつゝしむべき心地するの意。  
※百八の涙―百八煩惱の數をいふ。

宮川の渡りを越えて、代垢離の子供は蛙の如く、一錢剃の鉢は蟹に似たり。

髮結ひの腰にしだる、柳かな

聖

山田に入りて何がしの太夫の許につく。日高ければ、參宮の支度して出でたり。

抑も神前に詣でぬれば、よろづの事は忽ち忘れて、かたじけなさの一すぢに涙は落し侍りぬ。

奉納二句

青海苔も和光の塵のひとつ哉

男

松櫻川を隔て、墨の袖

聖

天の岩戸に入れば、灯明輝やかし。常闇の昔思ひ出でられ、有難き事限りなし。

穴藏と見ればおそろし雉子の聲

男

内宮に詣でて、御社近き杉のむら立に御裳濯川は清く流れ、御寶前はしん／＼として、くり石の上に畏り拜し奉る。つたなき心にもまことはありて、又上もなき嶺の松風身に滲みわたり、小袖の膚にさはりぬるもいま／＼しき心地せられ、あまりに忝さと思ふ折は寒きものなり。

又奉納。

百八のなみだのかゝる蔵かな

聖

今ぞしる月日の花も梅さくら、

男

つさせぬ御名残も暮に及べばすでに御暇申して出でたり。二見の方もゆかしけれど、行先いそがしければ思ひとゞまりて、例の太夫の許に歸りて臥しぬ。(風俗文選)

宴柳後園序

支考

※支考―享保十六年、濃國山縣北野の美濃、各務氏、獅子、東花坊、西花坊、蓮二坊、野盤、坊、蓮二坊、野盤、子等の別號あり。初め雲山大智寺の僧たりしが還俗して、醫師となり、又涼英に導かれて、蕉門に歸す。言論に長じて多くの著あり。美濃派の祖とせらる。著書、葛の松原、笈日記、續五論、俳諧十論、發願文、十論爲辯抄、柳後園支考等。門人波邊吾仲の居。洛陽五條にあり。莊子、外物篇―心有天遊。一。有日ならず一日を選ばず、常にの意。を大小の額―大字に書きたる板をかきおきて、月の大けかふるなり。小によりて月々かけかふるなり。金谷の酒―李白、

世に遊ぶ人ありて、綾羅錦繡にたのしむ時は、樂つきて後たのしむものなし。山林樹下に遊ぶ者は、心に満たざれば世に羨む方も出で來ぬべし。此の二つの境に居らざるものを、心に天遊ありとぞ昔の人もいへりける。されば柳後園の何がし、三四の友達ありて遊ぶ事日あらず。額には閑の一字を題して、靜ならぬ時は横になし、やかましき時はさかさまに置いて、其の時の心に隨ひ行くは、大小の額見る心にや侍りけむ。此の日東花坊も此の中に遊びて、人々酒のまむと催したるに、心に物をとめ口に餘情をいふ人ならば、罰は金谷の酒も惜しからむ。俳諧に案じ入りたる時



春夜宴桃李園序  
如詩不成罰依  
金谷酒數。

※大罪朝敵の類  
順徳院、日蓮上人、  
日野資朝等。

は、こよりといふものして噓させむとぞ戯れける。

(風俗文選)

銀河序

芭蕉

北陸道に行脚して、越後國出雲崎といふ所に泊る。彼の佐渡が島は、海の面十八里、滄波を隔てて東西三十五里によこをりふしたり。峰の嶮難谷の隅々まで、さすがに手にとるばかり鮮やかに見渡さる。むべ此の島はこがね多く出で、普く世の寶となれば、限りなき目出度き島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ遠流せらるゝによりて、唯おそろしき名の聞えあるも、本意なき事に思ひて、窓押開きて暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈んで月ほのぐらく、銀河半天にかゝりて星きら／＼と冴えたるに、沖のかたより波の音しば／＼運びて、魂けづるがごとく腸ちぎれて、そゞろにかなしび來れば草の枕も定らず、墨の袂なにゆゑとはなくてしほるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡に横たふ天の川

(風俗文選)

嵐蘭誅

芭蕉

※金革を褥にして  
云々中庸「惟金  
革死而不厭北方  
之強也。」  
※文質偏ならざる  
論語、雍也篇「質  
勝文則野、文勝  
質則史、文質彬彬、  
然後君子。」

※今年元祿六年。

※王戎五歳の眼ざ  
し晋書、王戎傳  
「戎幼而顯悟、神彩  
秀徹、規日不眩、  
裴楷見而目之曰、  
戎眼爛々如巖下  
電。」

金革を褥にしてあへてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて君子のいさをしとす。松倉嵐蘭は、義を骨にして實を腸にし、老莊を魂にかけて風雅を肺肝の間に遊ばしむ。予とちなむ事十とせ餘り九とせにや。此の三とせばかり官を辭して、岩洞に先賢のあとを慕ふと雖も、老母を荷なひ稚子をほだしとして未だ世波に漂ふ。されども榮辱の間に居らず、日々風雲に坐して、今年仲の秋中の三日、由井金澤の波の枕に月をそふとて、鎌倉に杖を曳き、其の歸るさより、心地惱ましうして終に息絶えぬ。同じき二十七日の夜の事にや。七十年の母に先だち、七歳の稚子に思ひを殘す。いまだ惜しむべき齡の五十年にだに足らず、公の爲には腹押切りても悔ゆまじきうつはものの、はかなき秋風に吹きしをれたる草の袂、いかに露けくも口惜しくもあるべき。今はの時の心さへ知られて悲しきに、老母の恨はらからの嘆、親しき限りは聞き傳へて、偏に親族の別れにひとし。過ぎつる陸月ばかりに、稚子が手をとりて予が草庵に來り、彼に號得さすべきよしを乞ふ。王戎五歳の眼ざしうるは



※なくしてぞ人はと  
云々古歌「ある  
ときはありのすき  
びに憎かりきなく  
ぞ人は戀しかりけ  
る」  
※夕の雲に云々  
杜甫「渭北春天樹、  
江東日暮雲。」

※浪化一元祿十六  
年中、年三十二、越  
中井波瑞泉寺十一  
世の住僧。應々山  
人、休々山人、自遣  
堂の號あり。東本  
願寺門主一如上人  
の連枝なり。著書、  
有磯海、となみ山、  
續有磯海、白扇集。  
※六道「天上、人  
間、餓鬼、畜生、  
修羅、地獄。」  
※曾根の松「播州  
印南郡曾根村の名  
松。」  
※ながし「水面と  
平行に横に出す  
枝。」  
※清見寺の梅「津町  
河國庵原郡興津町  
清見寺の臥龍梅。」

しと、戎の一字を摘んで嵐戎と名づく。其の喜べる色今日のあたりを去らず。生ける時むつまじからぬをだに、<sup>※</sup>なくてぞ人はとしのぼるゝ習ひ、まして父の如く子の如く、手の如く足の如く、年頃いひなれむつびたる佛の、愁の袂にむすぼほれて、枕も浮きぬべきばかり也。筆をとりて思ひをのべむとすれば才拙く、いはむとすれば胸ふたがりて、唯おしまづきにかゝりて夕の雲に向ふのみ。

秋風に折れてかなしき桑の杖

(風俗文選)

俳諧發願文

浪化

人死して六道に生れ辛き目見むは、ひとへに娑婆の業因によれりけるとかや。世に立花すく人は、立てては崩し崩して又立て、終日大汗ながし、霞のさきに枇杷の葉つけて、馬の耳のおもひをなし、屈曲を好みて、鐵釘に打ちつけ針がねにしばらく屈めて、見る目も苦しかるべし。わづか五寸の瓶に、千山萬水の思ひをこめむも、猶々氣づまりならむかし。若し立花せむとならば、曾根の松を心に立てて、ながしに清見寺の梅ならば、少しは心のびやかなる風情も有るべし。されど一時の榮花

※木槿一日の榮  
和漢朗詠集「松樹  
千年終是朽、槿花  
一日自爲榮。」  
※百味「極樂にあ  
る百種の飲食。無  
量壽經「百味飲食、  
自然盈滿。」  
※奈良茶、蕎麥切  
良茶三石食うて始  
めて俳諧の意味を  
知ると俳諧は都の  
土地に應ぜずと。  
※狂言綺語「白氏  
文集「願以今生綺  
俗文字之業狂言綺  
語之誤、轉爲當來  
世々講佛乘之因轉  
法輪之緣。」  
※丈草「寶永元年  
張大、山の藩士。尾  
藤氏、通稱林右衛  
門。先、五歳時、野  
山先聖を辭して、和  
尚に參禪し、玉堂、  
俳諧に參禪し、津學  
の義仲は栗に、著  
る阿住の佛の著  
びて住せり。著書  
寢轉草。」

も盡きて、まづ椿ころりと落ちて無常をしめし、<sup>※</sup>木槿一日の榮をさととりて程なくし  
をる。例の心短きにや、やがてぬき捨て、果は烟と立ち登る。それさへあるを、碁う  
つ人は、赤目引きつり、喰物時をわすれ、終夜同じ事並べたらむは、飽かずやあらむ。  
よき手あしき手とて、一座打ちこぞり、案じふくれ、碁石の限り蒔き盡す時、何の惜し  
氣もなく打崩したるは、さりととは残り多き事なるべし。さしも手間入れて案じたら  
むは、せめて五日十日も眺めよかし。此の人死にたらむ後は、必ず賽の河原に生れ  
て、父母戀しがる子供に立ちまじはり、地藏お菩薩の御衣の下にかくれ、あけくれ同  
じ事すらむも又あはれなるべし。もし一枝さして諸佛に奉り、一目投げてはあみだぶ  
唱へたらむ人は、疑ひなく西方に生れて、<sup>※</sup>百味の外の飯食には、<sup>※</sup>なら茶、蕎麥切はく  
ひ次第たるべし。今吾が俳諧の結縁は、<sup>※</sup>狂言綺語のふるみにおとし、<sup>※</sup>百韻千句の數  
を合せて、一座の廻向はあみだぶくと申して仕舞ひ侍りける。  
(風俗文選)

詩歌俳諧辯

丈草

一士あり、火燧壇上に俳塵を把つて、諸生に示して曰く、泰平聲震つて、風雅四



※千麥を流し、後漢の高鳳、字は文通、農を業とせし行が、嘗て妻の田に降りし後、天雨俄かに麥を流すを知らず、故に經を誦せし故事。  
 ※鉞杖を朽す、樵夫二人の男、石室山中に、時過ぎ去りし故柄、朽ちたりし斧の事。  
 ※銘々の境、詩、領、歌、俳諧、夫々の領域を吟味する。  
 ※人の心を種とす、古今集序「やまと歌は人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける」(中略)天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、男女の中をも和らげ、猛きものふの心をも慰むるは歌なり。  
 ※浦の昔屋の夕暮、見波せば花も紅葉もなかりけり、浦

海に波わく事久し。中にも俳道の一流、あらゆる國郷に入りわたりて、村童野老も千麥を流し、鉞杖を朽さむとす。然れども、詩歌の高みに涼み居て、古人よばりする輩は、にがしく弾指していへり。渠がこと、何ぞ志を養ひ、道に赴きたよりならむや。ひとへに滑稽の雑口、虚言にして、俗中の俗なるもの也と。今我一辯を出して、銘々の境をあらため、道々のおし及ぶべき所を判断すべし。まづ和歌の徳たる事誰か仰がざらむ。上つ代より傳へ來て、人の心を種とする言葉、其の誠より責めらるれば、鬼も荒男も頂をたる、正道なり。其の様體、たとへば雲の上人の、衣冠つやゝかに帶笏けだかうして、轅の中にいまそかるが如し。青侍白丁はななくしく警ふよそほひ、住吉玉津島と氣色うかび、あるひは吉野初瀬の遊山めきたり。たまくには富士、淺間、須磨、明石の逆旅に、浦の昔屋の夕暮まではながめ盡しぬれど、さすがに蛸壺の底さし覗きて、あはれ知るに便りなく、小鰻まじりに竈馬鳴く蟹の屋には、腰かくべき褥も見えず。まして野くれ山くれのはしく、牛道、鹿道、猿すべりの邊は名を聞くにも及ばず。これその位高く官高きが故に、下に臨める風景廢る物多しといつべし。詩は甚だ無碍自在にして、志のおもむく處辭の隨はど

の昔屋の秋の夕暮、蛸壺はかなき夢を夏は月(笈の小文、猿蓑)小鰻まじりに小鰻一疊の家は小鰻にまじるとい哉(猿蓑)野七甲山七里、伊豆國田方郡にあり。  
 ※志のおもむく所、詩經、關雎序、詩者志之所之也、在心爲志、發言爲詩、情動於中、而形於言。  
 ※八匹の駿馬、拾遺記「周穆王巡行天下、取八龍之駿馬、一名絶地、二名盤面、三云々」  
 ※盤面上にちまり、碁盤の上をまりて乗ることを得。  
 ※山を見て、長嘯子、大井川道遙記「名殘勝ち馬さかさまに乗れば、宋の潘閏が三峰を愛する心地す。」  
 ※句を鍊つて、書

るはなし。其の飛行の速なる有様、かの名におふ八匹の駿馬をまるめ合せて、飼ひに飼うたるが如し。手網すれば盤面にしじまり、鞭すれば四方八極時の間なり。況んやその上の風流、山を見て後向きに跨り、句を鍊つて手悶えをなしぬ。鞍の上疊まさりにして、前後左右かけ障りなし。嗚呼快なる哉、快なる哉。如何かせむ、今是に乗る者の多くは桃尻なる事を。俳諧のかたちたるや、簑笠竹杖草鞋しめつけて朝立ちしたるが如し。京田舎去嫌ひせず、一所にあなまどひせず、雪の市中に押され、陽炎の芝原にこけたり。あるは山寺の小料理になぐさみ、土亭に逗留をあかれたるも一段の笑ひなるをや。月時鳥の曉を木の根岩ばなに寢覺めて、又見ぬ方に歩みをすしむ。はてかぎりなき津々浦々、薩摩瀉、蝦夷が千島の門背戸までも、さらばいへ残す物あるかは。是吾が道の廣みにして我があそび所といふべし。氣のむく處、目の及ぶだけ、風せよや々と募つて覺えず手をうちけれど、従者は例の茶に倦んじて火の氣を打消し、勝手は夜半の時雨じみけり。(風俗文選)

言故事に「賈鳥於三、月下門、始欲著、京師、騎、得、句、推字、又欲下、敲、鳥宿池邊樹、僧敲、字、鍊、未、定、引、手、作、敲、推、勢、云々、上にあるより以上、の自由さを云ふ。桃尻、桃を皿に盛りたる如く腰の、据らぬをいふ。風せよや、諷せよや。



手足、辯

汶村

※汶村正徳三年  
歿、享年不詳。  
根藩士。松井氏、名  
師齋、九花亭、彦  
蓼齋の號あり。又許  
蕉に師事し、芭野  
六に從ふ。

※持一歌合、閑基  
などにて勝負なき  
こと、引き分け。  
※産一生業。

※手は一身の奴  
方丈記「今一身を  
わかちて二つの用  
をなす。手の奴、  
足の乗物、よくわ  
が心にかなへり。」

※古風一當時貞門  
の俳風を言へり。

甲冑のよろひかぶとをあやまり、行燈挑灯をとりちがへたるは、昔より國中みな誤り覚えければ、却つて改めたる人をあやまりといふも理ならむ。こゝに一身の中、足を賤しとし手を貴しと定め置きたるは、いづれか賤しとしいづれかたふとしとせむや。賤しとて終に斬り捨てたる人も聞かざれば、持にこそ定め置きたけれ。それは足は行歩を産として外の用を知らず、杳木履をかけ草鞋をはきて直に土をふまず、居る時は足袋したうづに包みまはし、歩み疲るれば馬駕籠に扶け乗せられ、千山萬水の間に坐して風情に嘯く。手は一身の奴にして、定めたる産なし。頭の虱を捫り、跟のあかぎれを撫づる、至らざる所なく、又なさずといふ事なし。これ賤しき事の第一なるべし。貴人高家の傍に、侍女小姓のつとめあれど、厠の役ある事を聞かず。されば我が脚にて他の鼻端の塵を拂はゞ、人怒つて我を罪せむ。人また我が頭の蠅を足にて追はゞ、我これを貴しとおもへど、世の人我に代つて憎みのしり、怒をうつして、我を阿方と號するこそ大きな僭上なれ。其の僭上人、蒲團たかむしうに臥して

休する時も、必ず足を伸すを一番とす。湯に入る人も、足からならでは這入りかたし。向後足に新しみをつけて、手を古風のふるみに落さむ。但し徳利子は各別の沙汰なるべし。  
(風俗文選)

仁不仁論

北枝

楯たてつくる人は仁にして、鏃やどりするものは不仁なりとかや。醫をなす人は國を醫し、醫人の名目は仁にして實は不仁なるべし。病者多く療ずる人を、名醫ともはやり醫ともいふなり。其のはやる所を喜び、乗物さゝめかして隙なからむは不仁の第一なるべし。さればとて、かの藪醫者のはやらざるも仁とは言ひ難からむ。たま〜の病人とてむかへたらむをうれしと、羽織打ちかけ時得たり顔に走り出でらるゝこそ、是も不仁なるべけれ。昔もろこしに矛盾ぼくたてを一荷にして賣る人あり。矛賣らむ時はいかなる盾もたまらずと言ひ、盾買ふ人には干將鏃かんせうも通る事能はずと言ふなり。かたへの人聞きて、其の方が盾を其の方が矛にて通さば如何にやと問はれて、終にものいはずして本國に逃げかへりぬ。是を矛盾とて、をかしたとへには言ふなり

※徳利子一手のなき不具者をいふ。  
※北枝一享保三年歿、享年未詳。加賀藩の研師なり。立花氏、通稱源介。鳥翠、趙子の別號あり。芭蕉北國行脚の折、兄牧童と共にその門に入る。著書、喪の名残、山中問答。  
※楯つくる人一孟子、公孫丑上。孟子曰、矢人豈不仁於函人哉。矢人唯恐不傷人。函人唯恐傷人。  
※醫をなす人一國語一上醫醫國、其次救人。  
※昔もろこしに云々一韓非子、難勢き、干將鏃一吳王闔閭、干將をして劍二口を作らしむ。干將其の妻莫邪と共に良劍二口を作り、二人の名を以て是に名づけ奉る。(吳越春秋、闔閭内傳)



けり。吾が朝には是を和らげて、慶庵とも※醫者※ぼんとも言ふなり。又は小村の道場※坊も、薬をほどこそ道は仁者なれど、是もはやりをよろこばれて縮緬醫者にかはる事なし。又は後生たすけむといふも仁の道にちかし。されど釋氏も死を喜び、鈴打りんちならしてとぶらはるゝは、是も不仁の沙汰なるべし。昔より此の譬を穢多の伯樂※とは言ふなりけり。  
(風俗文選)

### 奥の細道

芭蕉

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて、老をむかふる者は日々旅にして旅を栖すまとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず。海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢を拂ひてや、年も暮れ、春立てる霞の空に、白川の關こえむと、そとろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず、もゝ引の破れをつゞり笠の緒付けかへて、三里※に灸するより、松嶋の月先づ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風※が別墅に移るに、

慶庵一但言集覽に洞房語園をひき、の邊に慶庵といひ、し醫者ありしが、療治はかたの如く下手なるが能く人を追従し、時々嘘をつきしとて誰が言ふとなく、輕薄がましきもの、事をいひあらしむ終いとけいひふれ、終にいはひふれ、終にいななり。醫者ぼん一幫間主。道場坊一堂守坊主。縮緬醫者一縮緬の長羽織など着るより云ふ。穢多の伯樂一矛盾の意の諺。牛馬の屠殺者にしてかつその治療をもする故にいふ。百代の過客一李園。春夜宴桃李園序。夫天地者萬物之逆旅、光陰生若夢、爲歡幾何。去年の秋一貞享

### 草の戸も住みかはる代ぞひなの家

表八句を庵の柱に懸け置く。彌生も末の七日、明ぼのの空朧々として、月※は有明にて光をさまれる物から、不二の峯幽にみえて、上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し。むつまじさかぎりは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。千住と云ふ所にて舟をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の泪をそゝぐ。

### 行く春や鳥啼き魚の目は泪

是を矢立の初として、行く道なほすゝまず。人々は途中に立ちならびて、後かげのみゆる迄はと見送るなるべし。  
ことし元祿二とせにや、奥羽長途の行脚只かりそめに思ひたちて、吳天※に白髪の恨を重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見ぬ境、若し生きて歸らばと定めなき頼みの末をかけ、其の日漸く早加※といふ宿にたどり著きにけり。瘦骨の肩にかゝれる物先づくるしむ。只身すがらにと出で立ち侍るを、番子一重は夜の防ぎ、ゆかた兩具墨筆のたぐひ、あるはさがたき銭などしたるは、さすがに打捨て難くて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。

五年(元祿元年)八月、姥捨山の月を、見善光寺を経て、九月、深川芭蕉菴に歸る。三里一膝の下外側の少しく窪みたる所。杉風が別墅一探茶菴。表八句一百韻の俳諧を懐紙に書く。時、初折の表に八句を有明にて、源氏物語、柏木、月は有明にて光をさまれ、ものから、まげさやかに見え、てなかくをかしき囁なり。鳥啼き云々一陶淵明、歸田園居。魚思故淵。一池。吳天一詩人玉屑、閩僧可士送僧詩。笠重吳天雪、鞋香楚地花。一。早加一サウカ。埼玉縣北足立郡草加町。



※室の八嶋下野  
國下都賀郡國府村  
室の八嶋。大神  
社あり。大神  
※曾良一寶永七年  
歿。年六十二。信  
濃下諏訪の人。河  
合氏通稱惣五郎。  
芭蕉菴の近くに住  
して翁の爲に薪水  
の勞をとる。鹿島  
紀行にも芭蕉に隨  
行せり。

※剛毅木訥論語、  
子路篇「剛毅木訥  
近仁。」

※黒髮山一男體山。

室の八嶋に詣づ。同行曾良が曰く、此の神は木花咲耶姫の神と申して、富士一躰也。無戸室に入りて焼け給ふ誓ひのみ中に、火々出見の尊生れ給ひしより、室の八嶋と申す。又煙をよみ習はし侍るもこの謂れなり。將このしろといふ魚を禁ず。縁起の旨世に傳ふ事も侍りし。

卅日日光山の麓に泊る。あるじの云ひけるやう、我名を佛五左衛門と云ふ。萬正直を旨とする故に人かくは申し侍るまゝ、一夜の草の枕も打解けて休み給へと云ふ。いかなる佛の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順禮ごときの人をたすけ給ふにやと、あるじのなす事に心をとどめてみるに、唯無智無分別にして正直偏固の者なり。剛毅木訥の仁に近きたぐひ、氣稟の清質尤も尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拜す。往昔此の御山を二荒山と書きしを、空海大師開基の時日光と改め給ふ。千歳未來をさと給ふにや、今此の御光一天にかゝりて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵の栖穩かなり。猶憚多くて筆をさし置きぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光  
黒髮山は、霞かゝりて雪いまだ白し。

剃り捨てて黒髮山に衣更

曾良

曾良は河合氏にして惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の勞をたすく。このたび松島象潟の眺め共にせむ事を悦び、かつは羈旅の難をいたはらむと、旅立つ曉髪を剃りて墨染にさまをかへ、惣五を改めて宗悟とす。仍つて黒髮山の句有り。衣更の二字力ありてきこゆ。

廿餘丁山を登つて瀧有り。岩洞の頂より飛流して百尺千岩の碧潭に落ちたり。岩窟に身をひそめ入りて瀧の裏より見れば、裏見の瀧と申し傳へ侍るなり。

暫時は瀧に籠るや夏の初

那須の黒羽といふ所に知る人あれば、是より野越にかゝりて直道をゆかむとす。

遙に一村を見かけて行くに雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中に行く。そこに野飼の馬あり。草刈るをのこになげきよれば、野夫といへどもさすがに情知らぬには非ず。いかゞすべきや、されども此の野は縦横に分れて、うひ／＼しき旅人の道ふみたがへむあやしう侍れば、此の馬のとゞまる所にて馬を返し給へと貸し侍りぬ。小さき者ふたり、馬の跡したひて走る。一人は小姫にて名をか

※薪水の勞一昭明  
太子、陶靖節傳  
「助三汝薪水之勞。」

※夏一陰曆四月十  
六日より七月十六  
日までに十日間こ  
もりてなす修行。  
夏行、夏安居、夏  
ごもりなどいふ。  
※那須一下野國那  
須郡にあり。







田一枚植ゑて立去る柳かな

心許なき日數重るまゝに、白川の關にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へと便り求めしものわりなり。中にも此の關は三關の一にして、風騷の人心をとどむ。秋風を耳に残し紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裝を改めし事など、清輔の筆にもとどめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな

曾良

とかくして越え行くまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津根高く、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸下野の地をさかひて山連る。影沼といふ所を行くに、今日は空曇りて物影うつらず。須賀川の驛に等躬といふものを尋ねて、四五日とどめらる。先づ白河の關いかにこえつるやと問ふ。長途のくるしみ身心つかれ、かつは風景に魂うばはれ、懷舊に腸を斷ちて、はかしくしう思ひめぐらさず。

風流のはじめやおくの田植うたむ。無下にこえむもさすがにと語れば、脇第三とつゞけて三卷となしぬ。

※いかで都へと一  
拾遺集、平兼盛、た  
よりあらばいかで  
都へ告げやらむか  
ぬと一  
※三關、勿來關、  
白河關、念珠ヶ關  
※秋風、因法師一  
集、能因法師一都  
をば霞と共風ぞふ  
し、かど秋風ぞふ  
白河の關一  
※紅葉を千載集、  
源頼政一都にはま  
だ青葉にて見しか  
ども紅葉散りしか  
白河の關一  
※古人冠を正し  
袋草子に、武田大  
夫國行、白河關を  
ぐ、吹く、能因の秋  
風をばいかと詠み  
所をばいかと詠み  
東ひたりと見ゆて  
通ひたりと見ゆて  
※會津根、磐梯山。  
※等躬、實永二年  
良、左衛門。八、須  
伊、長門。伊達蕉  
の著人にあり。

※僧一、名は可伸、  
井、彌三郎、俗名、  
井、彌三郎、太山、  
※山集、一、山深み、  
家に集、一、水た、  
む、か、つ、く、落、つ、  
椽拾ふほど。

※檜皮、一、安積郡山  
野、井村、大宇、日、和  
田、古名、安積宿、  
※か、つ、み、古、今、集、  
の、浅、香、の、沼、の、花、  
つ、み、か、つ、見、る、人、  
戀、ひ、や、渡、ら、む、  
※黒塚、一、安達ヶ原  
の、黒、塚、  
※し、の、ぶ、摺、一、信、夫  
里、の、名、物、石、の、上  
に、布、を、あ、て、石、の、上  
上、より、忍、草、に、て、摺  
り、て、亂、れ、し、も、の、な  
り、め、出、せ、し、も、の、な

此の宿の傍に大きな栗の木陰をたのみて世をいとふ僧有り。椽ひろふ太山もか  
くやと閒まどろに覺おぼえられて、ものにかき付け侍る。其の詞、

栗といふ文字は西の木と書きて、西方淨土たよに便  
ありと、行基菩薩の一生杖にも柱にも此の木を  
用ひ給ふとかや。

世の人の見付けぬ花や軒の栗

等躬が宅を出でて五里ばかり、檜皮かひだの宿を離れてあさか山有り。路より近し。此  
のあたり沼多し。かつみ刈る比もや、近うなれば、いづれの草を花がつみとは云ふ  
ぞと人々に尋ね侍れども、更に知る人なし。沼を尋ね人にとひ、かつみくくと尋ね  
ありきて、日は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて、黒塚くろづかの岩屋一見し、福  
嶋に宿る。あくればしのぶもぢ摺の石を尋ねて、忍ぶの里に行く。はるか山陰の小  
里に、石半ば土に埋れてあり。里の童部の來りて教へける、昔は此の山の上に侍り  
しを、往來の人の麥草をあらして此の石を試み侍るをにくみて、此の谷につき落せ  
ば、石の面下さまにふしたりといふ。さもあるべき事にや。



早苗とる手もとや昔しのぶ摺

※月の輪の渡を越えて瀬の上といふ宿に出づ。佐藤庄司が舊跡は左の山際一里半ばかりに有り。飯塚の里鯖野と聞き、尋ねく行くに、丸山といふに尋ねあたる。是庄司が舊館なり。麓に大手の跡など人の教ふるにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の嫁がしるし先づ哀なり。女なれどもかひくしき名の世に聞えつる物かなと袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入りて茶を乞へば、爰に義經の太刀、辨慶が笈をとめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

五月朔日の事なり。其の夜飯塚にとまる。温泉あれば湯に入りて宿をかるに、土座に蓮を敷きてあやしき貧家なり。灯もなければるりの火かけに寐所を設けて臥す。夜に入りて、雷鳴り雨しきりに降りて臥せる上より漏り、蚤蚊にせしられて眠らず。持病さへ起りて消え入るばかりになん。短夜の空もやうく明くれば又旅立ちぬ。猶夜の名残心す、まず。馬かりて桑折の驛に出づ。遙なる行末をかへてかゝる病覺東なしといへど、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なむ是天の命な

※飯塚—飯坂の誤  
※丸山—飯坂の西  
半里。  
※古寺—瑠璃光山  
醫王寺。  
※二人の嫁—繼信  
忠信の嫁甲冑を身に  
帶して夫に擬し老  
母を慰めたりとい  
ふ。  
※墮涙の石碑—晋  
の羊祜の卒せる後  
百姓を慕ひて岘  
山に碑を建てし  
が、見る者流涕せ  
るを以てこの名あ  
りとす。(晋書、  
羊祜傳)

りと、氣力聊か取直し、路縦横に踏んで伊達の大木戸をこす。鎧摺白石の城を過ぎ、笠嶋の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくの程ならむと人にとへば、是より遙か右に見ゆる山際の里を養輪・笠嶋といふ。道祖神の社、かたみの薄、今にありと教ふ。此の比の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍ればよそながら眺めやりて過ぐるに、養輪・笠嶋も五月雨の折にふれたりと、

笠嶋はいづこさ月のぬかり道

岩沼に宿る。

武隈の松にこそ目覺むる心地はすれ。根は土際より二木にわかれて、昔の姿うしなはずと知らる。先づ能因法師思ひ出づ。往昔陸奥の守にて下りし人、此の木を伐りて名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此のたび跡もなしとは詠みたり。代々あるは伐りあるは植ゑ繼ぎなどせしと聞くに、今はた千歳のかたちと、のほひて、めでたき松のけしきになん侍りし。

武隈の松見せ申せ遅櫻と、擧白といふものの餞別

したりければ、

※伊達の大木戸—  
岩代より磐城に入  
る關門。伊達の關  
ともいふ。  
※笠嶋の郡—笠嶋  
は名取郡にあり。  
※藤中將實方—笠  
嶋道祖神の社前を  
下馬せし通りを  
し爲落馬して死す  
と(源平盛衰記)  
※形見のすゝき—  
新古今集、西行、朽  
ちもせぬその名は  
かりを留めおきて  
枯野の薄形見にぞ  
見ゆる—  
※岩沼—名取郡岩  
沼町。古名武隈。

※能因法師—後拾  
遺、能因法師、後拾  
遺、千年の度跡もな  
し、松は此のたび跡  
もなしと詠みたり。  
※此の木を伐りて  
名取川の橋杭にせら  
れたる事などあれば  
にや、松は此のたび  
跡もなしとは詠み  
たり。代々あるは伐  
りあるは植ゑ繼ぎな  
どせしと聞くに、今  
はた千歳のかたちと  
、のほひて、めでた  
き松のけしきになん  
侍りし。

※擧白—草壁氏。  
蕪門、江戸に住す。



※松は二木―後拾遺集、橋季通一武隈の松は二木を都みきと答へむ

※宮城野―仙臺の東郊。玉田、横野、散木集、後頼朝とつなげ玉田、横野の放れ胸つゝじの岡にあせみ咲くなり。今集、東歌―み侍の木の下露は雨にまされり。木の下―宮城野の南、薬師堂あり。天神のみやしるにあり。

※奥の細道―仙臺より鹽釜方面に行く道を指せり。菅菰。此の地の名産たり。壺の碑―坂上田村が陸奥七戸壺林に建てし壺の碑

は、今こゝに言へるとは異り。こゝに言へるは多賀城に言へるは混同し碑なれど、混同しなるともいふ。作

※野田の玉川―鹽釜の南、多賀城村を流るゝ小川。二條院讃岐の沖の石の人こそ知らね乾くまもなし―によりて附會せられたる石なり。集、東歌―君をおきて仇し心をわが持たば末の松山波も越えなむ。末松山―寶國寺。羽をかはし―長恨歌―在天願作比翼鳥―在地願爲連理枝。つなでかなしも―古今集、東歌―みちのくはいづくはあれど鹽釜の浦こぐ舟の綱手かなし。舞―幸若舞。

櫻より松は二木を三月越し

名取川を渡りて仙臺に入る。あやめ暮く日なり。旅宿を求めて四五日逗留す。爰に畫工加右衛門といふ者あり。聊か心ある者と聞きて知る人になる。この者、年比さだかならぬ名どころを考へ置き侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて秋のけしき思ひやらるゝ。玉田・よこ野・つゝじが岡はあせび咲くころなり。日影ももらぬ松の林に入りて、爰を木の下といふとぞ。昔もかく露ふかければこそ、みさぶらひみかさとはよみたれ。薬師堂・天神の御社など拜みて其の日はくれぬ。猶松島鹽がまの所々畫に書きて送る。かつ紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其の實を顯す。

あやめ艸足に結ばむ草鞋の緒

かの畫圖にまかせてたどり行けば、おくの細道の山際に十符の菅有り。今も年々十符の菅菰を調へて國守に献ずと云へり。

壺碑 市川村多賀城に有り。

壺の石ぶみは、高さ六尺餘、横三尺ばかりか。苔を穿ちて文字幽かなり。四維國

界の里數をしるす。此城神龜元年、按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年、參議東海東山節度使同將軍惠義朝臣朝猶修造而十二月朔日と有り。聖武皇帝の御時にあたれり。昔よりよみ置ける哥枕おほく語り傳ふといへども、山崩れ川落ちて道あらたまり、石は埋れて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り代變じて、其の跡たしかならぬ事のみを、こゝに至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閱す。行脚の一徳存命の悦び、羈旅の勞をわすれて泪も落つるばかりなり。

それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造りて末松山といふ。松のあひく皆墓はらにて、はねをかはし枝を連ぬる契りの末も、終はかくの如しと悲しさも増りて、鹽がまの浦に入相の鐘を聞く。五月雨の空聊か晴れて、夕月夜かすかに、籬が嶋もほど近し。蟹の小舟こぎつれて、肴わかつ聲々に、つなでかなしもとよみけむ心もしられていと哀なり。其の夜目盲法師の琵琶をならして奥淨瑠璃といふものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上げて枕近うかしましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えらる。



※國守—伊達政宗  
慶長十二年修造

※和泉三郎—秀衡  
の三男、父の遺命  
を守つて義經に味  
方し、兄泰衡の爲  
に殺さる。

※浙江の湖—浙江  
省浙水の下流をい  
ふ。錢塘灣に注ぐ。  
蘇東坡の詩句に  
「盧山煙雨浙江潮」

※美人の顔—蘇東  
坡、飲三湖上一初晴  
後雨—若把三西湖  
比三西子、淡粧濃抹  
總相宜」の脱化。

※雲居禪師—京都  
妙心寺の僧、後ち  
伊達忠宗に招かれ  
瑞巖寺の中興す。  
住別室の跡—把不  
住軒といへり。袋  
※松島の一見の時、  
この句の詞書に  
千鳥もかるや鶴の  
毛衣とよめりけれ  
ば—とあり。  
※原安適—深川に  
住める醫者。松島  
浦村は宮城郡七ヶ  
濱村大字宮浦田の  
海岸をいひ、松島  
とは別なり。  
※眞壁の平四郎—  
出家して法身とい  
ふ。入宋して歸朝  
後、この寺に入山  
せり。  
※見佛聖—雄島に  
妙覺庵を營みて苦  
行十二年、法華經  
を誦すること六萬  
遍に及べりとい  
ふ。鳥羽天皇の時  
の人。  
※雄兎菟—孟子、  
梁惠王下—文王之  
圍方七十里、芻蕘  
者往焉、雄兎者往  
焉。

早朝鹽がまの明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしく彩椽きらびやかに、石の階九段に重り、朝日朱の玉垣をかゝやかす。かゝる道の果塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ吾が國の風俗なれと、いと貴けれ。神前に古き寶燈有り。かねの戸びらの面に、文治三年和泉三郎寄進とあり。五百年來の佛、今日の前に浮びてそゝろに珍し。渠は勇義忠孝の士なり。佳名今に至りてしたはずといふ事なし。誠人能く道を勤め義を守るべし、名もまた是にしたがふといへり。日既に午にちかし。舟をかりて松嶋にわたる。其の間二里餘、雄嶋の磯につく。

抑もことふりにたれど、松嶋は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西湖を恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里浙江の潮をたふふ。嶋々の數を盡して、敬つものは天を指し、ふすものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり三重にたふみて、左にわかれ右につらなる。負へるあり抱けるあり、兒孫愛すがごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづから矯めたるがごとし。其の氣色宵然として美人の顔を粧ふ。ちはやぶる神のむかし、大山祇のなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を盡さむ。

雄嶋が磯は地つゞきて、海に出でたる嶋なり。雲居禪師の別室の跡、座禪石などあり。はた松の木陰に世を厭ふ人もまれく見え侍りて、落穂松笠などうちけぶりたる草の菴閑に住みなし、いかなる人とはしられずながら、先づなつかしく立寄るほどに、月海にうつりて晝の眺め又あらたむ。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寐すること、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす  
曾 良

予は口をとどて、眠らむとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩あり、原安適松が浦島の和哥を贈らる。袋を解いてこよひの友とす。かつ杉風・濁子が發句あり。

十一日瑞岩寺に詣づ。當寺三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して、入唐歸朝の後開山す。其の後に雲居禪師の徳化によりて、七堂葺改りて、金碧莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれりける。彼の見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。

十二日、平泉と心ざし、あねはの松・緒だえの橋など聞き傳へて、人跡まれに雄兎菟蕘の往きかふ道そこともわかず、終に路ふみたがへて石の卷といふ湊に出づ。こ



※こがね花さく一  
 萬葉集、家持一す  
 めろぎの御代榮え  
 むとあづまなるみ  
 ちのく山に黄金花  
 さく

※袖の渡―石の巻  
 の北。北上川の渡  
 しなり。

※尾ぶちの牧―石  
 の巻の對岸にあり  
 といふ。

※眞野の萱原―稻  
 井村眞野にあり。

※戸伊摩―登米町。  
 ※三代の榮繼―藤  
 原清衡、基衡、秀  
 衡。

※國破れて―杜市、  
 春望―國破山河在、  
 城春草木深。

※兼房―義經の忠  
 臣、増尾十郎權頭。  
 高館にて義經自害  
 の後館に火をか  
 け、白髪を振亂し  
 て奮戦せし事義經  
 記に見ゆ。

がね花咲くとよみて奉りたる金花山海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人  
 家地をあらそひて竈の煙立ちつゞけたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、  
 宿からむとすれど更に宿かす人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、明くれ  
 ば又知らぬ道まよひ行く。袖の渡り、尾ぶちの牧、眞野の萱はらなどよそめに見て  
 遙なる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ所に一宿して平泉に到る。其  
 の間廿餘里ほどとおぼゆ。

※三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有り。秀衡が跡は田野にな  
 りて、金鷄山のみ形を残す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。  
 衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は、衣が關  
 を隔てて南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偕も義臣すぐつて此の城にこ  
 もり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷  
 きて時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡  
 卯の花に兼房みゆる白毛哉

※四面新に圍んで  
 軍惟康親王、金色  
 堂に精堂を造らし  
 む。

※大山―鳴子より  
 羽前へ越ゆる中山  
 越をいふ。

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、  
 三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既  
 に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新に圍んで藁を覆うて風雨を凌ぐ。暫時千載の  
 記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂

南部道遙に見やりて、岩手の里に泊る。小黒崎、みつの小嶋を過ぎて、鳴子の湯  
 より尿前しんまへの關にかゝりて、出羽の國に越えむとす。此の路旅人稀なる所なれば、關  
 守にあやしめられて漸として關をこす。大山をのぼつて日既に暮れければ、封人の  
 家を見かけて舍を求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

あるじの云ふ、是より出羽の國に大山を隔てて道さだかならざれば、道しるべの人  
 を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて人を頼み侍れば、究竟の若者反脇差  
 をよこたへ、檜の杖を携へて我々が先に立ちて行く。けふこそ必ず危きめにもあふ  
 べき日なれと、辛き思ひをなして後について行く。あるじの云ふにたがはず、高山



※一鳥聲きかず  
王安石、鍾山即事  
幽。鳥不鳴山更  
※雲端に土ふる！  
杜市、鄒野馬潜曜  
宴洞中、己入風  
磴、雲端、  
※最上庄、最上郡  
新庄。

※清風、鈴木八右  
門、紅花商にして  
鳥田屋といふ。蕉

※ねまる、寝そべ  
る。關東東北方言。  
※かひやが下、萬  
葉集、十六朝霞か  
ひやが下に鳴くか  
はづしぬびつゝあ  
りと告げむ子もが  
も。

※立石寺、東村山  
郡山寺村。

森々として一鳥聲きかず。木の下闇茂りあひて夜行くがごとし。雲端に土ふる心地して、篠の中踏み分け、水をわたり岩に蹶きて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せしをこの云ふやう、此のみち必ず不用の事有り、恙なう送りまわらせて仕合したりと、よろこびてわかれぬ。跡に聞きてさへ胸とゞろくのみなり。

尾花澤にて清風といふ者を訪ぬ。かれは富めるものなれども、志いやしからず。都にも折々かよひて、さすがに旅の情をも知りたれば、日比とゞめて長途のいたはりさまゝにもてなし侍る。

涼しさを我が宿にしてねまる也

這出でよかひやが下のひきの聲

まゆはきを佛にして紅粉の花

蠶飼する人は古代のすがた哉

曾良

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覺大師の開基にして、殊に清閑の地なり。一見すべきよし人々の勧むるに依つて、尾花澤よりとつて返し、其の間七里ばかりなり。

日いまだ暮れず、麓の坊に宿かり置きて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年ふり、土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音きこえず。岸をめぐり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行くのみおぼゆ。

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

最上川乗らむと、大石田と云ふ所に日和を待つ。爰に古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花のむかしをしたひ、芦角一聲の心をやはらげ、此の道にさぐり足して、新古ふた道に踏み迷ふといへども、道しるべする人しなればと、わりなき一卷残しぬ。このたびの風流爰に至れり。

最上川はみちのくより出でて、山形を水上とす。ごてん、はやぶさなど云ふおそろしき難所有り。板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稻つみたるをやいな舟といふならし。白糸の瀧は青葉のひまゝに落ちて、仙人堂岸に臨みて立つ。水漲つて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日、羽黒山に登る。圖司左吉といふ者を尋ねて、別當代會覺阿闍梨に謁す。

※いな舟、古今集  
東歌、最上川上れ  
ば下る稻舟のいな  
にはあらすこの月  
ばかり、瀧、古口  
※白糸の瀧、古口  
村の上、草薙の對  
岸。  
※圖司左吉、元祿  
六年、羽黒山麓  
手向村の人。佛號  
を呂丸又露丸とも  
書く。蕉門。



南谷の別院に舍して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。

四日本坊に於いて俳諧興行。

有難や雪をかをらす南谷

※權現「羽黒權現」  
今の出羽神社。  
※延喜式に「延喜  
式に見えず、芭蕉  
の誤なるべし。」  
※月山「頂上に月  
山神社あり。月讀  
命を祭る。」  
※湯殿山「湯殿山。  
湯殿山神社あり。」

※寶冠「頭巾の如  
く頭を包める白  
布。」

※此の國の鍛冶「  
刀工月山。鬼王丸  
の子、建久頃の人。」

五日、權現に詣づ。當山開關能除大師は、いづれの代の人といふ事をしらず。延喜式に羽州里山の神社と有り。書寫、黒の字を里山となせるにや、羽州黒山を中略して羽黒山と云ふにや。出羽といへるも、鳥の毛羽を此の國の貢に献ると風土記に侍るとやらむ。月山・湯殿を合せて三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明かに、圓頓融通の法の灯かゝげそひて、僧坊棟をならべ、修驗行法を勵まし、靈山靈地の驗効、人貴びかつ恐る。繁榮長へにして、めでたき御山と謂つべし。八日、月山にのぼる。木綿しめ身に引きかけ、寶冠に頭を包み、強力と云ふものに導かれて、雲霧山氣の中に氷雪を踏んでのぼる事八里、更に日月行道の雲關に入るかとあやしまれ、息絶え身こゝえて、頂上に臻れば、日没して月顯る。笹を敷き、篠を枕として、臥して明くるを待つ。日出でて雲消ゆれば、湯殿に下る。谷の傍に鍛冶小屋といふ有り。此の國の鍛冶靈水を選びて、こゝに潔齋して劍を打ち、終に

※龍泉に「支那汝  
南西平縣にある泉  
の名。此の泉にて  
鍛冶して良劍を得  
しより龍泉と呼べ  
り。」  
※千將莫耶「仁不  
仁論頭註參照。」  
※炎天の梅花「芭蕉  
林句集「雪裏芭蕉  
摩詰畫、炎天梅藥  
簡齋詩。」  
※行尊僧正「金葉  
集「もろともに哀  
と思へ山ざくら花  
より外にしる人も  
なし。」

※錢ふむ道「この  
山にては參詣者は  
錢を惜しまず賽  
し、又道に散れる  
賽錢にも目をくれ  
ずといふ。」  
※長山氏重行「酒  
井侯家臣。名は恒  
行。和歌をもよく  
せり。」  
※淵庵不玉「伊藤  
氏。酒井侯の醫者。  
淵庵は醫名、不玉  
は俳號なり。」

月山と銘を切つて世に賞せらる。かの龍泉に劍を淬ぐとかや。千將莫耶の昔をしたふ。道に堪能の執あさからぬ事しられたり。岩に腰かけてしばし休らふほど、三尺ばかりなる櫻の蕾半ば開けるあり。降り積む雪の下に埋れて、春を忘れぬ遅ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰に薫るがごとし。行尊僧正の歌のあはれも爰に思ひ出でて、猶まさりて覺ゆ。すべて此の山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍つて筆をとめて記さず。坊に歸れば、阿闍梨の需に依つて、三山順禮の句々短冊に書く。

涼しさやほの三日月の羽黒山

雲の峯幾つ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山錢ふむ道の泪かな

曾良

羽黒を立つて、鶴が岡の城下長山氏重行といふ武士の家に住かへられて、俳諧一卷有り。左吉も共に送りぬ。川舟に乗つて酒田の湊に下る。淵庵不玉といふ醫師の許を宿とす。



※あつみ山—温海山。

※莫作—摸索に通じ用ひしなり。  
※雨も亦奇なり云々—蘇東坡、飲湖上—初晴後雨、水光潑潑晴偏好、山色空濛雨亦奇、若把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜。  
※花の上こぐと—西行の歌と傳ふる「象潟の櫻は浪にうづもれて花の上こぐあまの釣舟—」  
※南に鳥海—實は東南。  
※むや／＼の關—うやむや、もやもや、いなむやなどともいふ。陸前羽前の境にありき。

※西施が—前掲蘇市坡の詩による。

※料理何くふ—象潟は古來殺生禁斷の湖なりしといふ。

※浪こえぬ—後撰集、元輔—契りきなかつたみに袖をしぼりつゝ、末の松山波越さじとは—

※荒海や—銀河序  
※親知らず云々—西頸城青海村より市振村に至る途中に是等の難所あり。

※あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

暑き日を海にいらたり最上川

江山水陸の風光數を盡して、今象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え磯を傳ひいさをふみて、其の際十里、日影や、かたぶく比、汐風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隠る。關中に莫作して雨も亦奇なりとせば雨後の晴色又たのもしと、蟹の筥屋に膝をいれて雨の晴るゝを待つ。其の朝、天能く霽れて朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟を浮ぶ。先づ能因嶋に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、向ふの岸に舟をあがれば、花の上こぐとよまれし櫻の老木、西行法師の記念を残す。江上に御陵あり、神功后宮の御墓といふ。寺を千満珠寺といふ。此處に行幸ありし事いまだ聞かず。いかなる事にや。此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさへ、其の影うつりて江にあり。西はむや／＼の關路をかぎり、東に堤を築きて秋田にかよふ道遙に、海北に構へて浪打入るゝ所を汐ごしと云ふ。江の縦横一里ばかり、佛松嶋にかよひて又異なり。松嶋は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂をなや

ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭禮

象潟や料理何くふ神祭

蟹の家や戸板を敷きて夕涼

岩上に雌鳩の巢をみる

波こえぬ契ありてやみさごの巢

酒田の名残日を重ねて、北陸道の雲に望む。遙々のおもひ胸をいたましまして、加賀の府まで百卅里と聞く。鼠の關をこゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國市振の關に到る。此の間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事を記さず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天の河

今日は親知らず子知らず・犬もどり・駒返しなど云ふ北國一の難所を越えてつかれ



※白浪のよする  
新古今集、讀人知  
らす「白波のよす  
る活に世をつくす  
蟹の子なれば宿も  
定めず」

侍れば、枕引寄せて寐たるに、一間隔てて、面おもての方に若き女の聲二人ばかりと聞ゆ。年老いたるをこの聲も交りて物語するをきけば、越後の國新潟といふ所の遊女なりし。伊勢參宮するとして、此の關までをこの送りて、あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやるなり。白浪※のよする汀に身をはふらかし、蟹の子の世をあさましう下りて、定めなき契日々の業因いかにつたなしと、物いふを聞くく寐入りて、あした旅立つに、我々にむかひて、行方知らぬ旅路のうさ、あまり覺束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍らむ、衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて結縁せさせ給へと泪を落す。不便の事には侍れども、我々は所々にてとゞまる方多し、只人の行くにまかせて行くべし、神明の加護かならず恙なかるべしと云ひ捨てて出でつゝ、哀さしばらく止まざりけらし。

一つ家に遊女もねたり萩と月  
曾良にかたれば書きとゞめ侍る。

※那古といふ浦  
越中國射水郡湊町  
附近の海岸。  
※擔籠の藤浪一萬  
葉集、大伴家持「多

黒部四十八か瀬とかや、數しらぬ川をわたりて、那古※といふ浦に出づ。擔籠※たごの藤浪は春ならずとも、初秋の哀といふべきものと、人に尋ねれば、是より五里磯傳

枯の浦の底さへに  
ほふ藤浪をかざし  
てゆかむ見ぬ人の  
爲

※何處大阪の人。  
傳不詳。猿蓑等に  
句出づ。  
※一笑元祿元年  
十一月六日歿、年  
三十六。金澤の人。  
小杉新七又茶屋新  
七ともいふ。  
※其の兄「俳號ノ  
松。この時追善集  
「西の雲」を撰ぶ。

※小松一能美郡小  
松町。

ひしてむかふの山陰にいり、蟹の苦ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじといひおどされて、加賀の國に入る。

早稻の香や分け入る右はありそ海

卯の花山、くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日なり。爰に大阪よりかよふ商人何處※といふ者有り。それが旅宿をとみにす。

一笑といふものは、此の道にすける名のほのく聞えて、世に知る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、其の兄追善を催すに、

塚も動け我が泣く聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中唸

あかくと日はつれなくも秋の風

小松※といふ所にて

しほらしき名や小松吹く萩薄



※錦の切平家物  
語源盛衰記に  
よれば宗盛より  
赤地錦垂を賜は  
れりといふ。

※むざんやな一諸  
曲、實盛一あなむ  
ざんやな、齋藤別  
當にて候ひけるぞ  
や。

※久米之助一寶曆  
元年歿。和泉屋又  
兵衛の子。この時  
芭蕉より桃天と  
いふ俳號を與へら  
る。洛の貞室云々一  
歴代滑稽傳、俳諧  
水滸傳等に見ゆ。

此の所太田の神社に詣づ。實盛が甲錦の切あり。往昔源氏に屬せし時、義朝公より賜はらせ給ふとかや。げにも平士の物にあらず、目庇より吹返しまで菊唐草のほりもの金をちりばめ、龍頭に鍬形打ちたり。實盛討死の後、木曾義仲願狀にそへて、此の社にこめられ侍るよし、樋口の次郎が使せし事共、まのあたり縁起に見えたり。

※むざんやな甲の下のきりくす

山中の温泉に行くほど、白根が嶽後に見なして歩む。左の山際に觀音堂あり。花山の法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名付け給ふとかや。那智・谷組の二字をわかち侍りしとぞ。奇石さまざまに、古松植ふならべて、萱ぶきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地なり。

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す。其の效有馬に次ぐと云ふ。

山中や菊はたをらぬ湯の匂

あるじとするものは久米之助とて、いまだ小童なり。かれが父俳諧を好み、洛の貞室若輩の昔爰に來りし比、風雅に辱しめられて、洛に歸りて貞徳の門人となつて世

※行きくいて山  
家集一づくにか  
眠りくいて倒れ  
さむと思ふ悲し  
道芝の露一  
※雙鳧の云々一  
漢書、蘇武別一  
陵一詩一雙鳧俱  
飛一鳥獨南翔、子  
當一留斯館一我當  
歸一故鄉一  
※書付一笠の上  
同行何人と書きた  
るをいふ。

※衆坊一禪寺には  
僧坊以外に學問僧  
を宿泊せしむる坊  
あり、これをいふ。

に知らる。功名の後、此の一村判詞の料を請けずといふ。今更昔語りとはなりぬ。

曾良は腹を病みて、伊勢の國長嶋といふ所にゆかりあれば、先立ちて行くに、

※行きくいて倒れ伏すとも萩の原

曾良

と書き置きたり。行く者の悲しみ、残る者のうらみ、雙鳧のわかれて雲にまよふがごとし。予もまた、

今日よりや書付消さむ笠の露

大聖寺の城外、全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地なり。曾良も前の夜此の寺に泊りて

夜もすがら秋風聞くや裏の山

と残す。一夜の隔て千里に同じ。吾も秋風を聞きつゝ、衆寮に臥せば、曙の空近う讀經聲すまゝに、鐘板鳴つて食堂に入る。けふは越前の國へと心早卒にして堂下に入るを、若き僧ども紙硯をかへ、階のもとまで追ひ來る。折節庭中の柳散れば、庭掃いて出づるや寺に散る柳

とりあへぬさまして、草鞋ながら書き捨つ。越前の境、吉崎の入江を舟に棹して、



汐越の松を尋ぬ。

夜もすがら嵐に波をはこばせて

月をたれたる汐越の松

西行

※夜もすがら云々  
この歌西行作と  
しての徴證なく、  
菅孤抄には「蓮如  
上人の御詠なる  
由、彼の宗の徒皆  
言へり」とあり。  
※無用の指、莊子、  
駢樹篇「是故駢  
於足者連、無用之  
肉也、枝於手  
者、樹無用之指  
也。」  
※天龍寺—吉田郡  
松岡村にあり。

此の一首にて數景盡きたり。もし一辯を加ふるものは、無用の指を立つるが如し。  
丸岡天龍寺の長老、古き因みあれば尋ぬ。又金澤の北枝といふ者、かりそめに見  
送りて此處までしたひ來る。所々の風景過さず思ひつゞけて、折節あはれなる作意  
など聞ゆ。今既に別にのぞみて、

物書いて扇引きさく名殘哉

五十丁山に入つて永平寺を禮す。道元禪師の御寺なり。邦幾千里を避けて、かゝる  
山陰に跡をのこし給ふも、貴き故有りとかや。

※邦幾千里—詩經  
「邦幾千里、惟民所  
止。」  
※貴き故—越前の  
大守波多野義重頼  
に道元を請待す。  
禪師は宋の師如淨  
が越の産なれば、  
越前の名を聞くも  
慕はしとして、請を  
容れたりといふ。  
(越前名勝志)  
※等栽—福井の人。  
櫻井元輔の門人。

福井は三里ばかりなれば、夕飯したゝめて出づるに、黄昏の路たたくし。爰に  
等栽といふ古き隱士有り。いづれの年にか、江戸に來りて予を尋ぬ。遙か十とせ餘  
りなり。いかに老いさらばひてあるにや、將死にけるにやと人に尋ね侍れば、いま  
だ存命してそこくと教ふ。市中ひそかに引入りて、あやしの小家に夕顔へちまの

俳號を笈景といふ。

※昔物語—源氏物  
語、夕顔—昔物語  
にこそかゝること  
は聞け。

※明夜の陰晴—孫  
明復、八月十四日  
夜—清構素瑟宣先  
賞—明夜陰晴未  
レ可レ知。  
※遊行二世の上人  
—遊行者、一世の上  
人の弟子、眞教。上  
元應元年寂、年八  
十三。

這ひかゝりて、鶏頭箒木に戸ぼそをかくす。さては此の内にこそと門を叩けば、佗  
しげなる女の出でて、いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは此のあたり  
何がしと云ふものの方に行きぬ。もし用あらば尋ね給へといふ。かれが妻なるべし  
と知らる。昔物語にこそかゝる風情は侍れと、やがて尋ねあひて、その家に二夜泊  
りて、名月は敦賀の湊にと旅立つ。等栽も共に送らむと、裾をかしうからげて、路  
の枝折とうかれ立つ。漸く白根が嶽かくれて、比那が嵩あらはる。あさむつの橋を  
わたりて、玉江の蘆は穂に出でにけり。鶯の關を過ぎて湯尾峠を越ゆれば、燈か城、  
かへる山に初鴈を聞きて、十四日の夕暮、敦賀の津に宿をもとむ。その夜月殊に晴れ  
たり。明日の夜もかくあるべきにやといへば、越路の習ひ猶明夜の陰晴はかりがた  
しと、あるじに酒すゝめられて、氣比の明神に夜參す。仲哀天皇の御廟なり。社頭  
神さびて、松の木の間にもり入りたる、おまへの白砂霜を敷けるがごとし。往  
昔遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈り、土石を荷ひ、泥濘を  
かわかせて、參詣往來の煩ひなし。古例今にたえず、神前に眞砂を荷ひ給ふ。これ  
を遊行の砂持と申し侍ると、亭主のかたりける。



月清し遊行のもてる砂の上  
十五日、亭主の詞にたがはず雨降る。

名月や北國日和定めなき

十六日、空霽れたれば、ますほの小貝ひろはひと、種の濱に舟を走す。海上七里あり。天屋某といふもの、破籠・小竹筒などこまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時の間に吹き着けぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、佗しき法華寺あり。爰に茶を飲み酒をあたくめて、夕暮のさびしさ感に堪へたり。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

浪の間や小貝にまじる萩の塵

其の日のあらまし、等裁に筆をとらせて寺に残す。

路通も此の湊まで出むかひて、美濃の國へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より來り合ひ、越人も馬をとばせて、如行が家に入り集る。前川子、荊口父子、其の外親しき人々日夜とぶらひて、蘇生の者に逢ふがごとく、かつ悦びかついたはる。旅のものうさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢

※ますほの小貝ひろはひと、種いりの濱に舟を走す。海上七里あり。天屋某といふもの、破籠・小竹筒などこまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時の間に吹き着けぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、佗しき法華寺あり。爰に茶を飲み酒をあたくめて、夕暮のさびしさ感に堪へたり。

の遷宮拜まむと又舟にのりて、  
蛤かきのふたみにわかれ行く秋ぞ  
(奥の細道)

### 奈良園うちは賛

也な有

青によし奈良の帝の御時、いかなる寂慮に預かりてか、此の地の名産とはなれりけむ。世はたゞ其の道の藝くはしからば多能たはなくてもあらまし。かれよ、かしこくも風を生ずるの外は、たえて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたたまれて公界くがいに詣ふねぢけ心もなし。たゞ木の端と思ひすてたる雲水の生涯ならむ。さるは桐の箱の家をも求めず、ひさごがもとの夕涼み、書寝の枕まくらに宿直して、人の心に秋風立てば、また來る夏をたのむとも見えず。物置の片隅に紙屑籠と相住して、鼠の足に汚されるれども、地紙をまくられて野ざらしとなる扇には勝りなむ。我汝に心を許す、汝我に馴れて裸身の寝姿を、あなかしこ人に語ること勿れ。

袴着る日はやすまする團かな

(鶉衣)

氏。名は時敏、字は伯懐、後並明、通稱孫右衛門、半掃菴、里等の別號あり。初め野又、また野有と號す。和漢の學に通じ、その佛文の酒脱は普く世に知らるゝ所なり。著書、野夫談、小皮籠、蕪葉集、管見草、鶉衣等。多能論語、子罕篇一吾少也賤、故多能鄙事、君子多乎哉、不多也。所。公界一公開の場。木の端一法師のこと。枕草子一思はんを法師に思はらんとし、心苦しけれ、木をたぐし、端などのやうに思ひたらんこそいと、いとほしがれ。と、ひさごが下。涼み長嘘子の夕涼みは夕顔に、二布して、女下



長短、解

也 有

※長濱古今集  
一君が代は限りも  
あらし長濱の眞砂  
の数はよみつぐす  
と一  
※龜の尾山小倉  
山の東南の尾、龜  
の甲の形に似たる  
故にこの名あり。へ  
壬生忠見一行かへ  
り程さへ遠き子ひ  
日かな千代の松ひ  
く龜の尾の山一  
年壽の長七曲一  
る辭に五百八十  
七まがりといふ十  
六豆の異名。十  
※獨活の大木。諺  
量の活なるのみに  
て質劣れるのみに  
※鼻の下の伸び過  
ぎたる一思相をい  
ふ。  
※難波湯云々一節  
古今集伊勢一節  
波短き蘆の節の難

大はよく小を兼ね、短は長にまかるゝためし、世にそのたぐひ多かり。たゞ君を  
賀し人を壽ぐにぞ、齡を長濱の鶴にたくへ、あるは龜の尾山の尾を引きて、五百八  
十七曲と祝ひものするにはあく方あらしかし。その餘はひたぶるに十八さゝげのゆ  
たけきにならへば、獨活の大木の謗をのがれず。矮雞の足は短きを愛し、禿が返辭  
は長きにのどけし。出る杭かしら打たれてつひの益なく、下手の談議のとまりかね  
ては軒の柳も眠り顔なり。唯女の髪こそめでたくあらましを、手長さ人は一門にも  
遠ざけられ、鼻の下の伸び過ぎたるは大事の相談にもらされて、其の夜の温飽の長  
さを知らず。されば必ず長きは短きが上にも立ち難し。物は唯秋の夜の長くてよか  
らむは長く、難波湯短き蘆の長からずしてよきは短くてあらなむ。さるを聖人も右  
の袂の自由を物好けり。世に式法をこまかに定めてかねあひさまるものもあれど、  
そのむつかしき境は人の製作なり。天地もと窮屈ならず、長短は自然にそなへて寸  
分の詮議はなし。摺粉木は兩手に握るを程とし、杓子・さい槌は片手に足れり。下

間もあはてこの世  
を過ぐしてよと  
や  
※右の袂の自由  
論語、郷黨篇一  
※長短、短右袂。こ  
※さい槌一木にて  
作りたる小さき  
槌。  
※田氏一津田氏。  
※張子が馬を懐に  
は、太平廣記一張  
泉乘一白驢一  
行三數萬里一休則疊  
之如紙一置巾箱  
中一乘則以水噴  
之還成一驢矣。

※笠は東坡が云々  
蘇東坡を畫ける  
ものに驢背に乗り  
竹笠を戴けるもの  
ありて、東坡笠の  
名あり。  
※野がけ一野遊び。  
※宰予一孔子の門  
人。論語、公冶長篇  
「宰予晝寢。」  
※日待一日祭の義。  
親戚知友など相集  
りて夜を徹し、翌  
朝の日の出を待ち

ざまのものながら天理のまゝなるぞ尊けれ。わが友田氏、過ぎし頃かりそめの旅の  
土産に煙管を贈れり。その短きこと掌にかくすべし。我この秋西郊に遊ぶことあり  
て、調寶甚だ長きにまされり。是をくはへて手を借らず、久しくして齒を勞せず、  
ゆく／＼野山に雲を吹き、あく時は袖に納む。張子が馬を懐にするが如し。こゝに  
おいて感あり、遂に長短の解を作りて是をむくゆの詞に代ふ。其の辭の長過ぎたる  
は、又才の短き故ならし。  
(鶉 衣)

木履、説

也 有

木履々々、笠は東坡が春の野がけの尻に敷かるゝ折もあるべきに、などや汝は夏  
の日の宰予が枕にも履はれざる。日和つゞきて隙なる時は、縁の下に寝ころび、葦  
の霜夜に伴なひ、又は座頭の杖にさゝれて日待の壁にぶらつきては、傾くまでの月  
をも見るらむ。たま／＼輕業の綱渡りにはかれて、高みに人を見おろす事もあれど、

て之を拜む風習。  
江戸時代に汎く民  
間に行はれたり。

※傾くまでの一後  
拾遺集、赤染衛門  
「やすらはて寝な

ましものを小夜ふ  
けて傾くまでの月  
を見し哉」



常は杵ぬぎに跪き、洗濯の日の腰掛となりて、それより上の交りは知らず。かく下  
 さまの物ながら、狩人の笛となりては、口に吹かるゝためしもありとや。その鹿の  
 命を断てるは、罪深き身の果なれど、佛も下駄も同じ木の切と、例の一体の示しに  
 逢ひて、はじめて輪廻の鼻緒は切れてむ。抑々足高きものを木履足駄と號し、たけ  
 低きを下駄といへるは、いづれ一體分身にして、こゝに尊卑の差別はあらねど、俳  
 諧の上に二つの姿を論ずべくは、ぼくりく〜と静かなるは雪降りの朝にして、下駄  
 々々といそがしきは村雨の夕なるべし。

(鶉衣)

鬼傳

也 有

※狩人の笛徒然  
 草一女のはける足  
 駄にて作れる笛に  
 は、秋の鹿必ずよ  
 るとぞ言ひ傳へ侍  
 る。  
 ※佛も下駄も古  
 今夷曲集、一体直  
 ぐなるもゆがめる  
 川も川は川佛も  
 下駄も同じ木のき  
 れ。  
 ※舍利を盗みし科  
 奪ひし時、舍利を  
 是を追うて取戻し  
 たりと云ふ。  
 ※牢人浪人。  
 ※楊貴妃云々、玄  
 宗皇帝の病、病鬼  
 鍾馗に病みしが  
 王鏡に姿を寫して  
 病鬼を退治せり。  
 (諸曲、皇帝)  
 ※かくれ蓑の身  
 保元物語、卷三、然  
 れば、汝等は鬼の子  
 孫か、さん候、さ  
 ては開き出せよ、あ  
 らば取り出せよ、あ  
 見む、と宣へば、  
 昔正しく鬼神なり

昔は佛の國に住みしが、舍利を盗みし科により、天竺牢人の部になりて唐土へ渡  
 りしを、鬼も十八のあだし心より、楊貴妃の枕にしのでて、鍾馗といへる鬚男に追  
 はれ、かくれ蓑の身も住みうしとや、十郎姫にもひき別れ、赤裸に身代たゝみて、  
 始めて日本へ親に似ぬ子と生れ出でけるとかや。其の頃はまだ涙脆くやありけむ、  
 朝雄が歌の理屈につまりて、一と先づ分散しけるまでは、流石に横道なしと役の行者

し時は隠篋隠笠浮  
 履などいふ實あ  
 りけり。  
 ※十郎姫鬼の娘  
 の名に似ぬ子に  
 親に似ぬ子は  
 鬼朝子云々、天  
 天皇の御宇、藤  
 方とて、四つ原  
 鬼を使つて、國  
 世し、紀朝雄、草  
 も木もわが大君  
 鬼のすばい、くか  
 き、とみか、なる  
 歌を作つて、鬼の  
 四方に失せ去り、  
 六に見ゆ。太平記  
 ※役の行者、名は  
 小角、大和國葛上  
 郡茅原村の人。葛  
 城山より金峯山へ  
 石橋を架けし時、  
 諸々の鬼神多く、  
 大なる石を運び、  
 集めたりといふ。  
 ※煎餅、諺に「鬼  
 に煎餅」云々、伊勢物  
 語に見ゆ。

の情深く、大峯・葛城の荷持ちにも雇はれしに、次第に身持ち悪しくなりて、煎餅  
 も珍しからずと、芥川のくらまぎれに鬼一口のあばれ喰ひに昔男を泣かせ、その  
 みならず、鈴鹿山の好色、大江山の醉狂、戸隠山にて惟茂をなぶりし取沙汰より、  
 洗濯も鬼の留守にと、世上物躁になりけるにぞ、神々の怒つよく、鱒・柘の責道具  
 にかり出され、遂に煎豆の追放にあうて、娑婆にもたゝずむ方なくて、冥途の出か  
 はりに赴き、しばし佛のしめしに發起せしも、衣の似合はぬ生れつきなれば、是非  
 なく業の秤目をならひ、釜の火の焚き加減を覚え、呵責の荒仕事に獄卒と呼ばれ、  
 地獄の六尺とはなりける。さてこそ瘤とられたる天下となりて、萬民泰平を諷ひ、  
 丹後・丹波の境なる城跡も松風さびしく、安達ヶ原の黒塚も草茫茫としてとふ人なけ  
 れば、今はたゞ棟瓦に佛を残し、大津繪に笑はれて、下戸と鬼とはなき世とぞなり

※鈴鹿山の好色、  
 勢州鈴鹿山にありて  
 丸といふ鬼ありて  
 美女を愛し、田村  
 利宗之を滅すと傳  
 ふ。  
 ※大江山の醉狂、  
 酒頭童子の醉狂、  
 御伽草子の、諸曲な  
 (諸曲、紅葉狩)  
 ※鱒・柘・煎豆、節  
 どの多く見ゆ。  
 ※戸隠山にて云々  
 信州にありて、鬼  
 美女に化けて紅葉  
 見物の平惟茂に酒  
 をすゝめ、却つて  
 惟茂に滅ぼさる。  
 分の日には門に鱒  
 の頭や棒を刺す、  
 鬼を誘ひてその鼻  
 を刺すの意。又煎  
 豆をまくは鬼の目  
 を打つての意なりと  
 ※業の秤目、地獄  
 にて罪業の輕重を  
 量る秤目。  
 ※六尺、人足。  
 ※瘤とられたる、  
 舞をよくする翁鬼  
 に瘤をとられたる  
 話、宇治拾遺物語  
 に見ゆ。  
 ※安達ヶ原の黒塚、  
 諸曲安達原に、安  
 達原の黒塚に住む  
 鬼行脚の僧に祈り  
 伏せらるゝことを  
 作れり。  
 ※下戸と鬼、諺に  
 「下戸と鬼はなき  
 又「下戸と化物は  
 ない」











にかしましき心かしけむ。今は中々うれしき物忘れかなとぞ言ひける。猶かの翁が家の集に、何の本歌をか取りけるならむ。

※わすれてはうちなげかるゝ夕べかなと

物覚えよき人はよみしか

(鶉衣)

妖物論

也 有

世に化物といふものありて、多くは女となり兒とあらはれ、大坊主の沙汰は聞けど、月代剃りたるはつひに聞かず。夜ばかり出づるはいかなる故ぞと或人の問ひたるに、晝は例の子供のたかりて煩はしさと答へたるぞ、さしあたりての名言なるべき。臆病者を相手にすればその藝殊に出来榮えて、武功の人に出合はすれば思ひの外のあやまちを蒙る。鬼は伯母に化けて腕をとり返し、狐は叔父に化けて畏の意見をいふ。誠に鬼が伯藏主になり、狐が伯母に化けたらむは其の姿をかしからし。是等や正風自然の本姿なるべきをや。まづは狐狸のなすわざに落ちて、猫また・河童はたまゝの沙汰なれども、その正體の穿鑿は樂屋の見えて面白からず。たゞ理

※わすれては―新古今集、式子内親王―忘れてはうちなげかるゝ夕かなる月日を

※鬼は伯母に化けて腕をとり返し、鬼を切取られし鬼が、後日伯母に化けて之をとり返し、狐は叔父に化けて、伯藏主といふ僧に化けて狐をとる

事を戒めし事を狂言「釣狐」に作れり。正風―蕉風。湯立―巫子神前に於いて、熱湯に體の葉を浸し、之を身に注ぎて心身を移るといふ。三才圖會―天地人三才の事を圖説したるもの。支那の書なるが、この漢三才圖會をいへるならん。中村器物等に就きて揚善著。赤表紙―赤本の小兒の慰みとしたる繪本をいふ。關寺―小野小町老いおちぶれてここに住めりといふ(齋曲、關寺小町) 女、老いて白川の水を汲めりといふ(大和物語、齋曲繪垣) 猿澤池―奈良の

屈なき化物といふものこそ殊にゆかしけれ。抑々神は湯立にもうつらせ給ひ、佛は稱名に來迎なるを、此の化物は百物語に感應して何と定まれる姿なれば、三才圖會にも載せられず、訓蒙圖彙の筆にも及ばず、唯赤表紙の小雙紙に恥しき姿はとゞめられける。さるに昔今の美婦國色すら身の終は見苦しく、關寺におちぶれ繪垣にさまよひ、又は猿澤の池の藻屑にまとはれ、馬嵬が原の草葉にさらされて、果は東坡が九相の見立もうるさきに、唯此の物の終ばかり、引幕の陰をも頼まずあとに箒も雑巾もいらす、搔消すやうに失せにけるこそ、いふばかりなくめでたけれ。(鶉衣)

百魚譜

也 有

人は武士柱は檜の木魚は鯛とよみ置きける、世の人の口に於ける、おのがさままなる物好きはあれども、此の魚をもて調味の最上とせむに答あるべからず。絲か

帝の寵を受けし采女猿澤の池に投ぜしことを帝聞き給ひて、いたくあはれがり給ひ池の邊に行幸し給ひし時

人丸のよみし歌。一わぎもこがねくたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき(大和物語) 馬嵬が原―楊貴

妃の害せられし處。東坡が九相―蘇東坡の九相詩をいふ。

人は武士―後撰夷曲集、一休和尚の狂歌。下句は「きぬは紅梅花はみよしの」(尤の草子には「小袖は紅梅」)

とあり。絲かけて―進物の時の飾鯛は絲をかけて尾飾を張る。



※是に乗りける仙人といふ人あれは、  
 仙傳) 龍三白虎通、而  
 蟲三百六十、而  
 龍爲三長也。  
 ※料理せむと學び  
 たる人、莊子一朱  
 浮漫學、居龍於支  
 離、益三年、技成而無  
 家、一所用其巧。  
 ※龍門瀧、黃河の  
 上流にある瀧。鯉  
 之を登れば龍とな  
 るといふ。(三秦  
 記)  
 ※大聖の御子、孔  
 子の子鯉、字は伯  
 魚。  
 ※多能を恥づ、論  
 語、子罕篇、「吾少  
 事、君子多乎哉、不  
 多也。」徒然草、多  
 能は君子の恥づる  
 所なり。  
 ※朝比奈、朝比奈  
 三郎義光、和田義  
 盛の三男、豪勇無  
 双と稱せらる。平家  
 物語卷十一、謡曲

けて臺に居たる男ぶりさへ外に似るべくもなし。然るをもろこしにはいかにしてか  
 殊に賞翫の沙汰も聞えず、是に乗りける仙人もなし。されば夷三郎殿も他の葉武者  
 には目もかけず、たゞ是にこそ釣も垂れ給へ。龍を鱗の司といふは、食味離れたる  
 理屈にして、さは是を料理せむと學びたる人は、昔愚なる名をもとめたる。  
 ※龍門瀧に登らむとする魚ありて、おほけなくも大聖の御子にも此の名を借らせ給  
 へる。されば世の名聲はかの鯛にも並ばむとす。彼は如何なる幸にかあらむ。味ひ  
 美なりと雖も、鯛の料理の品々なるには似るべくもなし。乾物・炙物にせず、鱈・  
 清汁によろしからず、くづし・蒲鉾に用ひがたく、鹽にも鮓にも調せず。唯刺身あ  
 つ物に止るは、多能を恥づといひけむを中々ほまれと思へるにや。昔平家に悪七兵  
 衛景清と名乗りて、今民間には泣く子をも威すべく、朝比奈・辨慶に肩を並べむと  
 す。然るに記録の上にしては、しころ曳の外はさせる働きなくて、只二郎兵衛も五  
 郎兵衛も同じつらなる侍なり。いかに世に名のごとしきぞと或人評したるもの  
 あり。かれたゞ七兵衛が類なるべし。  
 ※松江の名産、我が朝にも品くならず。張氏は是を秋風に思ひて仕途を辭し、平家

景清などに見ゆ。  
 ※二郎兵衛盛繼、中  
 次郎兵衛忠光、總  
 ※五郎兵衛上總  
 ※松江、吳縣の松  
 江に産する鱈は、  
 美味その名を得た  
 り。  
 ※張氏、晋の張翰。  
 吳縣に生る。秋風  
 の起るを見て故郷  
 吳中の菰菜、蓴菜、  
 鱸膾を思ひ、官を  
 辭して歸りし故事。  
 (晋書、張翰傳)  
 ※平家は、清盛安  
 藝守たりし時、熊  
 野參詣の途中、入  
 船中に鱈とび入り  
 たりし故事。(平家  
 物語卷一)  
 ※名には紅葉云々  
 紅葉、冬に産する  
 もといふ。最も住  
 りといふ。日次紀  
 事、自當月、至三  
 月、自當月、至三  
 魚、是謂之、近江  
 鮓、始傳、漁人源  
 郎、始傳、漁人源  
 稱、鮓、始傳、漁  
 節、正、月、の、節

は是を船中に得て官路を進む。進退何れをか羨むべき。  
 鮓は近江に洞庭の名をくらべたる、鯉に似て位階劣れり。名には紅葉をかざした  
 れど、鱈は春の賞翫となれり。  
 ※鮓は節、鮓の頃もてはやされ、梅咲く頃を世に匂ふ。  
 鮓は初秋に祝はれて、空也の蓮の葉に登るは、後生善處の契もたのもし。  
 鮓は芥子酢の風味、上戸は千金に換へむとも思ふらむを、鎌倉の海の素性を兼好  
 にいひさがされたるいと口惜し。鮓節となりては木の端のやうにも思はれず、その  
 梢とも見えずして、花の名をさへ世にちらしぬる。  
 鮓は唐めきて子細らしきに、つるし切とはいふせくして桀紂が料理めきたり。  
 彼は本汁にえらまれ、鱈は必ず二の汁の大將にて搦手をどうけたまはりぬ。

習俗で、新年を無  
 振舞に迎へた祝ひの  
 ※鮓、盆の刺鮓。  
 背から切り開いて  
 鹽漬にした鮓を、  
 串で二枚重ねて刺  
 し貫いたもの。盆  
 の祝物とする。  
 ※空也の蓮の葉、  
 拾遺集、空也、一  
 度も南無阿彌陀佛  
 といふ人の蓮の上  
 に上らぬはなし。  
 ※鎌倉の海の素性  
 徒然草、鎌倉の  
 年寄の申し侍りし  
 は、この魚已等若  
 はかりし世まで、  
 前にはかかしき人  
 らざりき。  
 ※木の端、枕草子  
 「思はむ子を法師  
 になしたらむこそ  
 はいと心苦しけれ  
 れ。さるはいと頼  
 むしきわざを、た  
 らしき端などのや  
 うに思ひたらむこ  
 そいとほしけれ。」  
 徒然草、人には木  
 の端のやうに思は  
 るよ。  
 ※その梢とも、深  
 花集、頼政、深山  
 木のその梢とも見  
 えざりし櫻は花に  
 あらはれにけり。  
 ※花の名、花鱈。







※崑山のもとに  
劉子新論「崑山之  
下、以玉抵鳥之  
頭、節分は守りて  
けの爲に夜疫除の  
頭を門にさす。鰯の

分別とも言へり。  
鰯といふものの味殊にすぐれたれども、崑山のもとに玉を磔にするとか、多きが故に卑しまる。たとへば田畠のこやしとなるとも、頭は門を守りて天下の鬼を防ぐ、其の功鰯・鯨も及ぶべからず。

されば歌人は鳥蟲に四季を別ちて、魚に四時の題詠はなし。俳人かねて魚を品題とするは、専ら味ひの賞翫を捨てざる故なり。然れば歌よみは耳目の愛にとゞまりて、食は野卑なりとて取らざるに似たれど、かの喰ふべき若菜を専らにのみて、菜の花の美しきを歌の沙汰に及ばぬは、喰はれぬ故によまざるにや、無下に口惜しと人の言ひたる、さがなき詞ながらをかしかりけり。  
(鶉衣)

百 蟲 譜

也 有

※籠に苦しむ身  
宗因「もし啼かば  
蝶々籠の苦をうけ  
む」  
※莊周が夢「莊子、  
齊物論「昔者莊周  
夢爲胡蝶、栩栩然  
胡蝶也。云々」

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそ猶めてたけれ。さてこそ莊周が夢もこのものには託しけめ。只とんぼうのみこそ彼にはや、並ぶらめど、絲に繋がれ繭にさゝれて童の弄

※阿呆の鼻毛―鼻  
蔵參照。  
※美人の眉―蛾眉  
をいふ。詩經、衛風  
「爾如蠶眉、鬢首  
蛾眉」を始として、  
美人の眉に譬へた  
る例多し。  
※他の蟲をとりて  
我が子に非ざる別  
の虫の子をとりて  
呪して我が子とす  
る也。

びとなるだに苦しきを、阿呆の鼻毛に繋がるゝとは、いと口惜しき諺かな。美人の眉にたとへたる蛾といふ蟲もあるものを。  
子を持てるものは、その恩愛にひかれてこそ苦勞はすれ。蜂の他の蟲をとりて我が子となす、老の行方をかゝらむにもあらず、何を譲らむとてかくは骨折るや。我に似よゝとは、いかに己が身を思ひあがれるにかあらむ。花に狂ずるとは詩人の稱にして、歌にはさしも詠まず。蜜をこぼして世のためとするはよし。只人目稀なる薬師堂に大きな巢作りて、掃除坊主をおびやかさんとす。それも針なくば人には憎まれじを。

※古今の序―古今  
集、序「花に啼く鶯  
水にすむ蛙の聲を  
きけば、生きとし  
生けるもの何れ  
か歌をよまざりけ  
る」  
※古池にとんで―  
支考、俳諧十論「古  
池や蛙飛込む水の  
音といへる幽玄の  
一句に自己の眼を  
開きて、是より俳  
諧の一道は弘まり  
ける」とぞ。  
※初蝶―元祿頃の  
俳句に初蝶の句散  
見す。これは有散  
の誤なり。

蛙は、古今の序にかゝれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。臘月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、此のものにと更にも誇りがたし。  
蟬は、たゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。や、日盛りに啼きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず、此のものばかり初蟬といはるゝこそ大きな手がらなれ。やがて死ぬ氣色は見えずと、此のものの上



※やがて死ぬ―芭蕉―やがて死ぬ―芭蕉―は見えぬ―の聲―(猿蓑)  
※貧の學者―晋の車胤の故事。(晋書・蒙求)

※蜀魂―時鳥の異名。蜀の望帝の魂化して時鳥となれりといふ。(蜀王本紀)  
※待つ暮の歌―古今集、衣通姫―わがせこが来べき宵なりのふるまひかねてしるも―(書紀)くものおこなひ―  
※退隱の媒―楚の龔舍、蜘蛛の網に衆虫のかゝるを見たり、仕官亦人の羅網なりとて退隱せり。(圓機活法)  
※頼光のはじめ、頼光をさへ云々―蜘蛛。土蜘蛛。雲助。

は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は、たぐふべき物もなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ草にすだく、五月の闇はたゞ此のものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに、貧の學者に取られて油火の代りにせられたるは、此のものの本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、ことの外の不自由なり。俳諧にはその真似すべからず。

蛸は、多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく比ならむ。つくづくぼうしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して此のものになりたりと、世の諺にいへりけり。哀は蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。蜘蛛は、たくみに網をむすんで、ひそまつて物を害せむとす。待つ暮の歌によまれ、又は退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていと憎し。古代朝敵の始として、頼光をさへおびやかしたる、いと恐ろし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に蟬の羽などかけ捨てたるは、いさゝかあはれそふ折もあらむか。彼はかひなくしなく巢つくりてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、蜘蛛とはいかで言ふやらむ。

※油蟲!人にうるさく附纏ひ只にて飲食遊興などする者をいふ。  
※蜂蟬―淮南子、説林訓―蜂蟬朝生而暮死。―  
※不物好―人の好まざるものを好むをいふ。

※槐安の都―大槐安國南河郡は古槐樹の南枝に通ずる蟻穴なり。淳于棼夢にその郡守となれり。(大槐宮記)  
※千丈の堤―韓非子―千丈之堤、以三蟻蟻之穴潰。―  
※蠅は歐陽氏に憎まれ―宋の歐陽修、憎著蠅一賦あり。  
※紙魚は長嘯子にあはれまる―木下勝俊の著舉白集に「紙魚辭」あり。

芋蟲は腹だつものにたとへ、毛蟲はむつかしき親仁の號とす。背むし・吝むしは

名のみして蟲ならず、油蟲といふは、蟲にありて憎まれず、人にありて嫌はる。

蠶の生涯は世のために終り、火とり蟲はたが爲に身を焦すや。蜂蟬ははかなきた

めしに引かれ、蓼食ふ蟲は不物好きの謗となれり。さは俳諧するものを、俳諧せぬ

人のかくいふ折もあるべし。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲はやさしく、黄金蟲はいやし。

蟻は明暮に忙がしく、世の營みに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求め

てやまず、いつか槐安の都をのがれてその身の安きことを得む。さるもたよりあし

き方に穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。

狗の齒に噛まるゝ蚤はたま／＼にして、猿の手に探らるゝ虱は逃るゝこと難かる

べし。

虱を千手觀音と呼ぶに、蜘蛛は梶原といへり。さるは梶原が異名なりや、げぢげ

ぢが異名なりや、先後今は知り難し。



蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家は持ちたれども、ゆく先々を負ひ歩くは水雲の安きにも似ず。

蛇・蚯蚓の足なくとも歩くべくは、蜈蚣・をさむしの數多きは不用のことなり。

螻螂の瘦せたるも、斧を持ちたる誇りよりその心いかつなり。人の上にも此のたぐひはあるべし。

蟹の歩みにたとふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕に乗りて、富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるを以て名に呼べる、松蟲はその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし人に疎まる。一在所に二人の八兵衛ありて、ひとり後生をねがひ、ひとりは殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きりくすのつゞりさせとは、人のために夜寒をしへ、藻にすむ蟲は我からと只身の上をなげくらむを、蓑蟲の父よと呼ぶは、守宮の妻を思ふには似ず。されど父のみ戀ひてなどは母を慕はざるらむ。

※をさむし・蝸蟲。やすともいふ。  
※螻螂・文選、微三豫州一欲以三螻螂之斧一禦車之陸也。

※原・吉原・駿河の宿名。其の間凡そ三里。

※つゞりさせ・古今集、在原棟梁、秋風にはころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりすなく。

※藻にすむ蟲・古今集、藤原直子、蟹の刈る藻にすむ蟲の我からと音をこそ泣かめ世をばうらみじ。  
※蓑蟲のちよとよ呼ぶ・枕草子に見ゆ。蓑蟲説參照。  
※守宮の妻を思ふ・ふし。みもりの思ふ。愛し。妬心深しといふ。

※七賢・竹林の七賢。晋の嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎をいふ。

※花に愛着せし佐國・大江佐國花を愛し、死して蝶となりてわが子の庭園に遊びし事發心集に見ゆ。

※奈良茶の匂ひ・俳席には奈良茶を用ふる事多ければかくいふ。

※曉臺・寛政四年藤氏、又久村氏、加名周舉、通稱平兵衛と暮す。名古屋の等と號す。支流湧くが如く、終りに出て、新に天一家の風を成し、與て力あり。熱田三書、秋の日、念佛、幽關集等。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃端居めづらしき夕べ、はじめて仄かにききたらむ、又は長月の頃力なく残りたるは、寂しきかたもあり。蚊屋釣りたる家のさま、蚊やり焚く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。  
むかし銀に執心のこせし住持は、蛇となりて錢箱をまとひ、花に愛着せし佐國は、蝶となりて園に遊ぶ。そも俳諧に心とめし後の身、いかなる蟲にかなるらむ。花に狂ひ月にうかれて、更け行く行燈の影を慕ひ、奈良茶の匂ひに音を啼くらむこそ哀なるべけれ。  
(鶉衣)

去來抄敘

曉臺

芭蕉の翁、一度この道に斧ふりして、屈まれるを打ち、曲れるをおし、俳諧の眞心を傳へてより、風の草をおしならして、一派八隅にかゝり、支流湧くが如く、終りに川木拾ふ童も菜摘女も、耳にふれ口に出づるの時、風調はじめて泥土にくだり、意を横ざまに穿ちて風體を折き、惑説十襲して今時平地に波瀾を起す。其の弊を撓



※吞舟の魚一華夷志、海中大魚、口可容舟、名三聯錫。

※燕村一天明三年、津國東郡毛馬村、與謝と改む。名寅、字は春星。落日菴、紫菴等の別號あり。初め江戸内田、沽山に俳諧を學び、後早野巴人門に入りて二世夜半亭と號す。畫を能くし、大雅堂と並稱せらる。著書、新花摘、玉藻集、桃李、夜四歌仙、夜半樂、花鳥篇等。※四明山一比較山の最高峰。※翠微一山の中腹をいふ。爾雅一山未及上、二曰翠微。

※雪炊一洗濯と炊事。清瀧の波一芭蕉。清瀧の浪に塵なき夏月の雲一芭蕉。六月や峰に雲おく嵐山。丈山の夏衣一芭蕉。丈山の像、風かをる羽織は襟もつくるはす。長嘯の古墳一芭蕉。長嘯の墓もめぐるか鉢叩。薦を着て一芭蕉。都近き所に年をとりにて、薦を着て誰人います花の春。芭蕉のふや鶴を、芭蕉一京のぼり、三井秋風が鳴瀧、の山家をとふ、梅、白し昨日や鶴を、まれし孤山の風流、和靖が孤山の隠棲、事二鶴を飼ひし故、芭蕉一説、棲逸篇に、芭蕉一日比叡に、の字を引いて一か、杜甫が背を決き

めむには、いそしき哉去來、うべなる哉此の抄、淺く漁りて吞舟の魚をもらす事勿れとなり。(去來抄)

洛東芭蕉菴再興記

燕村

※四明山下の西南一乘寺村に禪房あり、金福寺といふ。土人口稱して芭蕉菴と呼ぶ。階前より翠微に入ること二十步、一塊の丘あり。すなはち芭蕉菴の遺跡なりとぞ。もとより閑寂玄隱の地にして、綠苔や、百年の人跡を埋むといへども、幽篁なほ一爐の茶煙をふくむが如し。水行き雲とどまり、樹老い鳥睡りてしきりに懷古の情に堪へず。やうやく長安名利の境を離るゝといへども、ひたぶるに俗塵を厭ふとしもあらず。鶏犬の聲籬を隔て、樵牧の路門をめぐれり。豆腐賣る小家も近く、酒を沽ふ肆も遠きにあらず。されば詩人吟客の相往來して、半日の閑を食るたよりもよく、飢をふせぐもうけも自在なるべし。抑ゝいつの頃よりさは唱へ來りけるにや、草刈る童麥打つ女にも、芭蕉菴を問へば必ずかしこを指す。むべ古き名なりけらし。さるを人其の故をしらず。竊に聞く、いにしへ鐵舟といへる大徳この寺に住みたまひ

けるが、別に一室を此のところに構へ、手自ら雪炊の貧をたのしみ、客を謝して深くかきこもりおはしけるが、蕉翁の句を聞いては泪うちこぼしつゝ、あなたふと忘機逃禪の郷を得たりとて、常に口ずさみ給ひけるとぞ。其の比や蕉翁山城の東西に吟行して、清瀧の浪に眼裏の塵を洗ひ、嵐山の雲に代謝の時を感じ、或は丈山の夏衣に薰風萬里の快哉を賦し、長嘯の古墳に寒夜獨行の鉢叩を憐み、あるは薦を着て誰人いますとうちうめかれしより、昨日や鶴を盗まれしと孤山の風流を奪ひ、大日枝の麓に杖を曳いては麻のたもとに曉天の霞をはらひ、白河の山越して湖水一望のうち杜甫が背を決き、つひに唐崎の松の朧々たるに一世の妙境を極め給ひけん。されば都徑徊のたよりよければとて、折々此の岩頭に憩ひ給ひけるにや。さるを枯野の夢のあとなくなり給ひしのち、かの大徳ふかく嘆きて、すなはち草堂を芭蕉庵と號け、なほ翁の風韻をしたひ、遺忘にそなへたまひけるなるべし。雨を喜ばひて亭に名いふなど、こと國にもさるためし多かるぞ。しかはあれど、此のところに

杜甫の登三岳陽、辛崎の松一芭蕉、枯野の夢一芭蕉、雨を喜ばひて、蘇東坡に喜雨亭記あり。



※うき我をさびし  
がらせよ閑古鳥  
この句は日記に  
出づ。但しも伊  
勢長島の大智院  
にての作なりとい  
ふ。

※無功德の宗風をい  
ふ。禪家の宗風をい  
ふ。

※追ふべくもあら  
ず陶淵明、歸去  
來辭「悟已往之  
不<sub>レ</sub>諫、知<sub>レ</sub>來者之  
不可<sub>レ</sub>追。」

※自在菴道立<sub>一</sub>文  
化九年、年七十  
五。樋口氏、通稱  
源左衛門。伊藤垣  
菴の曾孫、江村北  
海の第二子なり。  
家代々儒を以て  
立ち、燕村に俳を學  
ぶ。寫經社集<sub>一</sub>安永  
五年樋口道立の發  
企にて金福寺内に

芭蕉庵を再舉し、  
寫經社を結びたる  
時の記念集。

※天明三年秋の  
末、燕村は宇治の  
奥田原の門人奥田  
毛條に招かれて  
この地に遊びしな  
り。

※宇治大納言隆國  
作者と傳ふ。  
拾遺物語卷<sub>一</sub>に、宇治  
丹波國篠村といふ  
ところにて平茸多く  
生ひたる話を記せ  
り。  
※拾遺<sub>一</sub>拾ひ残し  
し意と、宇治拾遺  
物語に書きもらし  
し意とをかけた  
り。

※米かし<sub>一</sub>田原村  
高尾の北にある米  
新瀬。銀瓶云々<sub>一</sub>白樂  
天の琵琶行中の  
句。

て蕉翁の口號なりと世に聞ゆるもあらず。まして書い給へるものの筆のかたみだに  
なければ、いちじるく争ひはつべくも覺えね。住侶松宗師の曰く、さりや、うき我  
をさびしがらせよとわび申されたる閑古鳥のおぼつかなきは、此の山寺に入りおは  
してのすさみなるよし、此の頃まで世にありし耆老のふみの道にも心かしこきが物  
がたりし侍りし。されば露霜のきえやらぬ墨の色めでたく、年月流れ去る水莖の跡  
などか遣らざるべき。さるを無功德の宗風こゝろ猛く、不立字の見解まなこきらめ  
き、佛經聖典も捨てて長物とす。いかでさばかりのもの貯へ藏むべきななど、いと  
騒々しき狂漢のために、いたづらに塵壺の底にくち、等閑に紙魚のやどりと滅びに  
けむ、びんなきわざなりなど悲しみ聞ゆ。よしやさは追ふべくもあらず。唯かゝる  
勝地にかゝる尊き名の残りたるを、あいなく打捨て置かむこと罪さへ恐ろしく侍れ  
ば、やがて同志の人々をかたらひ、かたの如くの一草屋を再興して、ほととぎす待  
つ卯月のはじめ、をじか啼く長月の末、必ず此の寺に會して翁の高風を仰ぐことと  
はなりぬ。再興發起の魁首は自在菴道立子なり。道立子の太祖父坦菴先生は、蕉翁  
のもろこしのふみ學び給へりける師にておはしけるとぞ。されば道立子の今此の舉

にあづかり給ふも、大方ならぬ宿世のちぎりなりかし。

(寫經社集)

宇 治 行

燕 村

宇治山の南、田原の里の山ふかく、茸狩し侍りけるに、若きどちは獲物を貪り先  
を争ひ、余ははるかに後れて、心静にくま／＼さがしもとめけるに、昔の小笠ばか  
りなる松茸五本を得たり。あなめざまし、いかに宇治大納言隆國の卿は、ひら茸の  
あやしき沙汰は書いとめ給ひて、など松茸のめでたきことはもらし給ひけるにや。

君見よや拾遺の茸の露五本

最高頂上に人家見えて高、尾村といふ。汲鮎を業として世わたる便りとなすよし。  
茅屋雲に架し、斷橋水に臨む。かゝる絶地にも住む人ありやと、そゝろに客魂を冷  
やす。

鮎落ちていよ／＼高き尾上かな

米かしといへるは宇治川第一の急灘にして、水石相戦、奔波激浪雪の飛ぶがごとく、  
雲のめぐるに似たり。聲山谷に響いて人語を亂る。銀瓶乍破水漿迸、鐵騎突出刀鎗



鳴、四絃一聲如裂帛シクガクと、白居易が琵琶の妙音を比喻せる絶唱をおもひ出でて、帛を裂く琵琶の流や秋の聲

(蕉村文集)

春風馬堤曲

蕉村

※故園攝津東成郡毛村。澁水は淀河、馬堤は毛馬の堤にて、長柄川の堤をいふなり。

余一日問者老於故園、渡澁水過馬堤、偶逢下女歸省郷者、先後行數里、相顧語、容姿嫵媚、癡情可憐、因製歌曲十八首、代女述意、題曰春風馬堤曲、

○やぶ入や浪花を出でて長柄川

○春風や堤長うして家遠し

○堤下摘芳草ヨリナ 荆與蕪塞路

○荆蕪何無情※ 裂裙且傷股

○溪流石點々 踏石撮香芹

○多謝水上石 教儂不沾裙シテワレナ

○一軒の茶見世の柳老いにけり

※無情―夜半樂には「妬情」とあり、今蕉村文集に従ふ。

※江南語―浪花の言葉。  
※榻―店の床几。

○茶店の老婆子儂ボウを見て慇懃に

無恙を賀し且儂が春衣を美む

○店中有二客 能解江南語※

酒錢擲三緡 迎我讓榻去※

○古驛三兩家猫兒妻を呼び妻來らず

○呼雛雛外鷄 雛外草滿地

○雛飛欲越雛 雛高墮三四

○春草路三叉中に捷徑あり我を迎ふ

○たんぼ、花咲けり三々五々五々は黄に

三々は白し記得す去年此の路よりす

○憐みとる蒲公莖短うして乳を泡せりウキ

○むかし、頻りに思ふ慈母の恩

慈母の懷袍別に春あり

○春あり成長して浪花にあり



※行き行きて一々選、古詩、行々重行、漢、與、君、生、別、離、和、漢、朗、詠、集、行、旅、一、行、々、重、行、々、明、月、峽、之、曉、色、不、盡、  
※くれたり一々夜半樂には「くたれり」とあり、今、燕、村、文、集、に、從、ふ。

※安永八年神澤杜口が古稀の賀のをに賛して贈れるも、  
※張九齡は云々、張九齡、照、鏡、見、白、髮、一、宿、昔、青、雲、志、陸、陸、白、髮、年、誰、知、明、鏡、裏、形、影、自、相、憐、  
※丈山は云々一丈

山「わたらじな婢の老の浪そふ影ははづかし」とて、御水尾院の召を辭せる故事。  
※龍山公の云々、近衛龍山公、宗鑑を訪ひ、宗鑑が姿を見よやがきつばたと仰せられしに、宗鑑即座に「のまん」とすれば、夏、澤水と附く。(其角雜談集)  
※資朝の卿に云々、寺の静然上人の年、たけたる様を見、尊む、氣色ありしかば、資朝卿後日むく犬のあさましく、老いたるを引かせ、て「このけしき尊く見え候」とて、内大臣へ参らせたる話あり。  
※生前一杯の云々、白氏文集、勸酒、斗、不、如、生、前、一、樽、翁、杜、口、の、其、端、庵

梅は白し浪花橋邊財主の家  
春情學び得たり浪花風流  
○郷を辭し弟に負いて身三春  
本をわすれ末を取る接木の梅  
○故郷春深し行き行きて又行き行く  
楊柳長堤道漸くくれたり  
○嬌首はじめて見る故園の家  
黄昏戸に倚る白髮の人  
弟を抱き我を待つ春又春  
○君不見古人太祇が句  
藪入の寝るやひとりの親の側

(夜半樂)

葛の翁圖贊

燕村

張九齡は明鏡の裏に白髮を憐み、丈山は清き流に老の面影を恥づ。爰に一人の隠

士あり。いづれの所の人といふ事を知らず。常に葛てふものを嗜めば、人呼んで葛の翁といふ。もとより青雲權貴の地をいとひて、龍山公の御前に侍らざれば、自らがきつばたの秀句を遁れ、資朝の卿に逢ひ奉らざれば、むく犬のそしりもなし。只生前一杯の葛水、身後の榮聲にかへなまし。されば清濁明晦のさかひは是不是いづれぞや。しかじ清からむよりは寧ろ濁らむには、明かならむよりは將晦からむには。

葛水や鏡に息のかかる時  
葛水に見る影もなき翁かな

此の意を了解したるものは誰、

その日ぐらしの翁あり。この事をのぶるものは誰、夜半亭燕村なり。(杜口追善集)

おらが春

一茶

の號によつて斯く  
號一茶一政十年  
歿、年六十五。信

州柏原の人、小林氏、通稱彌太郎。別號あり。安永頃、江戸に出て二六庵

竹阿に師事し、その歿後一時庵を歸り、晩年は郷里に

の冷遇による家庭の不幸はその性格、句作の上、反映して一種獨特なる風を形造れり、

著書、旅拾遺・おらが春・七番日記等。



○  
昔丹後の國普甲寺といふ所に深く淨土を願ふ上人ありけり。年の始は世間祝ひごととしてさゞめけば、我もせむとて、大晦日の夜、一人使ふ小法師に手紙したゞめ渡して、翌の曉にしかゞせよと、きと言ひ教へて本堂へ泊りにやりぬ。小法師は元日の旦、未だ隅々は小闇きに初鳥の聲と同じくがばと起きて、教への如く表門を丁々と敲けば、内よりいづこよりと問ふ時、西方彌陀佛より年始の使僧に候と答ふるより早く、上人裸足にて躍り出で、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上座に、請じて、昨日の手紙をとりてうやうやしく頂きて讀みて曰く、其の世界は衆苦充滿に候間早く我が國に来るべし。聖衆出迎ひして待ち入り候と讀み終りて、おゞくと泣かれけるとかや。此の上人自ら工み拵へたる悲しみに自ら歎きつゝ、初春の淨衣を絞りてしたゝる泪を見て祝ふとは、物に狂ふ様ながら、俗人に對して無常を演ぶるを禮とすると聞くからに、佛門に於いては祝ひの骨張なるべけれ。それとはいささか變りて、己らは俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴龜にたぐへての祝盡しも、厄拂ひの口上めきてそらくしく思ふからに、から風の吹けば飛ぶ屑家は屑家のあ

※屑家—小さき茅屋。

るべきやうに、門松立てず煤掃かず、雪の山路の曲りなりに今年の春もあなた任せになむ迎へける。

目出度さも中位也おらが春

一茶

去年の五月生れたる娘に、一人前の雜煮膳を据ゑて

這へ笑へ二つになるぞけさからは

文政二年正月一日

○  
爰らの子供の戯に、蛙を生きながら土に埋めて諷うていはく、「ひきどの、お死なつた、おんばくもつてとぶらひに、くく」と口々にはやして、菜菔の葉を彼らうづめたる上にうちかぶせて歸りぬ。しかるに本草綱目、車前草の異名を蝦蟇衣といふ。此の國の俗、がいろつ葉とよぶ。自らに和漢心を同じくすと言ふべし。昔はかばかりのざれごとさへいはれあるにや。

○  
卯の花もほろりくや墓の塚

※おんばく—おのこ  
ほ名抄—車前草  
和名菜菔、蘇  
一名葉を蘇生  
古一葉を蘇生  
に蛙へともいふ  
て蛙の記もおほ  
蜻蛉の神もひかり  
この神の契りか  
なかりおむかへ  
ることをは











\* 忘れず山一弊城  
 \* 乙二文政六年  
 \* 州白石城主片倉  
 氏の祈願松窓と號  
 の法印に就いて學  
 べ師なく、専ら學  
 獨成美集兆等道  
 彦親交あり著書と  
 燕村發句解耳さ  
 草六祖の杵云々  
 慧能禪師の第六祖  
 に能く五祖弘忍師  
 慧能の五祖弘忍師  
 か能く五祖弘忍師  
 米白きや否や、答  
 未だ杖を以てずと  
 五祖杖を以てずと  
 三打杖を以てずと  
 入能く五祖杖を以  
 \* 鉢を授く五祖杖を  
 \* 我の引水。云

着るに領有り、劍をぬくに柄あるためし、何の事にかは云はざるべき。さてこのた  
 めしを得度せざらむ人の作句を、とりどなき句とも、魂なき句とも、又鼻なしとも  
 申し侍るを、<sup>\*</sup>わすれず山に忘れず、五十年の修行し侍りて、乙二とよばるゝ乙二が  
 金剛力を出して押しつけたる爪じるしは、皆その句々の鼻とも、とりどとも見べき  
 大事の大事のけぢめに侍れば、自今以後自己の鑑となし、千變萬化にわたる句作の  
 間にも、鼻といふ物を失念して生れ來たらむ人の面は、いかばかりとりどなからむ  
 と、菅沼の菅の根白く曲らぬ心もて詳しく思ひ給はゞ、天邪鬼が射る矢の種も盡き  
 て、<sup>\*</sup>六祖の杵の鼻つや〜と悟り出で給ふべきぞかし。返す〜も心得違ふまじ。  
 まして<sup>\*</sup>おのが鋤ける一枚田にまかせ過ぎたる堰水なりなど、あさましく見下し給ふ  
 こと勿れ、あなかしこ。  
 (はたけせり)

後篇 俳論集



獨吟千句跋

守武

※守武—天文十八年歿、年七十七。蘭田氏、伊勢荒木田七家の一、伊勢内宮神官、和歌連をよめり。又俳諧を好み、その獨吟千句は俳諧式目制定の基をなし、俳諧の獨立に一契機を成せり。著書、俳諧之連歌獨吟千句。豫定。※あらましごと—

※周桂—肥前有馬の人、連歌師宗碩の弟子。

※はうほつ—はうふつ(髮髯)。はつきりしないさま、ぼんやり見えるさまにいふ。※好士—文雅の士を云ふ。

右の俳諧は、そのかみ獨吟千句立願ありけれど、うち紛れ又は成り難く過しけるも、そらおそろしく、いかゞはせんのみあまりに、鬪をとるべきに一ならばもとより、二ならば俳諧のあらましごとにて、あはれ二おりよと念じければ二おりぬ。有難さ限りなく、大かた千句は三日なれば、これ僅かに二日にも足らざらむに、思の外に永びき、夜は寢覺めがちに催し、庚申には二百韻にて五日に綴りぬ。其の折節にやありけむ、周桂かたへ此の道の式目未だ見ず、都には如何と大かたの旨尋ねしかば、かゝる式目は予こそ定むべけれ、定めよ、それを用ふべきのざれたる返事下りあはせ、さらば此の度ばかり心に任せむ、所にいひ習はせる俗言、私びれたる心言葉、一向はうほつ、うつゝなき事のみなれど、あまたのうちなれば薄く濃く打ちませけり。さて俳諧とて濫にし、笑はせんとばかりは如何。花實を備へ風流にして、しかも一句正しく、さてをかしくあらむやうに世々の好士の教なり。この千句はそれをもとぢめず、とく満たしたき初一念ばかりに、春秋二句結びたる所もありぬべし。

※ふんこつ—原本「ふつこつ」。今眞蹟によりて改む。粉骨か。

※兼裁—猪苗代兼我(兼載とも)、會津の人、堯惠に從つて古今傳授を受け、北野會所別當に等しくす。永正七年六月下總古河にて歿す。庭鳥が、聲入り、山寺の入相のかね波集に見ゆ。犬筑波集—尾州茨江の人、月村齋と號す。宗祇門の連歌師。宗牧—越前一乗谷の人、狐竹齋と號す。宗碩の弟子、天文十三年歿。天祇公三嶋にて千句二折云々。伊豆三年正月、宗祇を三鳥千句といふ。

されども正風誰人の耳にも入るまじきに、いさゝかも聞えむ、圖らざる幸ならん哉。其の上ふんこつ妙句なきにしもあらず、又指合も時によるべきにや、しひて直さんも執心いかゞなり。然るに俳諧何にてもなきあとなし事と、好まざる方の言種なれど、何か又世の中其れならむ哉。本連歌に露かはるべからず、大事ならむか。兼裁好みにて、心も暢び他念なきとて、長座には必ず催し、庭鳥がうつぼになると夢を見せ、聲入りに一橋を渡り、宗碩は文かよはしの自讃に入相の鐘を腰にさし、宗鑑より度々發句など下し侍り、近くは宗牧一二座忘れ難く、それ等をたよりにて思ひよる事しかなり。追加五十韻多けれど、祇公三嶋にて千句二折を思ひ出づるものならし。さて古來稀なる獨吟千句成就、松の葉の正木の葛めでたくや侍らむ。

(守武獨吟千句)

御傘序

貞徳

※守武獨吟千句—慶安五年刊。守武自筆の眞蹟本も存す。

※貞徳—承應二年歿、年八十三。京都の人、松永氏。幼名勝熊、長頭丸。

道遊軒、明心居士等の別稱あり。少時より連歌の會に連り、或は和歌和

文を學びしが、連歌道の頃はしさを避けて俳諧に走る。その俳諧は主

として言葉の智的技巧にあり。著書、淀川。油糟、御傘。







誹諧初學抄

徳元

徳元慶安四年美濃の斎藤氏に仕へし。後關原の戦に敗れ、住入して江戸に居り。俳諧抄は貞門初注の書として、注意すべきものなり。地蔵の頭に蓼摺小木の相に似たるものを云ふ。連句に於て同一の面に詠み込むこととを嫌ふ。打越連俳にて一句隔てたる句を相和といふ。和句と漢句とを交へたる連句の一體。

誹諧式目の事承る。某は未だ所持し侍らず。されば此の式目世間に有りとは云ひて、見たりと云ふ人もなく、又其の作者誰ともさして記し置きたる儀もなし。是はたゞなべての人時の邪興（じやくけう）に、或は地蔵（じぞう）の頭に蓼摺小木（りょうしゆこぶ）、打越（うちこ）を嫌ふべし。式は花みしらみ春也、東しらみ時分也などと、利口に云ひ傳へて、畢竟式目無之物と見えたり。古來より用ひ來れるは和漢の法度に等し。凡そ誹諧句躰は連歌に俗語を加へて、前句の詞をあらぬ品にとりなして付け侍るさまなり。然れば誹諧には連歌の徳の外に、五つまさりたる樂しみ侍るとかや。第一俗語を用ふる事、第二は自讀し侍りてもをかしき事、第三取敢へず興を催す事、第四初心の輩學び易くして、和歌の浦浪に心を寄せ侍る事、第五には集歌、故事來歴分明ならずとも一句にさへ興をなし侍らば、何事をも廣く引きよせて附け侍るべき事、これ五の徳也。

一、俗語不苦とは申しながら、あまり道外過ぎたる詞は如何。例へば、此方へ御座れ、いやで候、是非ともおぢやれ、御座らせられぬ、御月さま、御日待、虫吠え

て、鷹をくゝり付く、かやうの不束かなる詞は不可書。さすがに誹諧も和歌の一躰なれば、道にはづれたる儀は仕うまつるべからず。

一、物にたとへば連歌は能、誹諧は狂言たるべし。いかに狂言たりとも、當世はやるかぶきの座の狂言などは、本の道にあらず。此のさかひをよく工夫あるべき事肝要也。

一、俳諧も一句の仕立やう肝要なり、上の五文字を下へなし、下の五文字を上へあげ、色々に句をねり侍らば、おのづから句がらもよく、後悔もあるべからず。たとへば畠山兵衛佐といふ名を、同文字にて山畠助兵衛と號し侍らば、無下におとり侍る也。又一がいに句作を尋常にとばかりたしなみ侍らば、うつくし過ぎて俳諧めかず候。百韻の中へ、だうけたる句の五句も十句もまじりたるは面白き物なり。

一には心の誹諧、二つには詞の誹諧なり。心の誹諧をば一段ほめられたり。詞の誹諧をば、次にせられたると見えたり。心の誹諧と云ふは、詞なだらかにして心に興を含めり。言葉の誹諧と申すは、秀句（しゆきう）にかゝり利口を詮に言ひ立つる也。さればにや、秀句利口を以て仕立てたる發句などは、袖の下にて上下の文字の數を數ふる

※秀句、利口、共稽をさせたり。



程の初心の輩も、一句二句は仕うまつるもの也。其の人を會合して出座に及び、所望する時、附句に至りては一句も成り難くて赤面至極せり。心に作をこめ、詞すなほに仕立て侍る句は、稽古修行なくては及び難し。此の口傳を以て見るに、古の譽ある人々の誹諧は、皆心を以て附け侍り、發句も亦しか也。

一、連歌立の誹諧、誹諧立の誹諧と云ふ事有り。連歌立の誹諧は一句の仕立尋常にして指合正しく、てにはもよし。誹諧立の誹諧は指合以下覺束なくして、句作り不束か也。此の道を嗜まんと思はゞ誹諧を足代になして、連歌に基づき給ふべし。小學より大學に至る心なるべし。  
(誹諧初學抄)

寓言説

惟中

一、問ふ、守武・宗鑑の後にも俳諧の好士多し。今なほ京・江戸の點者多くは貞徳の門より出づれども、寓言を本とすとも見えず、風儀また宗因に異なり。寓言とは如何なるを申すにや。

答へて云ふ、貞徳はさすがの才徳なれば、こゝに心なきにあらず。只故習にひか

※惟中一正徳元年  
氏。元因幡の人、西  
後岡山に住し、延  
寶五年の頃大阪に  
出でて醫を業と  
し、宗因に師事す。  
談林の新風を鼓吹  
するに功あり、論  
客を以て知らる。  
晩年は古典の研  
究、書道を専らと  
せり。著書、濠園  
返答、破邪顯正返

答、破邪顯正評判  
返答、三部抄、俳諧  
或問、近來俳諧風  
體抄等。

※逍遙遊・齊物論  
一 莊子の篇名。

され、又は時勢にほだされて新奇を出す事なかりしにぞ、其の書き置ける物を見て知るべし。寓言とは、我が心に思ふ事を、物に比し事に託して云ひ出すの義なり。抑も莊子が心は、道は大極の前まきにあれば、天・地・人・物・有情・非情一つとして爰に洩るゝ事なし。物我素同根なれば、彼を善とし是を惡とすべからず。此の道は音もなく香もなく、さしていふべき形もなし。萬物を消息すれども己が功とせず、古今に亘れども己が徳とせず。我も亦此の徳に等しく萬物と共に往來して無窮の樂しみを樂しむべし。思へり、其の意味は逍遙遊・齊物論を讀みて考ふべし。かく逍遙自在の道を體ていして、萬物を等しく見る眼なる故に、かりにも外物に與からず、心に浮ぶ千差萬別、一毫の私意按排なく言ひ出せば、是を非とし非を是とし、眞偽を亂る言葉の自然と無爲の道に歸する、是を莊子が寓言といふなり。本朝にては源氏一部の大意よく此の心に叶へり。一條の禪閣兼良公の御説にも、牡丹花宵柏の講ぜられしにも、表は莊子が寓言なりと宣へり。其餘は兼好が徒然にしくはなし。心にうつり行くよしなし事を、そこはかとなく書きつくるといひ、下戸ならぬをよしとし、四十に足らずして死にけんといひ、子孫あらせじといへるを嘉よみし、文は南華



の篇と云ひ全篇老莊の心なり。さて俳諧の二字は、戯れ語るとよみたれば、月を羨み花にめで、折節の興に任せて、ひやうふつと云ひ出す言葉の、自らも腹を抱へ、人の耳目を喜ばしめて、衆と共に楽しむを俳諧の骨子とす。是莊子が心にあらずや。猶委しくは一時軒の蒙求に見えたり。彼の晋の八達が塵世を脱出して赤裸になり、大酒を飲みて清談したる、其の清談は皆俳諧ならん。  
(俳諧或問)

獨言

鬼貫

※一時軒の蒙求一  
 惟中著「俳諧蒙求」  
 延寶五年刊  
 ※晋の八達一胡母輔之  
 光逸傳一胡母輔之  
 卓・羊曼・桓彝・阮  
 學・散髮裸袒、閉  
 室酣飲、已累日、守  
 逸將三排、戶入、守  
 者不聽、逸使于三  
 戶外、脫衣露頭、而  
 于狗寶中、窺之、而  
 大叫、輔之驚曰、  
 他人決不能爾、呼  
 必我孟祖也、遽呼  
 入、遂與飲、不捨呼  
 盡夜、時人謂之八  
 達。  
 ※俳諧或問一延寶  
 六年刊。撰者脩竹  
 堂は即ち惟中の匿  
 名なりと思はる。  
 ※鬼貫一元文三年  
 殘、年七十八。上  
 鳥氏。伊丹の人、  
 名は治房、通稱三  
 郎助。馬樂堂、佛  
 居士。樺花翁、佛  
 兄等の筑後柳川  
 壯にして、後柳川  
 侯に、大和郡山侯に  
 仕へ、後致仕して  
 俳諧に専心せり。  
 著書、大悟物狂、

それがし八歳になりける頃、いなければなる發句しそめてより十三歳の頃、松江維舟に師の因みを結びて、彼の翁の古風を學び、此の道に心をいれて不斷獨吟の百韻をつくり、その頃名に立てる古老の方々へ送りて、點を好み見る事幾卷といふ其の數を知らず。かくて十六歳の頃より、梅翁老人の風流花やかに心移りて又其の當風をいひ習ひ、猶其の法をも踰え侍りて、文字あまり、文字足らず、或は寓言、或は異形、さまざまいひちらせし頃、發句・付句によらず、人によしといはれ、我が心に面白かりしやうにありけるをも、修行しつる覺もなくてなす所、よき句にて有るべ

犬居士、七車、獨  
 言等。  
 ※いなけなる一雅  
 氣なるの意か。  
 ※松江維舟一松江  
 重頼。  
 ※梅翁老人一西山  
 宗因。

※青柳の一宗武の  
 句。  
 ※まん丸に一宗鑑  
 の句。

※摺小木も一宗因  
 の句。

※延寶九年の頃一  
 天和元年、鬼貫二  
 十一歳の年。

きやうはあらじと、只管我が心に疑を起してさらに心をとどむる事なく、思ふに古よりの俳諧はみな詞巧みにし、一句の姿多くはせちにして或は色・品を飾るのみにて心淺し。つらくよき歌といふを思ふに、詞に巧みもなく、姿に色・品をも飾らず、只さら／＼とよみながして、しかも其の心深し。古より俳諧の發句を思ふに、

青柳の眉 かく岸の額哉

まん丸に出づれど永き春日かな

うつぶいて踊るゆゑにやぼんのくぼ

山伏は濫くとかぶれときん梯

またその頃當風と聞えし句

摺小木も紅葉しにけり唐がらし

これらのはかの宗祇法師の説に、非道・教道・非正道・進正道といへる類なるべし。たゞ俳諧は狂句作意をいふとのみ心得たるばかり、一概にかたよるべき道にもあらず。猶深き奥もやあらんと、延寶九年の頃より骨髓にとほりて物みな心に染む事なく、やゝ五とせを経て貞享二年の春、誠の外に俳諧なしと思ひもうけしより、その



※初中後一俳諧の口  
學抄に初・中心・後  
傳に云ふ心持在レ  
之「とあり。宗祇  
の「吾妻問答」に  
も稽古に初・中・後  
あることを説け  
り。

飾りたる色・品も、かの一句の巧みも悉く失せて、それ〴〵は皆そら事となりぬ。」  
俳諧の道は浅きに似て深く、易きに似て傳はりがたし。初心の時は浅きより深き  
に入り、至りて後は深きより浅きに出づとか聞きし。昔は人の心すなほにして、初  
中後を経しかど、今はその修業する人だに少く、心皆先に走りて、いつしか人も許  
さぬ上手にはなりけらし。これを思ふに、俳諧は只當座の化口あだぐちにして、根もなき云  
捨草なりと、輕き事に思へるなるべし。是も亦和歌の一躰とか聞く時は、假にも淺  
々しく思ふべき道にはあらぬを、本意なき事にぞ侍る。」

※蜂吹く一蜂の面  
近く飛ぶ時、恐れ  
嫌ひてうそぶくや  
うにすること。

大方の人は口に任せて言ひ續くるを、此の道の達者なりと心得て、更に我に益あ  
る事を知らず。俳諧は只まことに基く中立なかだちなりと、心をよせて修行すべし。たとへ  
ば、若き人の親にいたく諫められん時、腹だ、しき心の出づる事あらば親といふ前  
句に子として腹立つる躰を付句に取直して見侍るべし。全くのりなじみはあらじ。  
又打つ杖の弱きを悲しめる心ならば、よくなじむべし。さあれば親に向ひて蜂吹く  
は神慮にも憎ませ給ふ所なりと恐れて、孝心に基づき、あるは人に仕ふる身の慰む  
方に誘いざなはれて用を後うしろになす心をも、付句に取直してそれを改め、或は他人の交りだ

※詞は古きを云々  
| 定家の詠歌大  
概・近き秀歌等に  
述べし説なり。

に、四海みな兄弟なりと心の歩みをつけ、常の業を俳諧になぞらへ、俳諧を又常の  
むつまじ事に案じよらば、自然と句毎にのりなじみも出来ぬべし。」  
異様ことさまの句を作りて、それを新しと思ふ人は、此の道を深く尋ね見ざれば、遠き境  
に入り難くや侍らん。詞ことばは古きを用ひ、心は新しきを用ふところ聞きしか。」  
句を作るに、姿・詞をのみ巧みにすればまこと少し。只心を深く入れて、姿・詞  
にかゝはらぬこそ好ましけれ。古歌にもあれ、故事にもあれ、只管案じ探りて句を  
作ると、自ら心に浮ぶ所を用ふるとの境ならんか。」  
句は師匠の形によく似せて仕習ふべし。修し得たらん後は、その形を離れて、天  
性一人々々が得たる風儀をこそ用ひまほしけれ。」  
俳諧をする人、あらましにもいひこなせば、はや得たり顔に止まるあり、無下に  
本意なくぞ侍る。ある時は句もなり易きやうに覺え、又ある時は只管なり難くもな  
り侍らん事、幾かはりも有りぬべし。深く入りなん人は、其の程々に功積りて、猶  
むづかしき事を覺え侍らん。修行の道に限あらざれば、至りて止まる奥もあらじ。  
只臨終の夕までの修行と知るべし。たとへば宗祇法師は連歌の達人にて、餘に並べ



る人もなしとはいへど、祇公一人の上には、今五とせむ給はゞ、五年の功、十とせながらへ給はゞ十年の功も有りつべき事にこそ。」

新しく作りたる句は、やがて古くなるべし。只とこしなへに古くもならず、又新しくもならぬをこそ、よき句とはいひ侍るべくや。作意にのみかゝはりていふ句とまことを深く案じ入りて、一句の姿・詞にかゝはらぬとの差別なるべし。」

偽を除きてまことをのみいひ述べんと、力を入れて案じ侍るは、偽いふにはまさりたれど、これも亦まことを作りたる細工の句にて侍り。此の道を修し得たらん人の、虚實の二つに力を入れずして、いひ出す所、句毎に偽なきをこそ自らのまこととはいひ侍るべけれ。これなん常の心に偽なく、世の哀をも深く思ひ入りたる故なるべし。」

心素直に生れつきたる人も、俳諧にてはたゞ嘘のみいひ習ひ、形實躰なるも、同じく異形を盡せる人多し。俳諧といふものはいかなる事を益とはなせるぞと、深く尋ね入りなん事もなく、口に出づるに任せていひ慰む業なりと、只輕々しく思ひたるは、聊かこの道を辨へざる故にて侍る。心素直なる人、俳諧にていふ如く嘘つき

※こうたうーかう  
とう。上品、高尚  
なること。

※心を種として萬  
の言の葉となり云  
々―古今集序によ  
る。

て世に交るべきや。又風俗※こうたうにしなして、世に交る人の、衣服に興さむる程の模様を染め、或は又羽織袴の上に甲か、立烏帽子などを着して人中へ出よといはゞ、出づべきや。よく／＼考へ知るべし。それ俳諧は和歌のはしなれば、心を種として萬づの言の葉となり、目に見えぬ鬼神をも哀と思はせ、猛き武夫をも慰むる道とこそ聞きしか。俳諧を修してまことの道を行ひ侍らば、情知らぬ人すら情を知り、あるは不孝不忠の人も不の字を遠ざくべし。只世に交はりて、さしむく所を前句に立て、一つ一つ付句に取直して考へ見るべし。前句と付句と肌もあはず、のりなじみのなき時は、これすなほの道にあらじと、嗜み改むべき事にこそ。」

人と我と常いふ詞を句に作れば、悉く俳諧なりと辨へ知らざる人は、付句の味ひをも知る事かたかるべし。」

古風も昔は當風ならし、今はた當風とおぼしき句も、又いつしか古風となり侍らん。古風といふも當風といふも、ともに作り求めたる句の姿によりて新古の名はあれど、修し得てまことの道を行ひけん人の句は、幾とせ經るとも新古の差別はあらじ。只この道に深く心を入れなん人の、まれなるこそ歎かしけれ。」



鶯は鶯、蛙はかはづと聞ゆるこそ、おのれくが歌なるべけれ。鶯に蛙の聲なく、蛙に鶯の囀りなきこそまことには侍れ。」

俳諧の修行といへるは、ひたすら句にまことの味はひを稽古して、平生人に交るをも、すぐにそのまことを用ひて、いつはりなき事をむねと心得たらんをこそいふべけれ。」

まことを深く思ひ入りて言ひ述べたるも、詞よろしからざるは本意なくぞ侍る。心と詞とよく應じたらん句をこそ好む所には侍らめ。  
(ひとり言)

祖翁口訣

芭蕉

※ひとり言―享保三年刊。

※祖翁口訣―伊勢派の俳人乙由の子蕉浪の所持せし芭蕉の遺語なりといふ。

一、格に入つて、格を出でざる時は狭く、又格に入らざる時は邪路にはしる。格に入り、格を出でて、始めて自在を得べし。詩歌・文章を味ひ、心を向上の一路に遊び、作を四海にめぐらすべし。

一、千歳不易。一時流行。

一、他門の句は彩色の如し。我が門の句は墨繪の如くすべし。折にふれては彩色

のなきにしもあらず。心、他門にかはりて、さび・しをりを第一とす。

一、名人は地をよく調ふべし。折にふれては、危き處に妙あり。上手は強き所に面白味あり。

一、等類・作例、第一に吟味すべし。

一、古書撰集に眼をさらすべし。

一、我が門の風流を學ぶ輩は、先づ鶴の歩みの百韻・冬の日・春の日・猿蓑・ひさご・曠野・炭俵等熟覽すべし。發句は時代々々を考ふべし。

一、初心のうちには句數を求むべし。それより姿情をわかり、大山を越えて向ふの麓へ下る所を案ずべし。六尺を越えんと欲するものは、まさに七尺を望むべし。されば心高き時は邪路に入りやすからん。心卑き時は古人の胸中を知る事能はず。

一、俳諧は中人以下のものと誤れるは、俗談平話とのみ覺えたる故なり。俗談平話を正さんが爲なり。拙きことばかり云ふを俳諧と覺えたるは淺ましき事なり。俳諧は萬葉集の心なり。されば貴となく賤となく味はふべき道なり。唐・明すべて中華の豪傑にも愧づる事なし。只心の賤しきを恥とす。

※等類―類似の句をいふ。

※鶴の歩みの百韻―丙寅初懷紙ともいふ。貞享三年成、寶曆十一年刊。初更に芭蕉の評語を加へしもの。落葉考に收めらる。



一、てにをは專要なり。我が國はてには第一の國なれば、先哲の作を味ひ、一字も亀末なることなかるべし。句の姿は青柳の小雨に垂れたるが如くにして、折々微風にあやなすもあしからず。情は心裏に花を眺め、真如の月を觀ずべし。附心は、薄月夜に梅の匂へるが如くあるべし。

（二葉集）

黒さうし

士<sup>※</sup> 芳

※一葉集。佛分。湖中共編。文政十年刊。芭蕉一代の遺稿を集めしもの。

※土芳。享保十五年。伊賀上野の人。服部氏。名保英、通稱半左衛門、蘆馬、號す。元禄元年芭蕉の菴を訪ねて一葉の菴を聞き、菴の草の菴の句を與ふ。著書、菴蟲菴集、三冊子。

師の曰、俳諧は教へてならざる所あり、よく通ずるにあり。或人の俳諧は曾て通ぜず、たゞ物を數へて覺ゆるやうにして通る物なしとなり。師の曰、或人の句は艶を云はんとするに依つて句艶にあらず。艶は艶いふにあらず。又或人の句はしをりなし。しをらんずるが故にしをりなし。又或人の句は作に過ぎて心の直を失ふなり。心の作はよし、詞の作好むべからずとなり。」

句の姿、さのみかはるにもあらで人々の腸を絞る所、聞くものゝ好き好かざるによりて、言下に心の如く聞きなし侍らんは本意なしと、師のいへるよしあり。」

師の曰、句は天下の人に叶ふる事は易し。一人二人に叶ふる事かたし。人の爲に

なす事に侍らばなしよからんと、戯れの詞なり。」

師の曰、俳諧に思ふ所あり。能書の物書けるやうに行はむとすれば、初心道を損ふ所ありといへり。いかなる所ぞと問へども、しかくとも答へ給はず。其の後句を心得見るに、寛ぎ一位有り、高く位に乗じて自由を振はんと根ざしたる詞ならんか。末弟の迷ひて道をおろそかにせん事を、何かにつけて心にこめてつゝしみの詞なり。」

師の曰、俳諧の益は俗語を正すなり。常に物をおろそかにすべからず。此の事は人の知らぬ所なり、大切の所なりと傳へられ侍るなり。

（くろさうし）

移・響・句・位

去 來

先師曰、發句は昔より様々替り侍れど、附句は三變にとゞまれり。昔は附物を專とす。中頃は心附を專とす。今は移り・響・にほひ・位を以て附くるをよしとす。

壯年曰、いかなるを響・句ひ・移りといへるにや。

去來曰、支考等あらましを書き出せり。これを手にとりたる如くにはいひがたし。

※くろさうし。三冊子の一、伊賀の蕉門土芳の遺書。安永六年刊。

※ボナン。初め暮年と書けり。長崎の人、久米氏、名は利文。去來の弟なり。



今先師の評をあげて諭さん。他は推して知らるべし。

赤人の名はつかれけりはつ霞

史邦

鳥もさへづる合點なるべし

去來

先師曰、うつりといひ、匂ひといひ、實は去年中三十棒をうけられたるしなりと悦び給ひけり。こゝに思へば、匂ひといふも、移りといふも、僅かに句作のあやにして、乗ると乗らぬとの境なれば、冷暖自知の時ならでは、悟し明らむる事あるまじ。此の句もし「赤人の名も面白や」とあらば「鳥も囀るけしきなりけり」とも作るべきを、「名はつかれたり」といへるより、「合點なるべし」と相移り行くところ、味はひ見らるべし。響は打てば響くがごとし。たとへば、

くれ縁に銀かはらけを打碎き

身細き太刀の反るかたを見よ

先師、此の句を引きて教ふるとて、右の手にて土器を打ちつけ、左の手にて太刀にそりかくる眞似をして語り給ひける。一句一句に趣のかはる事なれば、言語に盡しがたきところ看破せらるべし。

※くれ縁に云々  
既望集に出づ。

※上置の云々  
炭俵巻下、歌仙振賣の巻に出づ。

牡年曰、句の位とは如何なる事にや。去來曰、前句の位を知つて附くる事なり。

たとへよき句ありとも、位應ぜざればのらず。先師の戀の句をあげていはば

上置の干菜さざむもうはのそら

馬に出ぬ日は内で戀する

前句は人の妻にもあらず、武家・町人の下女にもあらず、宿屋・問屋の下女なりと見て、位を定めたるものなり。

細き目に花見る人の頬はれて

菜種色なる袖の輪ちがひ

前句、古代の人のありさまなり。

白粉を塗れども下地黒い顔

役者模様の袖のたきもの

前句のさま、今様の女と見ゆ。

尼になるべき宵のきぬく

月影に鑑とやらん見すかして

※白粉を云々  
市の庵及び落柿舎日記所収歌仙に出づ。

※尼になるべき云々  
桃の白實所収歌仙に出づ。



※ふすまつかんで  
云々―深川集所収  
歌仙に出づ。

前句、いかにも然るべき武士の妻と見ゆ。

※ふすまつかんで洗ふあぶら手

懸乞に戀のこゝろを持たせばや

前句、町家の腰元などいふべきか。是をもて他はなずらへて知らるべし。

牡年曰、面影にて附くると云ふはいかゞ。去來曰、うつり・ひゞき・匂ひは附様の鹽梅なり。面影は附様の事なり。昔は多くは其の事を直に附けたり。それを面影にて附くるといふは、

※草菴にしばらく居ては打破り

命うれしき撰集の沙汰

初は、「和歌の奥儀は知らず候」と附けたり。

先師曰、前を西行・能因などの境界と見たるがよし。されど直に西行と附けんは手づつならむ。たゞ面影にて附くべしとてかく直し給ひぬ。いかさま西行・能因の面影ならんとなり。又人を定めていふのみにあらず。たとへば、

※發心のはじめに越ゆる鈴鹿山

内藏の頭かと呼ぶ人は誰そ

※草菴に云々―猿  
糞卷五、歌仙、鶯の  
羽の卷に出づ。

※手づつ―拙きこ  
と、下手、不調法。

※發心の云々―猿  
糞卷五、歌仙、灰汁  
桶の卷に出づ。

※去來抄―去來の  
遺書として信ぜら  
る。安永四年刊。

※野明―洛西嵯峨  
の人、はじめ常牧  
門、後蕉門に歸す。

※花守や云―去來  
の句、炭俵に出づ。

※卯の花の云々―  
去來の句、炭俵に  
出づ。

先師曰、いかさま誰ぞが面影ならんとなり。面影の事支考も書き置きたり、見合はすべし。  
(去來抄)

寂・葉・細み

去 來

野明曰、句のさびはいかなる物にや。去來曰、さびは句の色也。閑寂なる句をいふにあらず。たとへば、老人の甲冑を帶し、戰場に働き、錦繡を飾り、御宴に侍りても、老の姿有るが如し。賑やかなる句にも、靜かなる句にも有るものなり。たとへば、

※花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰、さび色よくあらはれたり。

野明曰、句の位とはいかなるものにや。去來曰、これも亦一句をあぐ。

※卯の花の絶間叩かむ闇の門

先師曰、句の位尋常ならずとなり。去來曰、畢竟句位は格の高きにあり。句中に理屈をいひ、或は物をたくらべ、或はあたり合ひたる發句は位くだるもの也。



野明曰、句のしをり・細みとはいかなるものにや。去來曰、しをりは哀なる句に  
あらず。細みはたよりなき句にあらず。しをりは句の姿にあり、細みは句のこゝろ  
にあり。是も證句をあげていはじ、

※十團子も小粒になりぬ秋の風

先師曰、此の句しをりあり。

※鳥どもも寝入つて居るか余吾の海

先師曰、此の句細みありと評し給ひしとなり。

去來曰、惣じてさび・位・細み・しをりの事は以心傳心なれば、唯先師の評をあ  
げて教ふるのみ。他は推して明らむべし。  
(去來抄)

### 不易流行

○  
去來曰、蕉門に千歳不易の句、一時流行の句といふあり。是を二つにわけて教へ

給へども、其の本は一なり。不易を知らざれば基立ち難く、流行を知らざれば風新  
にならず。不易は古に宜しく後に叶ふ句なる故に、千歳不易といふ。流行は一時一  
時の變にして、昨日の風は今日宜しからず、今日の風は翌日に用ひ難き故、一時流  
行とは、はやる事をいふなり。

※魯町曰、不易の句の事は如何に。去來曰、不易の句は俳諧の躰にして、未だ一の  
物數寄なき句なり。一時の物數寄なき故に古今に叶へり。たとへば、

月に柄をさしたらばよき團うちかな

宗 鑑

これはく〜とばかり花の吉野山

貞 室

秋の風伊勢の墓原なほすごし

芭 蕉

是等の類也。魯町曰、月を團扇に見立てたるも物數寄ならずや。去來曰、賦・比・興  
は俳諧のみに限らず、吟詠の自然なり。凡そ吟にあらはるゝもの、此の三つを離る  
ゝ事なし。物數寄とはいひ難し。

魯町曰、流行の句は如何に。去來曰、流行の句は、おのれに一つの物數寄ありて  
はやるなり。形容・衣裝・器物等に至るまで、時々のやはりあるが如し。たとへば、

※十團子も云々  
許六の句、續猿蓑  
に出づ。

※鳥どもも云々  
路通の句、猿蓑に  
出づ。

※魯町一享保十二  
年歿、年七十二。  
向井氏、名は元成、  
去來の弟。

※賦・比・興  
六義の名目。賦は  
見聞を有りの儘に  
言ふこと、比は譬  
喩を以て自らの思  
を述ぶること、興  
は自ら思ふ物を興  
以て言ひ起すこと  
なり。毛詩序「一曰  
興、二曰比、三曰賦、  
四曰風、五曰雅、六  
曰頌。」



むすやうに夏にこしき飯の暑さかな  
此の躰久しく流行す。

あれは松にてこそ候へまきの雪

松 下

海老肥えて野老ささろ瘦せたるも友ならなむ

常 矩

或は手をこめ、或は歌書の詞づかひ、又は謠の詞とりなどを物數寄したるあり。是等も一時に流行し侍れど、今日はとり上ぐる人なし。魯町曰、むすやうに夏にこしきといふは縁にあらずや。去來曰、縁は歌の一事にして、物數寄にはあらず。手を込むると縁とはかはりあり。

魯町曰、不易流行其の本一なりとは如何に。去來曰、此の事辨じ難し。あらまし人躰にたとへていはゞ、不易は無爲の時、流行は座臥・行住・屈伸・俯仰の形同じからざるが如し。一時一時の變風是也。其の姿は時に替るといへども、無爲も有爲も、もとは同じ人也。

魯町曰、不易流行の事は古説にや、先師の發明にや。去來曰、不易流行は萬事に渡るなり。しかれども、俳諧の先達是をいふ人なし。長頭丸＊已來手を込むる一躰久

＊長頭丸―松永貞徳。

＊角樽や―角と牛との縁によりて仕立つ。  
＊花に水―水あげと天龍との縁。

しく流行し「角樽や傾け飲まう丑の年」、＊「花に水あげて咲かせよ天龍寺」といへるまでに吟じたり。世の人、俳諧はかくの如きものとのみ心得つめぬれば、其の風を變ずる事を知らず。宗因師一度其の凝り固まりたるを打破り、新風を天下に流行し侍れど、未だ此の教なし。しかりしよりこのかた、都鄙の宗匠達古風を用ひず、一旦流々を起せりといへども、又其の風を長くおのが物として、時々變ずべき道を知らず。先師はじめて俳諧の本體を見つけ、不易の句を立て、また風は時々變ある事を知り、流行の句變ある事を分ち教へ給ふ。然れども、先師常に曰、宗因なくんば我々が俳諧今以て貞徳の涎をねぶるべし。宗因は此の道中興開山なりといへり。去來曰、蕉門に不易流行の説々あり。或は今日一句一句の上を云ふ説あり。是も流行にあらずといひ難し。然れども不易流行の教といふは、俳諧の本體一時一時の變風との事なり。

(去來抄)

○

土 芳

師の風雅に萬代不易有り、一時の變化あり。この二つに究り、其の本一なり。その一といふは風雅の誠なり。不易を知らざれば實に知れるにあらず。不易といふは



新古によらず、變化流行にかゝはらず、誠によく立ちたる姿なり。代々の歌人の歌を見るに代々その變化あり。又新古にもわたらず、今見る所昔見しにかはらず、哀なる歌多し。是先づ不易と心得べし。又千變萬化するものは自然の理なり。變化に移らざれば風改まらず、是に推し移らずと云ふは、一旦の流行に口質時を得たるばかりにて、その誠をせめざる故なり。せめず心を凝らさざるもの、誠の變化を知るとばかり云ふ事なし。唯人にあやかりて行くのみなり。せむるものはその地に足をすゑ難く、一步自然に進む理なり。行末幾千變萬化するとも、誠の變化は皆師の俳諧なり。かりにも古人の涎をなむる事なかれ。四時の推し移る如く物改る、皆かくの如しとも云へり。師末期の枕に門人此の後の風雅を問ふ。師の曰、此の道のこゝに出でて百變百化する。しかれどもその境、眞草行の三つを離れず、その三つが中に未だ一二をも盡さずとなり。

生前折々の戯れに俳諧未だ俵口を解かずとも云ひ出でられし事度々なり。高く心を悟りて俗に歸るべしとの教なり。常に風雅の誠をせめたどりて、今なす處俳諧に歸るべしと云ふなり。常に風雅に入るものは、思ふ心の色、物となりて句姿定るも

のなれば、取物自然にして子細なし。心の色麗しからざれば、外に詞を巧む。是則ち常に誠を勤めざる心の俗なり。誠を勤むるといふは、風雅に古人の心を探り、近くは師の心よく知るべし。其の心を知らざれば、たどるに誠の道なし。その心を知るは、師の詠草の跡を追ひ、よく見知りて即ち我が心の筋押直し、爰に赴いて自得するやうにせめる事を、誠を勤むるとは云ふべし。師の思ふ筋に我が心の一つになさずして、私意に師の道を喜びて、その門を行くと心得顔にして、私の道を行く事あり。門人よく己を押直すべき所なり。松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと師の詞のありしも、私意を離れよといふ事なり。この習へといふ所をおのがまゝにとりて終に習はざるなり。習へと云ふは物に入りてその微の顯れて情感ずるなり。句となる所なり。たとへ物あらはに云ひ出でも、そのものより自然に出づる情に非ざれば、物と我二つになりて其の情誠に至らず。私意のなす作意なり。唯師の心をわりなく探れば、その色香我が心の匂ひとなり移るなり。詮議せざれば探るに又私意あり。詮議穿鑿せむるものは、暫くも私意になるゝ道あり。たゞ怠らず詮議穿鑿すべし。是れを專要の事として名を地ごしらへと云ひ、風友の中の名目とす。



功者に病あり。師の詞にも俳諧は三尺の童にさせよ、初心の句こそ頼もしけれなど、度々云ひ出でられしも皆功者の病を示されしなり。實に入るに氣を養ふと殺すとあり。氣先を殺せば句氣に乗らず。先師も俳諧は氣に乗せてすべしと有り。相槌悪しく拍子を損なふともいへり。氣を損なひ殺す事なり。又或時は我が氣をだまして句をしたるよしとも云へり。皆氣をすかし生きて養ふの教なり。門人功者にはまりてたゞよき句せんと私意を立て、分別門に口を閉ぢて案じ草臥るゝなり。おのが習氣を知らず、心の愚かなる所なり。

多年俳諧好みたる人より、外藝に達したる人、早く俳諧に入るとも師の云へるよし、或俳書にも見えたり。師の曰、學ぶことは常にあり、席に臨みて文臺と我と間に髪を入れず、思ふ事速かに云ひ出でて、こゝに至つて迷ふ念なし。文臺引きおろせば即ち反古なりと、きびしく示さるゝ詞もあり。或時は大木倒す如し。鏝本に切込む心得、西瓜切る如し。梨喰ふ口つき、三十六句皆やり句などと、いろ／＼にせめられ侍るも皆功者の私意を思ひ破らせんと詞なり。師の心をよく執行し、常に勤めて事に臨みて案じ殺す事なかれ。案ずるばかりにて出づる筋にあるべからず。

※やり句連俳に付句を極めて淡泊に付けなすこと。

※貫之が絲筋の幽かなるもの古今集、卷十物名一絲に別路の心細くも思ほゆるかな一三集、傳教大師の三貌一阿耨多羅三藐三菩提の佛達わが立給へ。

※名月に芭蕉の句、續猿蓑に出づ。芭蕉の句、續猿蓑に出づ。一、名月の花かと見えて綿島一、冊子の一。

常勤めて心の位を得て感ずるもの、動くやいなや句となるべし。氣を殺しては心轉ぜず、則ち轉ずる心細くなりては、貫之が絲筋の幽かなるもの、太く轉じては傳教大師の三貌三の丈夫心ならずと云ふ事有るまじ。皆生きて轉ずるに顯はるゝ筋なるべし。

新しきは俳諧の花なり。古きは花なくて木立ものふりたる心地せらる。亡師常に願に瘦せ給ふも新しみの句ひなり。その端を見知れる人を悦びて、我も人もせめられし所なり。せめて流行せざれば新しみなし。新しきは常にせむるが故に、一步自然に進む地より顯はるゝなり。「名月に麓の霧や田のくもり」と云ふは姿不易なり。「花かと見えて綿島」とありしは新しみなり。

(あかさうし)

發句調練の辨

許 六

世上、發句案ずるに、皆題號の中より案ずる、これなき物なり。餘所より求め來らば無盡藏ならん。たとへば題を箱に入れ置き、其の箱の蓋に上つて、乾坤を廣く



尋ぬるものなり。題號の中を尋ねて、新しき事なきと云ふは、たま／＼萬が一残りたるものありとも、隣家の人、同日に同題を案ずる時、同じ題の曲輪くるわなれば、残りたるものにひしと尋ねあつべし。道筋かはらざれば疑ひなし。まして遠國・遠里においていくばくか仕置きはべらん。曲輪を飛び出でて案じたらんには、親は子の案じ所と違ひ、子は親の作意と格別なるものなり。師の云ふ、發句は取合物なり。二つ取合はせて、よく取りはやすを上手と云ふなりと云へり。有難き教なるべし。たとへば、日月の光に水晶を以て影をうつす時は、天火・天水を得たるが如し。發句せんと思ふとも、案じざる時は出づべからず。日月ばかりを案じたりとも、天火・天水を得る事あるまじ。外より水晶を求めて、よくとりはやす故に、水火を得たるが如し。水晶ありとも、とりはやす事をしらでは、發句成就し難し。

又云ふ、上手に成る道筋儘かに有り。師によらず、弟子によらず、流によらず、器によらず、畢竟句數多く吐出したるものの、昨日の我に飽ける人こそ上手にはなれり。

俳諧は俗語・平話を述べ侍れば、誰も／＼よく云ひ習ひたるに似侍れども、知る

※五音一宮、商、角、徵、羽。  
※眼に見えぬ鬼を泣かしめ云々一古今集序による。

※うき吾を一猿糞に出づ。

人の耳にはいと淺ましき事のみ多し。第一てにはの事を知らぬ故に、一句の首尾調はぬ句のみなり。それ、てにをはは五音の響にて、眼※に見えぬ鬼を泣かしめ、武士の心を和げ侍るはてにはなり。唐土聖人の代の樂に少しも違はず、國を治むるの第一なり。樂は五音相續の調子を以て打鳴らし侍る。唱歌は詩なり。詩は風雅なり。春は麗々うつくしくと霞める中に、鶯の初音を催し、東風たち初むるより、梅の匂ひを送る事を述べて、民の心を和げ侍る。我が朝の樂も亦同じ。唱歌は皆歌なり。大和歌はてにをはなり。てにはは五音の響なり。芭蕉をはせをと訓じたるは、ウとヲと通ずる響なり。てにはのよき句は、自ら五音の調子よく響き、悪しきは調子調ひ侍らぬ故に、民の感應する事なし。されば絲竹・管絃の吹鼓ならでも、此のてにはの五音にて打囉し侍る故に、眼に見えぬ神鬼かみを泣かしめ、武士の心を和げ侍る事疑ひなし。大事のてにはを、あだに置ける事は未練の至りなり。てにはにて打鳴らすと云ふは、

※うき吾を淋しがらせよ閑古鳥

翁

此の句「淋しがらするかんこ鳥」とあらば、何を以てか人の心の和ぐ事あらむ。これ常なればなり。「淋しがらせよ」と、てにはを以て打鳴らし侍る故に、五音相續し



て聞く人感應す。中々樂器の吹鼓を雇ひ侍るには及ばず。一句一句に樂は自ら調ひ侍る。今めかしきに似たれども、大和は歌建立の國なれば、風聲・水音・一晝・一夜の呼吸の數皆歌なり。三十一文字の數と云ふには非ず。萬物の上に訓をつけて箸・橋・端の三つをよく云ひ分け侍るは、アイウエオの五つの響より出でて、一切此の響にもるゝ事なし。たとへば今のてには違ひの句は、餓ゑたる時「我は餓ゑたり、飯を喰ふまじき」といへるが如し。いづれの集にか作者覺えず。

捕られずば名もなかるらん紅葉鮒

※捕られずば―玄梅の句、篇突に出づ。  
 ※上下萬民云々―古き説經節・淨瑠璃などの段末に用ひられし常套語。感ぜぬ―なり。

と云ふ句あり。「名もなかるべし」と云ふべきを、「なかるらん」とはねたるは、「飯を喰ふまじき」といへるに似たり。此の類の句、いくばくあり。かやうのてには吾が黨は説經てにはと云ふ。一上下萬民押しなべて、感ぜんものこそなかりけれ」と、はねたるに少しも違はず。

俳諧に不易・流行と云ふ事あり、此の二躰の外はなし。近年不易・流行に自縛して、眞の俳諧血脈の筋を取失ふ。或は不易がよし、又は流行すぐれたりなど云ふ輩もあれども、かつて甲乙はなし。血脈相續して出生すれば、不易・流行の形は自ら

備はり、男となり、女となる如く、口より出づると等し、千里を走る物なり。あながちに不易・流行を貴とするものには非ず。萬葉・古今より相續したる血脈あり。師、此の血脈を發明して世上に廣め給ふ。後世の學者、よく此の血脈を見届けて、芭蕉流血脈の門人と成るべし。生前の門弟に非ずといふとも、百年の後此の筋を見届けたる人こそ、眞の門弟とは云ふべけれ。必ず在世の門人を羨む事なかれ。蕉門の輩多くは蕉翁を崇敬して、蕉翁の俳諧の尊き事を崇敬せず。これ俳諧に執心少き故にして、蕉翁の俳諧の尊きを元來知らざる故なり。世に蕉翁より勝れたる名人ありとも、曾て知るまじ。吾が佛と頼みたる師ありとも、自己の眼明かならば、其の名人を見届け、忽ち乗り換へて師とすべき事なり。風雅も次第に疎々しく成りて、よき人は名を隠し、或は死に失せて其の跡もなし。亡師竊かに未來記の一言あり。吾が滅後、門葉の輩集作する事は定めて初心の手に渡るべし。見よ見よ、十年は過ぐべからずといへり。今我々が集作するの罪、未來記中の一言いと耻し。(篇突)

※吾が佛と頼みたる師―吾が持佛の如く尊み頼みたる師。  
 ※未來記の一言―豫言。  
 ※篇突―許六・李由共撰。元祿十一年刊。

滑稽論

支考



俳諧といふに三あるべし。花月の風流は風雅の躰也。をかしきは俳諧の名にして淋しきは風雅の實なり。この三の物に及ばざれば世俗のたゞ言となりぬべし。詩といひ、歌といふ、俳諧は高下の情をもらす事なし。しかるに世の人の飯喰ひ、酒飲み、燈をかゝげ、硯にむかひて口にいひ、紙に書きつけたれば、是を今宵の俳諧とも思へる、さるはなきにしもあらねど、たゞ俳諧の日用といふべし。おのが家つくらんと思ふ者は、一木一草もあろかには捨てず。見るにつけ聞くにつきて、平生心に忘れざるは俳諧の家の主人公といふべし。人たゞ俳諧の名に迷ひて、是非にも俳諧を口にいひむと思ふは愚かなる俳諧師なり。

有情のものはさらにいはず、無情の草木・瓦石より道具・表包にいたるまで、おのれ／＼が本情に備へて、もつとも人情にかはるべからず。其の本情にいたらぬ人は、月花に對して月花を知らず、道具持ちても持たぬ人に似たるべし。

※金屏の松の古さよ冬籠

炭俵の序に、此の句の魂すわりてと書き侍りしが、その魂といふは何ぞや。金屏は暖かに銀屏は涼し。これ自ら金屏・銀屏の本情なり。しかるを世の金屏の松の古

※金屏の松の古さよ冬籠の句、炭俵に出づ。

びはよき冬籠なりと見ておかば、風雅の片端を心得たるといふべし。六月の炎天に金屏を立てんに、人の顔かゝやきてよからず。さる座敷は道具知らぬ人に落つべし。されば金銀屏の涼暖を今の人の見つけたるにはあらず、そも天地よりなせる本情なり。それを知らぬは誠に知らぬといふ人なるべし。しかれども金屏・銀屏のうち出でたる本情は、貴賓高家の千疊敷と思ひよるべし。それを松の古さよといはれたれば、蝶番ひもはなれ／＼に兀げかゝりて、芭蕉庵六疊敷の冬籠と見え侍るか。これ風雅の淋しき實なるべし。金屏の暖かなるは物の本情にして、松の古さよといふ所は二十年骨折りたる風雅の寂びといふべし。そも／＼本情あり、風雅あり、その本情だに知らぬ人の風雅に骨折らんとするは、豆腐をあへものにせむと思へる、料理のたがひもあるべし。

※蚊屋しまふ夜や銀屏の花薄

此の句もその秋、尾城のあたりより出でたる銀屏なり。かくいへば奥八疊・次十疊の座敷に縁の月影もきらめき渡り、玉階夜色涼如水といへるその夜のありさまならん。始の金屏は松の古びて取籠りたる座敷と見え、後の銀屏は花薄の華かにして

※蚊屋しまふ夜や銀屏の花薄の句。  
 ※玉階夜色涼如水、玉階、宮詞、銀水、玉階、建、畫屏、輕、燭、秋、光、冷、畫、屏、輕、羅、小、扇、撲、流、螢、玉、階、夜、色、涼、如、水、玉、階、看、牽、牛、織、女、星。







夕立の姿は水のあかばしりて、たつたと流れたれば、見渡しの様いそがし。五月雨の姿は薄濁りて漫々と引湛へたれば、細首の浮きわたりたる様殊によし。この類は姿を知らず、たゞ夕立は太刀にて首を斬るといふ理屈に落ちたる故なるべし。姿情の境はさる事ならんか。

※五畿—五器（食器）との言掛。

※五畿内に降る白雪やつめた食

山々に裾わけするや富士の雪

※坊西華坊支考。

坊が童たりし時、雪の詩作りて、或和尚に見せ侍りしに、此の二句をたとへものにして教へ給ひしを、夢のやうに覺え侍るが、今は有難き事なるべし。五畿内の雪は理屈をいひて姿を知らず、富士の雪はたゞ理をいひて姿あり。理と屈との境は此の程にや侍らん。

中々に雲より上はいさ知らず

見ゆるばかりも高き山かな

山々の高嶺々々を傳ひ來て

富士の裾野にかゝる白雲

※野鐵砲—口より出まかせに云ふこと。

始は姿情のまゝに言ひ出し、次は姿情の理をいふ。いづれも高き處をいふなるべし。是を風雅の理とや申し侍らん。俳諧は無分別の所にありて理屈なしとのみいへば、吾が門にも誤りたる人ありて、眼前に遮りたる物を口にまかせて言ひ散らし、切字にてにはの詮議もなく、附句は附きも附かず、一字半言も心に置かざれば、人に諂なしといはれて、肌着一枚に世情を踏み破りたるなど、これを野鐵砲といふ風雅の罪人なるべし。されば門人の放埒より師の名を辱しむる事は昔今の鑑なるべし。

行水のあがり人を人にあふがれて

たゞ一馬場に癖を知る馬

かやうに附けたらん、世間の理屈なり。暑さに行水するとならば、鞠に遊び木を植ゑかへたるも同じ附句ならんや、一句の全躰を見る事なし。行水にあふがるゝといふは、公家長者の類なるべし。千人が千人あふがるゝといへど、あふがるゝは武士の本意には非ず。此の前句には、歌合に負けて不機嫌なるなど附けたらば、あふぎ居たる妾の何心なき様まで思ひやられ侍らん。此の句をあふがせていひかへたらば、さは又機嫌よき様なるべし。風雅の理・世間の理とて二になし侍るは本情に叶ふと



叶はざるとの境なり。理は不盡の妙とて、鷲を鳥と言はむも言ひ伏すべし。それは天地の本情に非ず。かく言へば理窟の論に似たれど、風情の動く動かざるとを此所に定めたるなり。たゞ新古の境を知るは姿情の二つを知るべきなり。(續五論)

虚實の論

支考

そも俳諧の虚實とは、例に言語の設さばきなるより、道を説く時の兩翼にして、それが變化を知るには如かず。然れば其の虚は實を和らげ、其の實は虚を補ひて、何れの道にか片し／＼ならん。世に言ふ、儒書は實學にして佛經は虚誕なりと。其の人は勸懲の先後を辨へず、言葉の虚實に尻を据ゑて、實はよき物と思ひ虚はあしき物と思ふ、世情の變を知らぬ人の謂也。さりや釋尊は馬麥の酬いに苦しみ、孔子は牛刀の戯れに遊べる、是等は虚實の證文ならずや。其の經は法華を要かなめとして開權顯實と示し給へば、其の書は論語を鑑として母必母固を論し給ふに、彼方は實をもて方便の門を開き、此方は虚をもて理窟の關を破れり。是等は佛儒の公言にして、其の書其の經の奥義ならずや。世に言ふ、連歌は實情にして俳諧は虚頭なりと。其の人も

※馬麥の酬い一起  
興行經「佛九十日  
食馬麥、我因地  
訪佛曰、莞頭沙門  
正應食馬麥、不  
應食此甘膳之  
供。」  
※牛刀の戯れ論  
語、陽貨「子之武  
城、開絃歌之聲、  
夫子莞爾而笑曰、  
割雞焉用牛刀。」  
※母必母固論語、  
子罕「子絶四、母  
意、母必、母固、  
母我。」

※古今の序にも和  
らげ、猛き武士の  
心をも慰むるは歌  
なり。  
※かりほの管、後  
撰集、天智天皇御  
製、秋の田のかり  
ほの菴の管をあら  
みわが衣手は露に  
濡れつゝ、  
※一夜の夏を迎  
へて、新古今集、春  
持統天皇御製、春  
すぎて夏衣にけら  
し白妙の衣ほすて  
ふ、天の六義、詩  
の六つの體、賦・詩  
の六つの體、頌・  
比・興・風・雅・頌  
の分類、この詩經の  
詩の分類法に倣ひ  
て古今集序に和歌  
の體を六つに分  
ち、そへ歌、かぞへ  
歌、なぞらへ歌、た  
とへ歌、たゞ歌、六  
種とす。

例の變化を知らねば口に言ふ所を習へども、心に遊ぶ所を傳へず。例へば佛家の戸口を違へて、教家と禪家との意地の如き、俳諧は連歌をもどかむとするものなり。然るを或抄に花實を論ずるとて、和歌は其の實を本とすべしとは、自己に花實の先後を辨へず、世並に言ひ置ける文章と見るべし。いでそよ、貫之が古今の序にも、男女の中を和らげ、猛き武士を慰むると言へるぞや。其の實に居て理窟をせむべき、其の虚に慰めて道理に靡くらん。そもいへ和歌の鑑ならんとて、古今萬葉の花實を調へたる百人一首の卷頭に、天智の御製も持統の御詠も、實にかりほの管をかぶりて御衣の袂を濡らし給はんや。實に一夜の夏を迎へて山に晒さらしを干すべきや。詩歌は此の虚を本として、六義に虚實の品ある事を知るべし。此の故に吾が翁は、俳諧といふは別の事なし、上手に迂詐うそをつく事なりとは、例の俳諧の端的底にして、虚實不自在の人には知らすまじき芭蕉門下の一振刀なり。さはいへ虚實には聞きまがひもあれば、虚實の虚實口傳といふ事を俳諧の道の一大事と知るべし。一向道知らぬ無風雅の人も虚言を作り眞言を構へて、夜遊の興には言ふなれど、口に出づるを虚と覚え、心に止むるを實と思へば、其の虚は世に言ふ不道化に落ちて其の實は心の



※婦姑の争ひ一莊子一室無二空虛一則婦姑勃谿。一勃谿は闘争の義。

※三略一圯上の老人が張良に授けしといふ兵書、黄石公の著と傳ふ。上略、中略、下略の併稱。

絆ほだしとなりなむ。誰か知らん、此の論には虚より萬物を調へて、實より五倫を害そごなはむとは。爰を莊周が喩にも、家といふ物に虚なければ、婦姑※の争ひは止まじと言へり。爰に虚實の變を論ぜば、實は好惡の二に限りて、虚には様々の變あるべし。例へば五倫の道をもて言はむに、實は忠孝の本に似たれど、その忠言の耳に逆ひ、その孝行の心に合はざるを、強ひて其の實を行ふ人は他國に行きて君の恩に背き、我家にありて父の名をくたす。世は只其の實をよき物とのみ思はめど、金くれる誓ひの違たがはぬは嬉しく、首取る恨の解けざるは苦し。實のよしあしは此の二に過ぎざらん。さて虚といふには虚實ありて、口に興ずるは遊人の放言なり。心に構ふるは佞人の讒言なり。しか又文道に六義の名を分ち、武道に三略※の法を立てたる、何れも机に目を塞ぎて千里の外の工面ながら、文雅には目に見えぬ鬼神をも喜ばせ、武略には猛ものぶき武士を怒らしむ。其の虚は喜怒の變ならずや。況や聖經賢典に於て、道に此の虚を行へば、それを方便説とは言ふなり。此の故に此の論は言語に虚實の自在を得て、利害の變を知れりとなり。そも又虚實の大小を論ぜば、虚は大いにして實は小さし。例へば針の小さうして沈み、船の大いにして浮べるが如し。我豈其の針を恐

※莊周も一莊子、道遙遊一且夫水之積也、不厚則負大舟也、無力、覆杯水於坳堂上、則芥爲之舟、置杯則膠、水淺而舟大也。一

※白馬の法一芭蕉の傳書と稱する。二十五ヶ條のこの條に「實に居て虚に働くべからず」とあり。

れざらんや。人豈其の船を咎むべきや。莊周も例の此の船をほめたり。かく言へば虚實のかたちくなるに似たれど、其の虚は先にして天地陰陽あり。其の實は後にして君臣父子あり。是を大小の論とは言はず、是を先後の辨と言はむ。世は只其の實の行ひ易く、其の虚の設き難からんには。爰を虚實にして、その天堂には遊び易くかの地獄には入り難しと言へり。さはよし其の道に先後あり、其の物に始終ありて、出づる所と入る所とを知れば、其の虚の危からんよりは其の實の隱ならんには。口傳、此の語は我家の識文しんぶんにして、爰に新安の朱學士が大學の序を看破せば、爰に儒佛の内證をも知るべし。此の故に吾翁は虚に居て實を行ふべし、實に居て虚に遊ぶべからずとは、白馬※の法の第一義にして、人の止まる所を言へる大學の綱領ならざるや。其の書は孔子の遺誠にして、明德の明は虚實を言ひ、新民の新は變化を言へる。すべては虚實の二法より變化を知るには如かざらん。今又虚實の先後を論ぜば、虚に居る人は是非を咎めず蚊宣※のそしりに耳を遊ばしめ、實に居る人は親疎を分け、金石のちぎりに命を果たす。彼は仁にして是は義ならめど、仁義に好惡の變あるを知るべし。然れば虚に居るも實に居るも、例に兩翼の用あれば、虚實の先後す



※鹿居士が遺言  
編年通論一鹿居士  
臨死枕三葉州牧于  
公膝二曰願空三諸  
所有一切勿レ實ニ諸  
所無レ

※綾足一安永三年  
殺年五十六。俳號  
部氏。名孟喬。初俳  
葛鼠、涼袋。初俳  
諧を野坡に學び、  
後麥林の風に歸せ  
り。又和歌を賀茂  
眞淵に學びて綾  
足、又露菴等と號  
し、又畫號を寒葉  
齋といふ。元弘前  
の、後江戸にあ  
りて俳歌及繪畫を  
業とせり。著書、  
俳諧明題集、片歌  
道のはじめ、同二  
夜問答、同東風流、  
同百夜問答、歌文  
要語、詞草小苑、

西山物語、吉野物  
語、寒葉齋畫譜、  
建氏畫苑等。畫譜、  
素輪。綾足の門人  
※早く事を正さざ  
ろ。俳諧に俗語宛  
字等の多きを正さ  
んといふこと綾足  
の主張なり。

※よて一依つて。

る所は、暫く家々の流派と見て置くべし。さはいへど虚實の境は、返すくも聞きまがひあらん。例へば人ありて居の字を咎めむに、彼若し虚に居らば忽ち實となり、我若し實に居らば忽ち虚とならむ。さるは其の實の行ひ易く、其の虚の扱き難き故なり。是等に自在と不自在とを知るべし。昔鹿居士が遺言にも、願はくば世の所有を空にして、所無をも實とすべからずと言へる、畢竟は虚實の公論にして、虚實の虚實も此の事なり。人は此の語を座右に銘して、起居に其の意を工夫すべし。(俳諧十論)

### 芭蕉論

綾足

○輪問、古より俳諧てふものに遊べる人数を知らず。遊ぶにあらず、各々道としか家とす。そが中に貞徳・季吟・芭蕉など殊に稱せらる。其の後支考・麥林名を知らる。此の人々はなど早く事を正さざる。  
○綾答、貞徳はいさ知らず、季吟は歌學をもて家をなす。されど、志の置く所異なるにや、これは歌、これは俳諧なりと分けて、俳諧はたゞ無法の戯言と立てたる故に、歌を解く時は正しくし、俳諧の時は漫りにす。句も亦思ふまに俗語をいひ

ならべたれば、季吟が俳諧の家の集あり、これを見るに一句だも詞をなさず。季吟既にかくの如し、餘の人誰かまた正さむ。支考志は有りしかど、これは滑稽に源を立てて日の本の歌に背かむとす。此の故にいよ／＼俗に下り、賤しきに墮つ。芭蕉麥林は詞の長にて、句は殊に秀でたるもあれど、これも俳諧とのみ説きたるなり。  
○輪問、しからば其の詞は芭蕉にとり、麥林にとらむか。  
○綾答、片つ方に聞くべからず、其のとること大いに取捨あり。先づ芭蕉に於ける、半は後世に毒を流し、或は後世に藥を残す。

○輪問、審つばらに聞かむ。  
○綾答、世に俳諧てふものの廣く行はるゝは芭蕉の後なり。故に芭蕉によらざる人なし。こゝに於て各々作る所の言の製も、芭蕉にも此の詞ありと許して、芭蕉の毒を流せる事を知らず。芭蕉は隱遁の人なり、よて其の末流其の隱遁を好み、片歌をもて隱遁の物とす。是等の誤少からず。麥林も亦世に聞ゆ。されど世の俳人芭蕉をもて祖とするが爲に、先づ芭蕉の毒を擧げて、海内の謬となれる詞の本を正さむ。芭蕉によしと稱する片歌の外は、あまりにこちたくむつかしき句ども多おほなれば、



※高水に―芭蕉の句―高水に星も旅寝や岩の上―

※宇能花乎―萬葉集卷十九、大伴家持作。

※霧しけり―芭蕉の句―霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き―の初五を誤りたるべし。

※しぐれ行くや―芭蕉の句―しぐれ行くや船の軸綱にとり付きて―

こゝに一つ／＼數へがたし。先づ上の五言を擧ぐるを聞け。

※高水に(下略)

此の五文字洪水と出づる本もあれど、そはいづれにても詞をなさず。高水とも洪水とも、とても俗話を置くべくは、など水はなとは置かざるや。水はなもまた平話なれど、

※宇能花乎、  
令腐霖雨之始水逝

縁木續成、  
歸因兒毛我母

と萬葉集にも詞の例あり。又なべて洪水を水はなといふ。これらを事によりて正すといはむ。

※霧しけり同

霧敷けりか霧爲けりか、いづれにしても詞をなさず、後の世の詞に霏しくなどいひたるに倣へるものか。

※しぐれ行くや同  
懶性さや同  
愚にくらく同

かやうの五言を上置きたらん、下にいかなる雅言ありとも、一句の調をなすべき

や。(中略)

※近頃芭蕉句解といふ冊子あるを讀む。前に論ぜる薦着ていますの句の解に孫晨が事を引いていふ、大いに當らず。もし孫晨が事を作らば、誰人かとは置くべきや。また案じどころの眼もたがひ、句作もかくばかりにては何ぞ響かむ。青ざしの句の解には、上薦も聞しめすものにや、枕草紙に

青ざしといふものを、人のもて來たるを、青き薄様の艶なる、すゞりの蓋に敷き、(下略)

これ青ざしといふものと書きたる所にて知らずや。いかなる鄙びて人の知らざるものなりとも、何といふもの、何てふものと書かば、廣く其の物の通ぜざる事なし。然るに、枕草紙に名目の出でたればとて、青ざしやとばかりうちつけに置かむは、其の言製の委しからざるなり。芭蕉は何の心もなく、青ざしを見て青ざしと置きたるまでならむを、評者の枕草紙を引ききたるにて、却つて芭蕉の罪を長ぜり。古人にかゝる違ひめあるを、後の人眼をもて正すこと能はず。其の誤に誤をつけば、知らざる人猶惑ひて、かゝるうちつけの詞の例多し。此の故に我つばらに辨ずるのみ。

※懶性さや―芭蕉の句―不性さやかき起されし春の雨―  
※愚にくらく―芭蕉の句―愚にくらく―  
※芭蕉句解―雪庵九菴著、寶曆九年刊。  
※薦着て―芭蕉の句―薦着て―誰人の句―薦着て―  
※孫晨が事―三輔決録―孫晨が事―  
公録―家貧シク帝ヲ織リテ業ト爲ス詩兆ノ功曹トナル、京冬日被ナク、藥一東アリ、暮ニ臥シ朝ニ收ム。  
※青ざしの句―芭蕉の句―青ざし―  
草餅の穂―青ざし―  
らむ―青ざし―  
の穂―未熟なるを磨きて煎じたるも



※上等五言、下五言の例は中略せし中にあり。

※片歌二夜問答一寶曆十三年刊

前に出せる上五言・下五言等は何故賤しく、何故に然らずなど暗き人は思ふべし。是等の言製のわからざる人はとてもかくても雅言には至るまじ。又一偏に芭蕉を尊み、芭蕉は天下の人の取る處、何のあやまちあらむ等いふ、痴れたる人とこれを云はむ。猶はた共に語るに足らず。後人眼なきは芭蕉の眼なきなり。後人醉へるは芭蕉の毒にあたるなり。其の故如何となれば、自ら辨へたる人ならば、何ぞかゝる詞を残さむ。これはた毒を流せるにあらずや。

(片歌二夜問答)

片歌論

綾 足

○素輪問、俳諧てふもの、興れる、いづれの時よりぞ。

○綾答、俳諧の起れる、審にいづれの時よりといふ事を知らず。今發句てふもの興れるは我知れり。凡そ旋頭歌の言葉を半にして一句となすは、日本武尊言擧げし給ふこれなり。また短歌の言葉を半にして一句とするも、古事記に出でたる千鳥の歌これなり。此の二つの躰、なべての名を片歌といふ。

抑々、古の歌は體もなく分てる名もなし。此の故に志をあらはし、心を演ぶるも

※千鳥の歌一神武天皇記、伊須氣餘理比賣の歌一阿米都都知、那理麻斯登、那理佐那米。

※今様一當世、現代などの意。

※古今集俳諧體一古今集卷十九雜體の部に俳諧歌と題す。

※滑稽傳一史記の滑稽傳。

のは皆すべて歌といふ。其の詞の數定まり、はた其の體の定まれるより、長きを號けて長歌といひ、三十一言を短歌とし、三十八言を旋頭歌といひしより、片歌の名もありと知るべし。皆後の人の號けたる處なり。しかれば號けたるは後にて、言は先なり。はた片歌はひたぶるに言少く、飾れる冠もなく、沓もなし。よてこれが始めにて、旋頭歌も短歌も皆これよりや起りにけむ。はた其の先なる本つことを傳へて、よく事を正さば、などかく今様の淺ましきまでに下らむや。さるを俳諧とまでいひもて騒ぎて、横訛りに横訛りを加へて、ひとむきに家を立てたるは何ぞや。また古今集に俳諧體と名づけて選ばれる歌あり、其の歌あやしく趣を異にす。今様の片歌、多くは此の歌の體より案じ來りて、なべての名を俳諧といふ。はた俳式てふものは連歌にあるに倣ひ、別に俗談平話として、俳諧の家を立つること年久し。近世美濃の支考ありて、滑稽傳に源をとり、俳諧の文字に理をつけて諷諫ともいひ、談笑ともいふ、いづれも漢土の例にならへり。こゝに支考が論にしたがはざるものは、違へる俳諧の文字にさへならひ、其の源を古今集に立て、云ふことは皆俗談に遊び、事の違へるも改めず、これが俳諧なりと唱ふるもの多し。



○輪問、其の古の片歌を聞かむ。

○綾答、古の倭書に出づるもの多なり。こゝに一首二首を擧げむ。

波斯祢夜斯ハシキヤシ 和岐幣能迦多由ワキヘノカタク 久毛章クモキ

多知久母タチクモ 上代之片歌數首見※古今片歌明題集

※波斯祢夜斯—景行紀倭建命の歌。  
※古今片歌明題集—綾足著、寶曆十三年刊。俳句を四季及び雑に分類せる書。

これ日本武尊旅にいまして詠み給へる片歌なり。爰に先づ此の歌の意を解かむ。

波斯祢夜斯とは愛するといふ義なり。和岐幣は吾が家なり。迦多由とは方よりなり。久毛章は雲なり。多知久母は立ち來るの意なり。旅にありて古郷を思ふ身は、吾が家の方より立來る雲も、誠に愛するといふ意なれば、古今歌人の情は一なり。殊に詞少うして情の厚きを見るべし。

我、今これを旋頭歌の片歌と唱ふるは、十七字なるが短歌の片歌なれば、今する所の發句なり。さて十九言なるはかへりて古けれども、今出す所新なれば、分たむ爲に旋頭歌の片歌と唱ふ。凡て十九言・十七言・十四言なるも、皆片歌の名目と知るべし。

(片歌二夜問答)

夜半茗話

燕 村

※柳維駒—黒柳召波の子。  
※洛西の別業—洛の西北等持院に召波の別莊ありき。  
※かの何がしの禪師—白隱禪師。

※子もとより詩をよくす—召波は服部南郭に學びて漢詩をよくせり。

※畫去俗云々—芥子園畫傳に見ゆ。※旂—之、焉二字の合音にて「これ」とよむ。

柳維駒父の遺稿を編集して余に序を乞ふ。序して曰く、「余曾て春泥舍召波に洛西の別業に會す。波すなはち余に俳諧を問ふ。答曰く、俳諧は俗語を用ひて俗を離るゝを尙ぶ。俗を離れて俗を用ふ、離俗の法最も難し。かの何がしの禪師が隻手の聲を聞けといふもの、則ち俳諧禪にして離俗の則也。波頓悟す。却つて問ふ、叟が示すところの離俗の説、其の旨玄なりといへども、猶これ工案をこらして我よりして求むるものにあらずや。若かじ、彼も知らず、我も知らず、自然に化して俗を離るゝの捷徑ありや。答曰く、あり。詩を語るべし。子もとより詩をよくす、他に求むべからず。波疑つて敢へて問ふ。それ詩と俳諧といさゝか其の致を異にす、さるを俳諧をすてて詩を語れと云ふ、迂遠なるにあらずや。答曰く、畫家に去俗論あり。曰く、畫去俗無他法、多讀書則書卷之氣上昇、市俗之氣下降矣。學者其慎旂哉。それ畫の俗を去るだも筆を投じて書を讀ましむ。況んや詩と俳諧と何の遠しとする事あらんや。波すなはち悟す。或日又問ふ、古より俳諧の數家各々門戸を分ち、風



※倡ひ一唱へに同じ。

※麥林一伊勢の中  
川乙由。李白、杜  
甫。李白一元稹、白  
居易。この二家の  
風調は卑俗なりと  
の評あり。

調を異にす。いづれの門よりしてか其の堂奥をうかゞはんや。答曰く、俳諧に門戸なし、只これ俳諧門といふを以て門とす。又これ畫論に曰く、諸名家不三分門立戸、門戸自在其中。俳諧又かくの如し。諸流を盡してこれを一囊中に貯へ、みづから其のよきものを選び、用に随つて出す。唯自己の胸中いかんと願るの外他の法なし。しかれども常に其の友を選びて其の人に交るにあらざれば、其の郷に至ることかたし。波問ふ、其の友とするものは誰ぞや。答其角を尋ね、嵐雪を訪ひ、素堂を倡ひ、鬼貫に伴なふ。日々此の四老に會して僅に市城名利の域を離れ、林園に遊び、山水に宴し、酒を酌んで談笑し、句を得る事は専ら不用意を貴ぶ。此の如くする事日々或日又四老に會す。幽賞雅懷はじめの如し。眼を閉ぢて苦吟し、句を得て眼を開く、忽ち四老の所在を失す。知らず、いづれのところに仙化し去るや。恍として一人自ら佇む。時に花香風に和し、月光水に浮ぶ、これ子が俳諧の郷なり。波微笑す。遂に我が社裏に歸して句を吐くこと數千、最も麥林支考を非斥す。余曰く、麥林支考、其の調賤しといへども、巧みに人情世態を盡す。さればまゝ支麥の句法に倣ふも、亦工案の一助ならざるにあらず。詩家に李杜を貴ぶに論なし、猶元白をすてざるが

※野狐禪一生活り。  
自ら禪の奥儀に達  
したりと自負する  
もの。蘇軾「何似東  
坡鐵拄杖。一時驚  
散野狐禪。」  
※吳張一吳偉・張  
平山。共に明の畫  
家にして南畫の正  
統に喜ばれざる北  
畫派の人。支考、麥  
林。支麥一支考、麥  
漢の丁寛田何に從  
つて易を學ぶ。業  
成りて東に歸る。  
何曰く、易已に東  
せり。佛土に召波が西方  
佛土に至りしを嘆  
じて「我が俳諧西  
せり。」といひしな  
り。  
※夜半茗話一この  
書今傳はらず。  
※虎の皮を―外美  
きをして内その實な  
皮といふ。羊質虎  
引きかぶりたる。  
※麥水一天明三年  
癸卯六月十六日加

如くせよ。波曰く、叟我を欺きて野狐禪に引く事なかれ。畫家に吳張を畫魔とす、支麥は則ち俳魔ならくのみ。ますゝ支麥を罵りて、進んで他岐を顧みず。遂に俳諧の佳境を極む。惜しむべし、一旦病に臥して起つこと能はず、形容日々にかけ、湯藥施すべからず。豫め終焉の期をさし、余を招きて手を握つて曰く、恨むらくは叟とともに流行を同じくせざることをと、言ひ終つて涙潸然として泉下に歸しぬ。余三たび泣いて曰く、我が俳諧西せり、我が俳諧西せり。

右の言葉は夜半茗話といふ冊子の中に記せる文なり。夜半茗話は余が机邊の隨筆にて、多くもろゝの人と討論せし事を雜録したるものなり。然るに其の文を其のまゝにて此の集の序とする事はまことに故あり。此の文を見て波子が清韻洒落なるや、其の人となりを知りてその句の偽りなき事を味はふべし。かの虎の皮を引きかうだる羊に類すべからずといふことを、洛下の夜半亭に於て六十二翁蕪村書。

于時安永丁酉冬十二月七日

(春泥發句集序)

正風論

麥水



問曰、今世に蕉門と稱する人々の句風悉くかはれり。是皆翁の道たらんか。いまし發句、いまし附句、其の正風なるといふものを論ぜよ。

答曰、世に行はるゝ蕉風、門を分つ事かぞふべからずとも、皆これ正風なり。只俗理と雅理の差のみ。是を端的に分たんには翁の詞を證とし、二十五ヶ條に云ふ所の俳諧は何の爲にするぞやと問うて、俗談平話を正さん爲なりと答ふ。此の正といふ字を以てすべし。今や俗風の俳諧及び附合・俗談を正さず。加ふるに俗中の卑俗猶邪言をさへに入るゝあり。此の正の字さへ胸にあらば、かばかりには至らじ。其のうち發句は多く形淳なるものなり。然れども蕉門の魂をうくるもの少し。されば

古池や蛙飛込む水の音

此の吟あつて、貞享の頃の門人此の句に依つて始めて正風の眼を開けりとか。是れ此の句中無形の珠有つてしからしむる。此の珠を心付かば自ら發句出ずとも、蕉門の寂に樂しみを置くに足れり。此の二つの物、よく蕉風の發句を貫く近道こゝにあり。

○二條承りぬ。猶委しく聞かん。

賀金澤の人。楓氏、  
を希因に學び支麥  
に私淑す。然るに  
後、學ぶところの  
美濃伊勢風の卑俗  
なるに想到して、  
虚栗の高致を尊  
び、俳諧革新の運  
動を興せり。著書、  
蕉門一夜口授、新  
虚栗等。卷末に元と  
考の偽書ならんと  
いふ。卷末に元と  
七甲戌六月日芭蕉  
翁桃青判とあり。

※東花坊―支考。  
※半時菴―淡々。  
※語語―うち解け  
て語ること。

※三藏・長太―三  
藏は鍛冶屋の徒弟  
長太は丁稚等の通  
稱。  
※世話詞―俗語を  
いふ。

※鄭聲―野卑淫猥  
なる俗曲。論語、  
衛靈公―放鄭聲、  
遠佞人。

※木偶人―木の人  
形、木偶坊。史記、  
孟嘗君傳―見下木偶  
人與士木偶人相與  
語上。

曰、蕉門を以て世に鳴るもの多し。先づ云はゞ美濃の東花坊、續いて此の地の半時菴なり。東花坊は翁の枕席に陪し、自ら語語をうけ、半時菴は其角に従ひて翁に一世を隔つ。皆正しく芭蕉の親韻をうく、世に鳴る眞に宜なり。然れども東花坊は道を俚俗に引下して大いに蕉門を説き廣む、其の功は多し。初め支考なるの日は、句々朴實にして翁の餘韻あれども、終には三藏も長太も聞きうけんをこそとやらん云ひて、ひたぶるに俗談卑理損徳の街に落つ。其の頃の小集は只世話詞の俗本よりいやし、又見るべからず。半時庵は高情奇語、正しく其角が風韻は備はれども、只付句の意、鄭聲をなし、蕩言に流れて、父子同座して見るべからざるに至る。此の兩弊、皆これ俗談を正すの字を忘れたる失のみ。此の弊言を除けば、直なるも曲なるも、魂をうけたる句は蕉風ならざるはなし。さはいへ、又蕉風只直なる事のみよしと定めて、今日も月花の古み、翌日も雪ほととぎすの其の儘なるをいふのみに時を費す一門あり。是は蕉門の木偶人にして、これ又正風ともいひがたし。俳諧はもと一作の表向きにて、諷諫談笑を以てすと云ひながら、正風の本意は諷諫の句に談笑の心なくとも、談笑の句に諷諫のこゝろなくんば有るべからず。







野ざらしを心に風のしむ身かな  
應々といへど叩くや雪の門  
鹿の音に人の顔見る夕かな  
委情の事、前後にかはらざるを知るべし。

去來  
一髮

(俳諧寂葉稿本)

三の情の事

白雄

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮  
淋しき餘情かぎりなし。

秋は來ぬ紅葉は庭に散り敷きぬ道踏み分けてとふ人もなし

凡兆

わたりかけて藻の花覗く流かな  
涼しき餘情限りなし。

道の邊に清水流るゝ柳蔭暫しとてこそ立ちどまりつれ

鼠彈

うき我を淋しがらせよ閑古鳥  
たらちめの湯婆やさめん鐘の聲

せしが、鳥酔の夜  
後鳥明と義絶し自  
ら春秋庵を開く。自  
その主張は、平明  
自然にあり。著書、  
加佐里那止、俳諧  
寂葉、白雄夜話等。  
野ざらしを芭  
蕉の句、野ざらし  
紀行に出づ。  
應々といへど  
原文「いふに」とな  
れるは誤なり。  
一髮、岐阜の人。  
姓氏未詳。此の句  
曠野に出づ。

※秋は來ぬ古今  
集、秋、讀人しら  
ずの歌。

※道の邊に西行  
法師の歌、新古今  
集、夏部に出づ。  
鼠彈、尾張名古屋  
屋の僧。句は曠野  
に出づ。

※肅山、久松氏。  
住。山藩老臣。江戸  
住。土芳、服部氏。  
伊賀上野人。蕉門。  
享保十五年歿、七  
十四歳。  
伊賀上野、築山氏。  
伊賀永年、六十六  
寶永元年歿、六十  
五歳。この句泊船  
集には「秋もまだ  
七夕の夜の明けや  
すし」とあり。

中々に子をこそ思へ秋の暮  
此のごろの思はるゝかな稻の花  
秋いまだ七日の夜の明けやすき  
是等所謂通情なり。親子・夫妻・朋友の情はさらなり。春の花の華かに、秋の夕べ  
の露の脆きたとへ、いづれか通情に漏るゝ事なし。情は嫌ふ。如何にとなればおの  
おのの情にして、聞く人いかで歎ずべきや。  
(俳諧寂葉稿本)

俳諧小言

成美

俳諧は見るもの聞くものにつけて思ひを述ぶる戯なり。それが中に、中昔までは  
たゞ狂言にのみいひ來れるを、近き昔、芭蕉翁より始めて詩歌の情をうつし、風雅  
の心を俗體に云へる事になりたり。たとは、詩經・萬葉等の口體に似たるべし。  
されば、かの蕉翁の門弟子おのがじし得たるかたありて、道のちまたに分れ、糸の  
いろ／＼に亂れたらむやうにいひもてゆけば、其の末々になりては其の師の得たる  
一方をのみ學びうつせば、各々僅かに蕉翁の一體とはいふべく、實に蕉翁を盡せる



ものとはいふべからず。是をたとはゞ、眼くらき人の象といふ獸の尾を撫で足を探りて、漆桶に似たり、箒のやうなりといはむが如く、その象にあらずとはいふべからねども、明眼の人の、眞の象を見たるには大いに違ふべし。さて蕉翁の風雅はいかにぞといふに、かの詩經・萬葉などはかなき草木・魚鳥に多くの思ひをよせたるやうに、風雅の心物にうつりて自らなし出せる言くさ人の耳を驚かし、かく百年の今にもめで興ずるは、ひとへに邪なき風雅の心の根本に培ひ水灌ぐ故に、いひ出せる言の葉くさの一つ／＼に珍らしく新しく自然の姿をなし侍るならし。その詞に出づるに趣あり。たとへば、新奇の詞豪邁の詞をつゞけぬるもその本の趣向拙く、俗意よりならみ出せば、外を飾りて内に實なく品くだりて見ゆるは此のゆゑなり。たとへば、俗語・鄙言なるももつ風雅の心よりなし出さば、人の心にも徹底して鬼神を泣かしむべきも此の處なり。されば古體といひ、近體といへるも些か詞の違ひにして、風雅の趣は更に變り目あるべからず。たと蕉翁一世の作意を鑑として、己々が醜を正し侍らば、自ら向上の一路にも企て至るべきか。蕉翁昔いへる事あり、古人の求めたる跡を求めず、古人の求めたる所を求めよと、南山大師の筆道を傳へた

※古人の求めたる  
云々―風俗文選、  
柴門辭に出づ。  
※南山大師―弘法  
大師。

る詞をもて、門人には示されける。此の心をよく／＼思へば、更に末師を捨てて直ちに蕉翁の心を削り、形を疲らして求めたる所を求むべし。その如く思ひを深めて古き句をも見、我が作るべき句毎に心を用ひば、若しくは神ありて是を通すべきものか。

句を作るに至りて、強ひて雅を求むべからず、努めて俗を去るにあり。俗なる心言葉だに去り捨て侍らば、雅は自らめでたかるべし。雅なる趣珍しき詞を求むる故に、その求むる所につきて、はや俗意は出で来るなり。句の姿に云へる寂槩も、猶又かくの如く強ひて求むるものはおほむね意の俗をあらはす。さりとして句を案ずる事、おろそかにせよといふにはあらず。腸を強く案じて、濫りに口にて云ふべからず、他の句も耳にて聞くべからず。

俳諧をもて、修身齊家の道にあて、或は老佛の心に通はしめて、巧妙に説きなす者あるこそ心得ね。その道が高くせんとして、却つて識れる人の謗をひく。俳諧更にさやうの物ならず。佛語・聖言によらずして、俗中の風雅を述ぶる物なれば、別に趣はある事なり。その趣といふは、霞をあはれび露をかなしめる、人情の思ひを物



によそへ、事にたぐへて、五七の言葉にをかしく連ね出す事なり。かくいはゞ、とてもかくても戲言なれば、口にまかせていかやうにもあらめといふ人侍るべけれど小道といへども観つべき事あり。又無下のやくなしごとにも侍るまじ。

世上に俳諧を唱ふる者、知り顔にして、おほむね俳諧の趣を知らず、白眼放言して、みだりに他の人を誘ふ。その人いかばかりの上手なりやと思ふに、またおなじ俗士なるのみ。たゞに人を驚かし、人にまされりといはれむとす。此の心いかばかりの俗腸なりや。易に、よき者は易をいはず、また知る者はいはず、いふ者は知らずと云へり。これらのあとなし言をいふ我も、亦よく知らざればならし。(四山藁)

### 空想と寫實

子規

俳句をものするには、空想に倚ると寫實に倚るとの二種あり。初學の人概ね空想に倚るを常とす。空想盡くる時は、寫實に倚らざるべからず。寫實には人事と天然とあり。偶然と故意とあり。人事の寫實は難く、天然の寫實は易し。偶然の寫實は材料少く、故意の寫實は材料多し。故に寫實の目的を以て天然の風光を探ること、

最も俳句に適せり。數十日の行脚を爲し得べくんば太だ可なり。公務ある者は、土曜日曜をかけて田舎廻りを爲すも可なり。半日の間を偷みて、郊外に散歩するも可なり。己むなくんば晚餐後の運動に、上野・墨堤を逍遙するも豈二三の佳句を得るに難からんや。花晨可なり、月夕可なり、午烟可なり、夜雨可なり、何れの時か俳句ならざらん。山寺可なり、漁村可なり、廣野可なり、谿流可なり、何れの處か俳句ならざらん。」

空想より得たる句は、最美ならざれば最拙なり。而して最美なるは極めて稀なり。作りし時こそ自ら最美と思へ、半年一年も過ぎて見たらんには、嘔吐を催すべき程いやみなる句ぞ多き。實景を寫しても最美なるは猶得難けれど、第二流位の句は最も得易し。且寫實のものは何年経ても、多少の味を存する者多し。」

始の程は空想ならでは作り得ぬを常とす。やがて實景を寫さんとするに、つかまへ處なき心地して何事も句にならず。度々經驗の上寫實も少し出来るに至れば、寫實程面白く作り易きはなかるべし。空想の陳腐を悟り、寫實の斬新を悟る、又此の時にあり。油畫師牛伴と語る事あり。牛伴曰く、童に於ても空想を以て競争せんに



は老熟の者必ず勝ち、少年の者必ず負く。然れども寫生を以てせんか、少年の者の畫く所のもの、又老熟を驚かすに足ると。眞なる哉。」

作者若し空想に偏すれば、陳腐に墮ち易く自然を得難し。若し寫實に偏すれば、平凡に陥り易く奇闢なり難し。空想に偏する者は、目前の山河郊野に無數の好題目あるを忘れて、徒らに暗中を摸索するの傾向あり。寫實に偏する者は、古代の事物、隔地の景色に無二の新意匠あるを忘れて、目前の小天地に跼蹐するの弊害あり。」

(俳諧大要)

## 寫生

子規

○  
文學者は原料を造化より取ると共に、其の原料を精製して自己理想中の物となす。此の點に於て文學者は第二の造化とも謂ふべし。然れども修飾精製は原料をして完全の美を得せしむべく、又原料を破壊して固有の美をさへ失はしむべし。是其の精製者（文學者）の技倆如何に因る者とす。譬へば少女を美ならしめんとする母が、

白粉を濃く斑に塗り、紅粉を金色に光らしめ、派手にして下品なる衣裳を着せたるが爲に、却つて天然の美をさへ失ひ、一見人をして嘔飯せしめ嘔吐せしむるが如き、其の技倆の拙き者なり。修飾して成功したる者は、完全にして第一流に位すべく、修飾して成功せざる者は、俗氣多くして最下等に位すべし。實景を直寫し天然を摸倣して毫も修飾を加へざる者は、多少の缺點無きに非ざるも最下等に落つる事なし。造化は無意識に宇宙を造りたるを以て、天然物には俗氣少し。其の俗氣あるは多く人爲に屬す。天然を直寫する者亦俗氣少きは此の理なり。只々修飾を加ふる處に俗氣を着け易し。故に大手腕を有する者は、修飾して完備ならしむるに如かずといへども、初學の者は天然を直寫するを可とす。少くも俗氣を脱するを得ん。

○  
實景を直寫したる句は、言はゞ立案者造化、句作者俳人某ともいふべき者にして、趣向立ての上には毫も作者の手柄なし。（其の景を選び出だしたるだけが手柄なり。）故に世人も之を貴ばぬ者多く、作者自身も亦其の價值を知らぬ事屢々なり。然れども多く作り屢々誦し、月を經年を重ねたる後再び之を見るべし。必ず實景的の句の



趣味深きを知らん。空想を凝らして得たる句は、其の當時は無上の名句と感ずるも、一年二年を経て後に之を誦すれば、嘔吐を催すべき者少からず。這般の事は理窟を並べて論ぜんより、實際に就きて試験するが近道なり。  
(俳諧反故籠)

新俳句と月並句

子規

問 新俳句と月並俳句とは句作に差異あるものと考へらる。果して差異あらば、新俳句は如何なる點を主眼とし、月並句は如何なる點を主眼として句作するものなりや。

答 新俳句とは新派俳句の事を謂ふか。新派にも種々あるべく、我盡く之を知らず。若し我が俳句に就きて言はんか。第一、我は直接に感情に訴へんと欲し、彼は往々知識に訴へんと欲す。例へば「藏建つる鄰へは來ず乙鳥 鶯笠」といふ句は藏建つる鄰の富家には燕來らずして、藏も無きわが草の戸には燕來れりとの意なるべし。されば此の句の主眼は、燕は富を喜ばず貧を嫌はず、寧ろ我が家に來るは貧

※鶯笠 田川鳳朗の初號。弘化二年。後藤本八十四。肥後。大戸に出でて知らる。大家として知らる。

※蓬字 傳不詳。

を樂しむなりと、歸納的に斷定する處にあるものにして、即ち知識に訴へたる者なり。これ我が取らざる所なり。しかも此の種の相違は根柢よりの相違なり。第二、我は意匠の陳腐なるを嫌へども、彼は意匠の陳腐を嫌ふこと我より少し。寧ろ彼は陳腐を好み新奇を嫌ふ傾向あり。例へば「黄鳥の初音や老の耳果報 蓬字」の如き、誰が聞きても陳腐なるべきを、此の老俳諧師は今更のやうに作れり。此の句の如き、必ずしも類句を擧げて、而して後始めて其の陳腐を知る者に非ざれども、念の爲に古人の類句を示さんに

鶯の耳に順ふ今年かな 紹巴  
鶯や耳これを得て今朝の春 昌察  
鶯や耳の果報を數ふ年 梅室  
鶯に耳面白き今年かな 乙由

の如きあり。殊に梅室の句は最も相類似せるを見る。第三、我は言語の懈弛を嫌ひ、彼は言語の懈弛を嫌ふ事我よりも少し。寧ろ彼は懈弛を好み、緊密を嫌ふ傾向あり。例へば、「日々に来て蝶の無事をも知られけり 幹雄」の如き、「をも」の語は懈弛

※紹巴 連歌師、里村紹巴、年七十九。年昌察 連歌師、西山昌察、宗因の子なり。梅室 嘉永五年、政年八十、雪と井氏初め、櫻素と號し、初素、櫻素と號む。加賀室は素と信庵、加賀室は素と澤の人、關更門。金上京の嘉永四年。花の天下の許を受。大けの保代を老。大家たり。元文四年乙由。



歿、年六十五。中川氏、麥林舎と號す。伊勢山田の人。涼苑の風を承け所謂麥林の俳風として知らる。  
\*幹雄、明治四十二年歿、年八十二。  
三森氏、名は寛、春秋庵、香楠居等と號す。弊城の人、東京に住す。西馬門にて明治俳壇に於る舊派の重鎮たりき。

の甚だしきものなり。第四、我は音調の調和する限に於て、雅語・俗語・漢語・洋語を嫌はず、彼は洋語を排斥し、漢語は自己が用ひなれたる狭き範圍を出づべからずとし、雅語も多くは用ひず。第五、我に俳諧の系統なく又流派なし、彼は俳諧の系統と流派とを有し、且之有るが爲に特殊の光榮ありと自信せるが如し。従つて其の派の開祖及び其の傳統を受けたる人には特殊の尊敬を表し、且其の人等の著作を無比の價值あるものとす。我はある俳人を尊敬する事あれども、そは其の著作の佳なるが爲なり。されども尊敬を表する俳人の著作といへども、佳なる者と佳ならざる者とあり。正當に言へば我は其の人を尊敬せずして其の著作を尊敬するなり。故に我は多くの反對せる流派に於て、佳句を認め又惡句を認む。——以上五ヶ條の區別は大體を盡せりと信ず。細目は一々枚擧すべからず。  
(俳諧問答)

### 芭蕉と蕪村

子規

美に積極的と消極的とあり。積極的美とは其の意匠の壯大・雄渾・勁健・艶麗・活潑・奇警なる者をいひ、消極的美とは其の意匠の古雅・幽玄・悲慘・沈靜・平易

なるものと言ふ。概して言へば東洋の美術文學は消極的美に傾き、西洋の美術文學は積極的美に傾く。若し時代を以て言へば、國の東西を問はず、上世には消極的美が多く、後世には積極的美多し。(但し壯大雄渾なる者に至りては却つて上世に多きを見る。)されば唐時代の文學より悟入したる芭蕉は、俳句の上に消極の意匠を用ふる事多く、従つて後世芭蕉派と稱する者亦多く之に倣ふ。其の寂といひ、雅といひ、幽玄といひ、細みといひ、以て美の極となす者、盡く消極的ならざるはなし。(但し壯大雄渾の句は芭蕉之有れども、後世に至りては絶えて無し。)故に俳句を學ぶ者消極的美を唯一の美として之を尙び、艶麗なる者、活潑なる者、奇警なる者を見れば則ち以て邪道となし卑俗となす。恰も東洋の美術に心醉する者が、西洋の美術を以て盡く野卑なりとして貶するが如し。艶麗・活潑・奇警なる者の野卑に陥り易きは固より然り。然れども野卑に陥り易きを以て、野卑ならざる者をも棄つるは、其の辨別の明無きが故なり。而して古雅幽玄なる消極的美の弊害は一種の厭味を生じ、今日の俗宗匠の俳句の俗にして嘔吐を催さしむるに至るを見るに、彼の艶麗ならんとして卑俗に陥りたる者に比して、毫も優る所あらざるなり。



積極的美と消極的美とを比較して優劣を判せんことは、到底出來得べきにあらず。されども兩者共に美の要素なることは論を俟たず。其の分量よりして言はゞ、消極的美は美の半面にして、積極的美の他の半面なるべし。消極的美を以て美の全體と思惟せるは、寧ろ見聞の狭きより生ずる誤謬ならんのみ。日本の文學は源平以後地に墮ちて復振はず、殆んど消滅し盡せる際に當つて、芭蕉が俳句に於て美を發揮し、消極的の半面を開きたるは、彼が非凡の才識あるを證するに足る。しかも其の非凡の才識も、積極的美の半面は之を開くに及ばずして逝きぬ。蓋し天は俳諧の名譽を芭蕉の専有に歸せしめずして、更に他の偉人を待ちしにやあらん。去來、文章も其の人にあらざりき。其角・嵐雪も其の人にあらざりき。五色墨の徒固より之を知らず。※新虛栗の時何者をか攫まんとして得る所あらず。芭蕉死後百年に垂んとして、始めて蕪村は現れたり。彼は天命を負うて俳諧壇上に立てり。されども世は彼が第二の芭蕉たることを知らず。彼亦名利に走らず、聞達を求めず、積極的美に於て自得したりと雖も、唯々其の徒と之を樂しむに止れり。

一年四季の中春夏は積極にして秋冬は消極なり。蕪村最も夏を好み、夏の句最も

※五色墨の徒一長  
保十六年宗瑞・尺  
水蓮之素丸・色  
尺の五人が一五  
墨を出して、當時  
の江戸座に對して  
反抗運動を起せる  
事あり。その五人  
をいふ。その五人  
※新虛栗一安永五  
年麥水が蕉門一五  
口授の主張を具夜  
化せしめんとて撰  
びし俳書。

多し。其の佳句も亦春夏の二季に多し。これ既に人に異なるを見る。今試みに蕪村の句を以て芭蕉の句と對照して、以て蕪村が如何に積極的なるかを見ん。

四季の内夏季は最も積極なり。故に夏季の題目には積極的なる者多し。牡丹は花の最も艶麗なる者なり。芭蕉集中牡丹を詠ずる者一二句に過ぎず。其の句又

尾張より東武に下る時

牡丹薬深くわけ出る蜂の名残かな

芭蕉

※桃隣新宅自畫自讚

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

同

等の如き、前者は唯々季の景物として牡丹を用ひ、後者は牡丹を詠じて極めて拙き者なり。蕪村の牡丹を詠ずるは強ち力を用ふるにあらず。しかも手に隨つて佳句を成す。句數も二十首の多きに及ぶ。其の内數首を擧ぐれば、

牡丹散つて打重なりぬ二三片

牡丹剪つて氣の衰ひし夕かな

地車のとどろとひびく牡丹かな

※桃隣一享保四年  
段、年八十一。天  
野氏、太白堂と號  
す。芭蕉の門人。



※琢磨—宅磨姓の  
畫家。天曆の宅磨  
爲氏を祖とし代々  
佛畫をよくす。建  
仁垣の澄賀最も著  
等は不動阿彌陀佛  
の遺作あり。赫突。  
かくやく—赫突。

※舌本—舌根とい  
ふに同じ。

日光の土にも彫れる牡丹かな  
不動畫く琢磨が庭の牡丹かな  
方百里雨雲よせぬ牡丹かな  
金屏のかくやくとして牡丹かな

蟻 垤

蟻王宮朱門を開く牡丹かな

波翻舌本吐紅蓮

閻王の口や牡丹を吐かんとす

其の句又將に牡丹と艶麗を争はんとす。

若葉も亦積極的題目なり。芭蕉の之を詠ずる者一二句にして

招提寺

若葉して御目の雫ぬぐはばや

芭 蕉

日光

あらたふと青葉若葉の日の光

同

の如き皆季の景物として應用したるに過ぎず。蕪村には直ちに若葉を詠じたる者十  
餘句あり。皆若葉の趣味を發揮せり。例

山にそうて小舟漕ぎ行く若葉かな  
蚊帳を出て奈良を立ち行く若葉かな  
不盡一つ埋み残して若葉かな  
窓の灯の梢に上る若葉かな  
絶頂の城たのもしき若葉かな  
蛇を截つて渡る谷間の若葉かな  
をちここに瀧の音聞く若葉かな

雲の峰の句を比較せんに

ひらくとあぐる扇や雲の峰

芭 蕉

雲の峰いくつ崩れて月の山

同

游刀亭

湖や暑さを惜しむ雲の峰

同

※游刀—近江膳所  
の人。蕪門。



月山の句稍力強けれど猶蕪村のに比すべくもあらず。蕪村の句多からずといへども

揚州※の津も見えそめて雲の峰

雲の峰※四澤の水の涸れてより

旅意

廿日路の背中に立つや雲の峰

の如き皆十分の力あるを覺ゆ。五月雨は芭蕉にも

五月雨の雲吹き落せ大井川

五月雨をあつめて早し最上川

の如き雄壯なるものあり。蕪村の句又之に劣らず。

五月雨の大井越えたるかしてさよ

五月雨や大河を前に家二軒

五月雨の堀たのもしき砦かな

夕立の句は芭蕉に無し。蕪村にも二三句あるのみなれども、雄壯當るべからざるの勢あり。

※揚州—支那江蘇省にあり。揚子江より天津に通ずる大運河に臨める商港。  
※四澤の水—陶潜の詩句に「春水滿四澤—夏雲多奇峯」

※門脇殿—平教盛のこと。その宿所が六波羅惣門の脇にありたるよりいふ。  
※雙林寺—京都圓山にあり。

※藥盜む女—后羿不死の藥を西王母に乞ひ得しに、母の妻嬭娥を盗みて食ひ、仙となりて月中に奔れる故事。

夕立や門脇殿の人だまり

夕立や草葉をつかむ村雀

雙林寺獨吟千句

夕立や筆もかわかず一千言

其の外春月・春水・暮春などいへる春の題を、艶なる方に詠み出でたるは蕪村なり。例へば

伽羅くさき人の假寝や朧月

女俱して内裏拜まん朧月

藥盜む女やはある朧月

河内路や東風吹送る巫が袖

片町にさらさ染むるや春の風

春水や四條五條の橋の下

梅散るや螺鈿こぼるゝ卓の上

玉人の座右に開く椿かな







終

